# ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　―I AM…ALL OF ME…―

クラふぉう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　―Ｉ　ＡＭ…ＡＬＬ　ＯＦ　ＭＥ…―

【Ｎコード】
Ｎ８６１４Ｒ

【作者名】
クラふぉう

【あらすじ】
この小説は、ここをクリックした人には言うまでも無いでしょうがインフィニット・ストラトスの二次小説です。
タイトルはシリアスですが話は大半がシリアルのオリ主（♀）主人公モノで、キャラ崩壊（主に一夏）など作者のイタさが全面ににじみ出た小説です。

どんな感想でもお待ちしております。皆様の感想が作者にエクスタ

シーをもたらしエントロピーを加速させ超銀河ユニヴァースするのでできればもっと私を罵っ・・・・・なんでもありません。

そんなんでもよければ、どうぞごゆっくり……

あと、タイトル見てＩＳとソ○ックの二次小説だと思って釣られた人。

後で私のオフィスに来て語り合うように。

オリ主のＩＳ名でピンと来た人も来るように。

このお話は　Ａｒｃａｄｉａ　様との同時掲載でお送りいたします。

# 第1話　「朴月　姫燐」

「よぅ、朝から不景気な顔してるねぇ」

彼は身を投げ出していた机から億劫そうな動きで身体を起こすと、恐らく自分に声をかけたのであろう妙にオッサン臭い口調で喋る少女の方に向き直った。

「……なんだよ」

「そう邪険にしなさんなって。オレは感動したぜ、あの生意気なイギリスっ娘に『日本人を無礼るなぁー！』って叫んだ所は懐にこう、グッとくるモノがあったな。うん」

そう言って、ワザとらしく目頭を押さえながら気分爽快といった表情を浮かべた彼女を彼は胡散臭そうな目で見遣る。

背は男である自分より少し低い位だろうか。それでも女子の中では大分高い方で、女性なのにスカートではなく自分と同じズボンを着用しているが、開けた上着の下のインナーから激しく自己主張する2つの浪漫が彼女は女ですよと大合唱している。

顔立ちは間違いなく美少女と呼ぶに相応しく整ってはいるモノの、今現在浮かべているお淑やかさとはかけ離れた悩みの『な』の字すらなさそうな笑顔と、自分の事を女なのに『オレ』と呼ぶせいでむしろ、美少女と呼ぶより近所の悪ガキと形容した方がしっくりと来てしまう。もったいない。

そして特に目を引いたのが、全世界から人が集まるこの学校でも一際珍しい燃え上がる様な赤い髪で、それをセミロングで適当に切り揃え、どこかに妖怪でもいるのかレーダーがぴょこんと1本と立っていた。

「はぁ……」

さっきの口喧嘩でそんな啖呵を切った覚えは全くないのだが、今は心身共に疲れており、つっこむ気力も無いので彼は適当に生返事を返す。

「あー、なにか用か？　何も無いなら……」

「おっと、そう急かすなよ。今のは挨拶みたいなもんで本題はこっからだ」

そうして彼女は一度大きく息を吸い、キッと目を見開き、彼に向かい叩頭しながら手を合わせ叫んだ。

「たのむ織斑一夏！　オレの恋愛に協力してくれ！」

ピシィ！　と空間に亀裂が走った……ような気がした。

さっきまでの喧騒が嘘のように、休み時間の教室が静寂に包まれる。

1年1組に所属する生徒全ての視線が、1番前の席に座る彼と、頭を下げる少女に集中砲火された。

懐疑、好奇、驚愕、そんな感情が飛び交う張りつめた空気の中、彼――織斑　一夏は、

「……はぁ？」

そんな、覇気の無い返事を返すのが精一杯だった。

# 第1話　「朴月　姫燐」

このままでは訳が分からないよなので、話を少し巻き戻そう。
全世界で今、もっとも注目を浴びている少年、織斑　一夏は、ここ最近の自分の人生を振り返り、ふと憂鬱のため息を漏らした。
ぶっちゃけこれだけ言うと、タダの厨二病が激イタな自己陶酔をしているだけにしか見えないが、もし本当にそうだとしたら彼は今頃、どれほど幸せな男だっただろうか。
いや、ある意味一夏の現状は、男ならこれ程の幸せは無いと断言する猛者が少なからず居るモノだが、生憎と彼はそう思う事ができない草食系でチェリーなボーイだった。
女、女子、婦女子、乙女、おなご、ミス、ガール、べっぴん、デラべっぴん。教室を見渡す視界に映るはそればかり。渡る廊下も女子ばかり。トイレも離れにある1つを除けば女子用ばかり。
そう、ここは女子校。入学初日の朝のホームルームが終わり、女子生徒達がわき合い合いと新たな学友たちと戯れるここは本来、正真正銘の『男』である一夏が居ていい場所ではない……のだが。

「はぁぁぁぁ～～……」

ああ、なんで自分は『あんな物』を動かせてしまったのだろうか。
机に身を投げ出しながら特大のため息と共に、一夏は自分の手のひら……正確には自分の身体自身とにらめっこする。彼は別に、祖父の遺言でここに来た訳でも、不登校が祟って母親に無理やり入学させられた訳でもない。だが、不条理という点ではこれらといい勝負をしているだろう。
『ＩＳ』……正式名称『インフィニット・ストラトス』。
とある天才でイカれた科学者が創り出した、現代戦最強にして究極の機動兵器。

核となるコアを中心に、手足に部分的なアーマーを装着するパワードスーツ。

その力は、重力を無視し空を鳥の様に自由に飛び、バルカンやミサイルが直撃してもバリアを展開することで傷一つ付かず、圧倒的な出力と人だからこそできる柔軟性を併せ持つ。しかもＩＳの本体を粒子化させる事によって持ち運びにも長けると、ニュートンやライト兄弟、歴代の科学者全員にケンカを売った超兵器。

戦争は変わった……と言う言葉が、まさか現実世界で、しかも自分が生きている内に聞く日が来るなど誰が予測しただろうか。

その現代戦の常識を全てひっくり返してゴミ袋にまとめ、ポイっと捨てた驚異的な兵器は際どい所で成り立っていた世界のバランスをいとも容易くぶち壊し、人々の価値観すらも狂わせた。

だが、そんなＩＳにも唯一にして最大の欠点がある。

それは何故か『女性』しか操れないという、全国のフェミニストが裸足で逃げ出すようなもので結果、世界は女尊男卑が当たり前。男など、女の奴隷であるという風潮が全国的に広がり、全国の野郎共は涙を呑む生活を強いられてきた。そう、

「あー、疲れた……」

ここで身を投げ出しながら、ポへ～と腑抜けている男以外は。

織斑　一夏、全世界でたった１人だけ『男』でありながら、『女』しか動かせない筈のＩＳを動かせる人間。それが彼の通り名だ。

そしてここは『ＩＳ学園』。その名の通り、ＩＳの操縦者を養成するために作られた世界唯一の高等学校だ。分校も無いため、世界中から国籍を問わず様々な生徒が集まって来るのが特徴の１つだが、まぁ当然、女性しか動かせないので世界中から集まってこようが結局女性だらけな訳で。

たった独りのロンリーボーイ、一夏は肩身が狭い思いをしながら過去を羨む。

思えばここ最近、ロクな事が無い。
高校受験の会場を間違えた事から始まり、迷子になった先にあったＩＳを起動させてしまい此処への入学が勝手に決まってしまった事や、そこには女の子しかおらず一時も気が休まらない事や、今まで何をしているのか知らなかった姉がここで教鞭を振るっており、今朝さっそく自分もその鞭を出席簿で叩かれるという形で受けた事や、極めつけは先程のイギリスからの代表候補生……セシリアとか言ったか。に、よく分からない理由で目を付けられてしまった。
……まぁ、千冬姉が何をしているのか分かった事や、幼馴染の篠ノ之　箒と６年振りに再会できたのは嬉しかったけど。

だが、一夏はまだ知らない。
ここから先、もっとも疲れるイベントが待っていることに。
織斑一夏が犯した失態はただ１つ。それは先程のイギリス人、セシリア・オルコットなど可愛く思えてくる『変人』に目を付けられてしまったことだ。
――――オレの想像以上に、コイツは使える。
口元を楽しそうに歪ませた彼女はヘッドホンを外して首にかけ、己が愛するヘヴィメタルと自分の席に心の中でしばしの別れを告げると、定めた獲物の正面へと脇目も振らずに進み、言った。

「よぅ、朝から不景気な顔してるねぇ」

そうして、物語は冒頭に戻る……。

●○●

「……おい、これはどういうことだ一夏」

沈黙が支配する教室に響いた第2声は、いつの間にか一夏の隣までボソンジャンプしていた6年振りに再会した彼の幼馴染みこと、篠ノ之　箒だった。それが起爆剤であったかのように、他のクラスメイト達による質問と言う名の爆撃が投下される。

「ねぇねぇねぇ、今のってどういう事!?　告白なの!?　コンフェションなの!?」

「うわぁ～、先越されたぁ～～～～!!」

「速さは文化の基本法則と言うけど、いくらなんでも速過ぎじゃない!?」

「さぁ吐けッ!　いつの間にこんな女を作ったのだ!?」

「い、一体なにがどうなっていますの!?」

それはこっちが聞きたいよ。

一夏が心の中でそんな事を切実に思ってると、いきなり女性のモノとは思えないバカ力でグイっと腕を引っ張られ、

「ここじゃちょぃと話辛いな。屋上に行くぞ、織斑」

次の授業まであと数分と無いのに、物凄いスピードで屋上へと拉致られてしまった。

ちなみに教室を出た瞬間、千冬と副担任の山田先生とすれ違ったが、2人共ポカーンとした表情で自分達を見送ったとき、一夏が「千冬姉があんな顔するとこ初めて見た」とか思ってしまったのはどうでもいい余談である。

○●○

「はぁ～、風が気持ちいいなぁ～」

屋上の扉を開き、フェンスの方へと小走りすると両手を広げ、身体を優しく撫でる春風を全身に感じながら彼女は、この解放感に心から酔いしれていた。

「授業、始まったなぁ……初日なのに……」

一方、鳴ってしまった2時間目が始まるチャイムを背に一夏は、サボタージュの背徳感と帰ったら待ち受けているであろう教師であり姉である千冬の説教を、今日の空模様のように心から憂鬱に思っていた。

「どうした、暗いぞ織斑。晴れて無いのは確かに残念だけどなぁ」
「誰のせいで暗くなってると思ってるんだ……」
「あー……その件は悪かった。謝罪する。だが、ちょっと急を要する件だったからな」

急を要する件？　一夏が首を傾げるのを図ったように、彼女は事情を説明しだした。

「まず始めに誤解を解いておこう。オレは、別にお前の事を愛してる訳じゃない」
「そりゃ、俺達は初対面だからな。ここでいきなり愛してるなんて言われても、正直困る」
「あー……そういう訳じゃないんだが、まぁいいや」

アレで誤解しないのか……と小声で聞こえたが、どういう訳だったのだろう。と心底分かりませんといった表情を浮かべる唐変木。

「とにかく、織斑にはオレの恋愛に協力して欲しいんだ」

「恋愛……？」

その言葉に眉をしかめる一夏。

どこか要領が掴めない。このＩＳ学園には女性しかおらず、『彼女』の恋愛対象になるような男は１人も……そこで、ようやく自分の見落としに気が付く。

「も、もしかして俺と！？」

そう、必然的にそうなってしまうのだ。

この女体パラダイスであるＩＳ学園において唯一の例外。恋愛対象である男は自分しか居ない。生まれてこの方、異性に告白されるなど初めてで、どう返事しようかあたふたしていると一夏を見て彼女は心底呆れたような表情を浮かべ、

「お前……人の話聞いてたか？　勘違いするなよ。さっきも言った通りオレは、お前にライクは抱いていてもラヴな感情はこれっぽっちも無い。因みにツンデレでもないぞ」

「え……じゃあ、どういうことだ？」

少しばかりがっかりとした気持ちになるが、まぁ仕方ない。

一夏は、更に膨れ上がった疑問を投げかける。

「恋愛に協力するもなにも、相手がいないじゃないか。男は俺だけだし……もしかして遠距離恋愛ってヤツか？　文通とか」

「年の割に随分古典的な恋愛手段思いつくなオィ……まぁ、それも悪くは無いがハズレだ」

これもハズレ？　自分は決して頭が良い方ではないが、これ以上の可能性なんてあるのか？　と先程から頭をフル回転させているが、

答えは見付からない。
そんな一夏の姿を面白そうに眺めながら、彼女は人差し指をピン、と立て、

「じゃあ1つ目のヒントだ。まず、この学校は何でしょう？」
「何ってそりゃあ……ここはＩＳ学園だろ？」
「うーん、惜しいな。もうちょっと根本的な所だ」

根本的……？　この学校は、ＩＳの事を教える為に作られた学校で、ＩＳ以外に特徴なんて……あ。

「もしかして、女子校って所か？」
「大正解だ。聡明な奴はお姉さん嫌いじゃないぞ」

同年代じゃん……というつっこみを何とか飲み込み、その時ふと思いついた可能性を提示する。

「まさかお前、俺と同じで間違えてここに来たんじゃ……」
「残念、続いて2つ目。オレはこの学校が女子校だという事を知って入学した。つーかお前くらいだ、自分の進路を決める試験会場を間違えるバカなんざ」

いや、まぁ事実だが、もうちょっと言い方ってもんが……と傷ついてる一夏を無視し、彼女は3本目の指を立てた。

「じゃあ、ラストに大ヒント。オレは、ここＩＳ学園に新たな『恋』を求めてやって来た。お前が居るとは知らずに、だ。ここまで言ったらもう分かるよな」
「え……だって……えぇ？」

流石の一夏でも、もう予想はできていた。だが理解ができない。
確かに、この予想が確かなら今までの彼女の言動全てが納得いくモノになる。だが、それは正にチェス盤をひっくり返すなんてレベルではなく、全ての前提を、この世界の必然すらひっくり返した…
…あえて言うなればチェス盤をちゃぶ台返ししたような予想なのだ。

「ふふん、どうやらデッドエンド（真実）に辿り着いたみたいだな」

そう呟くと、彼女は大手を広げ、まるで城に辿り着いた勇者と対話する魔王の如く威風堂々と宣言した。

「そう！　オレは！　可愛い女の子が、大ッ、大ッ、大好きなのだぁぁぁぁーーーーー！！！」

ズガガーン！　と雷のようなイメージが彼女の背後を奔り、その全身全霊を込めた叫びは木霊となり、蒼い海と曇り空へと溶けていく。

無論、ライクじゃなくてラヴで！　と締めくくる彼女の声で、半放心状態になっていた一夏の脳みそがようやく稼働を始め、そこでようやく

「えええええぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーーーーー！？！？」

少し遅れて、また特大の木霊が屋上から世界へと消えていった。

●○●

「よーう、少しは落ち着いたか？」

「あ、ああ……」

2人はいつまでも立っているのに疲れたので、適当に座れそうな所に並んで座ることにした。

彼女が持っていた水を貰い一息つく一夏だったが、まだ頭の中は混乱のるつぼだ。

「あ、あのさ、念のためもう一度確認するけど、お前ってもしかして、その……レズビアンって奴……なのか？」

「格調高く言うと百合だが、まあ大方間違っては無いな」

改めて宣言され、一夏は強烈なカルチャーショックを受けた。

そういう人が居るって言うのは聞いた事があるし、悪友の家でその手のマンガを読まされそしてその場で力説されたことがある（無論、ドン引きした）が、まさかこうして目の前に、しかも自分のクラスメイトとして出会うとは思ってもみなかったからだ。

「なんだ、同性愛がそんなに珍しいか？」

「だ、だって……そりゃ……」

自分と、価値観が全く違う人間。

ただ、それだけだというのに、一夏には彼女がどこか、とても遠い存在に思えてしまう。

「まぁ、無理もないわな。多分オレだってお前がホモだったらドン引きする」

「えー……」

なんか、とても理不尽な物を感じるが……いやそれ以前に自分はホモなどでは断じて無いが。

「織斑が引くのは自由だし、オレだって気にしない。でもな、なんでそれを今、お前に告白したのか。その理由だけは考えて欲しい」
「告白の……理由？」
そう、そもそもなんで俺達はここで話しているのだったか。
この話のルーツは――――
「恋愛に協力してほしい。……って奴だよな」
「ザッツライト、その通りだ」
なぜ、彼女が俺にこんな話をしたのか。
その理由が……イマイチよく分からない。
一夏の混乱は更に深まっていくばかりであった。
「分かりませんって顔だな。理由としては、まず協力関係を結ぶ前にオレの事を少しでも理解して欲しかった。って所かな」
理解と信頼なき協力などあり得ない。
簡単な事だ、例えその人物の事を一切知らずとも、信頼に値し、目的のために使えると判断できる力さえ有れば人と人は協力する事ができる。その逆も叱り。利害さえ一致すれば、数が多い事に越したことはないからだ。
だが、その両方を知らない人物と協力するとなれば別だ。
人は見ず知らずの力量も分からない人間に、己の背中を預けられるだろうか？
答えはＮＯ。勝手に裏切る可能性だってあるし、自分の足手まといになる可能性もある。無論、その両方が襲いかからないとも限らない。
当然、前者でもその可能性が無いとは言い切れないが、まだある

程度の予測を立てる事ができる分マシだ。しかし、後者に至ってはそれすらできない。

だから彼女は己の秘密を暴露した。少しでも、一夏の信頼と理解を得るために。

「……それでも分からないな。そもそも、なんで俺に頼むんだよ？」

恋愛経験皆無の自分よりも、もっと相応しい人物がこの学園には居るんじゃないだろうか？

その疑問に、彼女はとっても簡素な言葉で答えた。

「それは織斑、お前が男だからだ」

「男だから？」

「そうだ、お前も知っての通りこのＩＳ学園はお前以外全員女のパラダイス。言わば桃源郷。もしくはヘブン」

「は、はぁ……」

そこまで言う物だろうか？　彼女を見ていると、もしかして自分は女子への執着というか、そういう物が枯れているのではないかと思わず錯覚しまう。

「そこに１匹男（イケメン）を投げ込んでみろ。どうなったかは身に沁みてるはずだぜ？」

「ああ、確かに……」

この学園に入学して以来、一夏は常に誰かの視線に晒されて来た。

教室はもちろん、校庭、廊下、門、あげくの果てにはトイレまで、ありとあらゆる所でまるで見世物動物のような扱いを受け、彼は心底ウンザリとしていた。

「だからこそ、意味がある」
「意味？」
「織斑、オレがお前に頼みたいのは、紹介だ」
「しょ、紹介？」
「非常に歯がゆいがオレが１個人である以上、限界がある。１日に会ってお茶に誘える量も、お互いの将来について語り合う時間もほんの少ししか無い」

確かに、この学園の敷地は非常に広大で、それに見合う全校生徒がいる。
その全てをチェックすることは、１個人の力では到底不可能だ。

「だが織斑、お前は逆だ。お前はほっといても逆に人を夜中の蛍光灯の用に自分から引きよせてくれる。そこでお前の眼にかなった女の子をオレに紹介してくれるだけで良い。無論、それなりに謝礼は弾むぜ？」
「……確かに、そうだな。その表現はどうかと思うけど」

今日だけでも、一体何人の女子と出会っただろうか？　中には間違いなく自分より学年が上の人だって居たし、教師だって居たような気がした。確かに彼女の言う事は利に叶っている。

「納得したけど全く、勘弁して欲しいよなぁ。なんかここ最近、厄介事ばっかりだ。俺が男でＩＳを動かせるって理由だけで……」
「……お前、本当に、本当にそれだけだと思ってんのか？」
「へ？　それって、どういう……」

彼女の非常に驚いたような、それでいて壮大な呆れと、ほんの少しの怒気を孕んだような表情に、思わず一夏の声が詰まる。今まで

の、どこかおどけたような声色が一切成りを潜め、今までにない真剣な眼差しが一夏を突く。

「織斑、これはオレからの忠告だ。お前が思っているほど、お前が今口走った『だけ』ってヤツは決して軽く無い。むしろこっから先、お前はその『だけ』のせいで2度と今までの過ごして来た生活には戻れないだろうな」

「なっ……！？」

一夏は、彼女の言ってる事がすぐには分からなかった。

もう、2度とあの平穏な、普通に学校に行って、将来役に立つか分からない勉強を眠気眼でノートに取って、帰りに友人達とバカをしたり、家に帰って晩御飯を作って姉の帰りを待ち、共に笑いながら夕食をつつき、明日に供えて寝る。

そんな退屈ながらも素晴らしく、毎日が輝いていたあの日々が戻らない……？

「な、なんでそんなことが……」

「言えるのかって？　答えは簡単、それはお前が世界のバランスすらひっくり返せる超兵器を動かせる唯一の男だからさ。今頃、世界各国のお偉いさんはお前の腹を解剖したくてウズウズしてる頃だろうな」

立て続けに突き付けられる事実に、脳の処理が追い付いていない一夏の目の前に座り、彼の胸をトントン、と突きながら、明日の天気でも言うかのように彼女は話を続ける。

「お前が自分の事をどの程度だと思ってたのか知らないが、お前の身体には一切の膨張抜きにこの世界をぶち壊せる秘密が隠されている。当然、その秘密を狙う輩はこの世に腐るほどいるぜ」

「……教えてくれ、その事についても」

「ああ、いいぜ。今のお前はオレにとっても、いや誰にとっても金の卵だ。例えばオレが、今この瞬間お前を拉致って然るべき所に連れてったとする。きっとそれだけでオレは一生遊んで暮らせる金を得られるだろうな。当然、俺の場合なら個人だからこんな事しかできないが、国クラスならもっとエグイ方法も平気で使って来る。だからだろうな、織斑先生がお前をここに入学させたのも」

「千冬姉が！？」

「そうとしか考えられねェよ。あらゆる国家機関に属さないＩＳ学園は言ってしまえば１つの国だ。国家権力に対抗するには、国家権力しかない。無茶な要求はつっ返せるし、誘拐でもしようものなら即国際問題だ。そのうえ、弟を自分の手元に置く事ができる。よくもまぁ、ここまで完璧な環境が有ったモンだぜ。って、おい織斑？」

一夏は、ただ俯き歯を食いしばる事しかできなかった。

どれほど、自分は今まで無知で愚かだったのだろう。

誰かを護りたい？　自惚れもいい所だ。結局、俺はまた千冬姉に護られている。そんな俺が、誰かを護る事なんて出来るわけが無い。

結局、俺はあの日から何も成長していないッ……！

そんな無力感に打ちひしがれる少年を見て、彼女は思う。

（……あちゃー、もしかして地雷踏んじゃったかなこりゃ……）

始めは軽い警告のつもりだったのだが、思わず熱が入り過ぎてしまった。

何度反省しても思った事を包み隠さず、しかもやたら刺々しく言ってしまうのは何度やってしまっても止められない悪癖だ。こんなんだからモテないんだろうか。

このまま気まずい空気にしとくのは耐えられないので、立ち上がってとにかく何か話題を……、

「あー、その、まぁ何だ。クヨクヨすんなって！　人生は長いんだから」
「……いい？」
「何度でも立ち上が……はぃ？」
「教えてくれ、俺はどうすればいいんだ!?　どうすれば俺は千冬姉に護られずに、1人で立つ事ができるんだ！　昔から親が居ない俺を何時だって、どんな時だって俺の代わりに千冬姉は傷ついてくれた。護ってくれた！　嫌なんだよ、もう俺の為に千冬姉が傷つくのは!!　俺は……俺は……」

彼女の肩を潰れてしまいそうな程の力で握り、溢れそうな涙を堪えながら一夏は叫ぶ。それは彼の本心。今まで誰にも、千冬にすら吐露しなかった心からの叫びだった。
力無く、その場に力無く膝を付く一夏。
いつまで、2人はそうしていたのだろうか。
彼女は、そんな情けない彼の姿を見てため息を1つ付く。
そして少し考えた後、うん、と首を1回縦に振るとゆっくりと口を開いた。

「……なら、強くなるんだな」
「……え？」
「誰かに護られるのが嫌なら。誰かに護られる必要が無いくらい、お前自身が強くなっちまえばいいのさ。簡単だろ？」
「でも……どうすれば……」
「とりあえず、男ならシャキッと立つ！　ハリィアーップ！」
「は、はいぃ!?」

強く命令されたせいで、思わず敬語で返してしまい、なぜかしっかり直立してまでしまっている。

「そう、背筋は真っ直ぐ、顎は引く！　これからオレの問いには口で（ピー）たれる前に言葉の前と後ろに『サー』を付けろ！　分かったかこの（禁則事項）が！」
「サ、サーイエッサー！」
「ふざけるな！　大声を出せ！　（都知事による規制）落としたか！？」
「サーイエッサー！！！」

とうとう受け答えすら軍人風になってしまった。

「織斑一夏訓練兵！　ここは何処だ！！？」
「サー！　ＩＳ学園でありますサー！」
「では、お前の特技はなんだ！！？」
「え？　ええっと、家事全般とマッサージ……」
「んな事は聞いていないバカ者！！　お前が、お前にしかできない事を聞いているんだ！」
「サ、サー！　お、男でありながらＩＳを動かせることであります！　サー！」
「そうだ！　そしてオレは誰だ！？」
「サー！　教官はええっと……あれ？」
「なんだと！？　そんな事も忘れたのかこの……」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！？　冗談抜きで、お前は誰なんだよ！？　まだ名前すら聞いて無いぞ俺！？」
「……へ？」

その言葉に彼女は質問を止めると、顎に手を置いてあっちをウロウロ、こっちをウロウロ、結構広い屋上をぐるっと１周してまた一夏の所に戻って来た辺りで、

「……オレ、まだ名前言ってなかったっけ？」
「言ってないよ！　つーか前フリ長いな！？」

普段はこんな大声を出すことが滅多に無い一夏だが、今回に限っては全くの無意識に腹の底から全身全霊でつっこんでいた。

「いやー悪い悪い。今まであんまりにも会話がスムーズに進んでたからつい……ははっ、ははは」

苦笑いを浮かべながら後頭部をポリポリする謎の少女Ａ（仮）。
一夏はもう色々と脱力が止まらなかった。今まで完全に忘れていた彼女と、そして自分自身に。

「ほんじゃま、改めまして！　耳の穴かっぽじってよーく聞きな。オレの名は」
「朴月（ほおづき）！　朴月（ほおづき）　姫燐（きりん）だ！」

「朴月……姫燐……いい名前だな」
「だろ？　でも褒めたって惚れないぞ？　めんどかったらキリでもいいぜ。そっちのが慣れてるし」
「ああ、それじゃあこれからよろしくな、キリ。代わりに、俺の事も一夏って呼んでくれないか？」
「おう！　よろしくな一夏！」

お互いに笑いながら名前を言って握手を交わす。ああ、これぞ青春。これぞ学園モノ。

「……なんつー奴だ、オレも一応女だってのに。オレがノンケだったら即死だったかも。織斑一夏、恐ろしい男……」

「ん、なんか言ったか？」
「なんでもねーよ、ケッ」
（……え、俺なんか嫌われる様な事した？）

天然の特１級フラグ建築士、ああ、なんて眩しい。その能力さえあれば……と羨む眼差しどこ吹く風か、鈍感を極めた彼には届かない。

「それよりキリ、さっきの質問なんだけど……」
「ああ、その事だな。さっきも言ったが、お前は護られるだけの自分が嫌なんだな？」
「……ああ、その通りだ」
「だったら、この学園ほど最適な機関はそうそう無いぜ。なんせ、ここは現代最強の兵器の専門学校だ。お前より強い奴は山ほど居るから相手には困らないし、授業でも強くなる為の方法も教えてくれる。そして何より……」

「このオレが、協力者としてお前を全力でサポートしてやるからな！　問題無しだ！」

「ふむ、確かに……ここはＩＳの専門学校、トレーニングマシンだってあるし、それにキリも……キリも？」

なぜだ、一体いつの間にそういう話になっている？
ようやく無くなりかけてた疑念がまた沸々と顔を出す。

「あ？　決まってるじゃねえか。一夏がオレの恋をサポートする。その代わりにオレが一夏が強くなるのをサポートする。世の中は等価交換で出来ているんだぜ？」
「ちょ、ちょっと待て！　何でもう俺が協力することが決定して…

…」

「大丈夫大丈夫、オレこう見えてもそこそこ強いから」

姫燐はそう言って堂々とその豊満な胸を張るが、一夏としてはどうしても一抹の不安がのこる。

「……本当に強いのか、お前？」

何て言うか、一夏がイメージする実力者と呼ばれる人種と目の前の彼女は、余りにもかけ離れすぎている。少なくとも、一夏の中では同性愛者ではない。

「うーん、じゃあオレが『専用機』を持ってるって言えば少しは分かるか？」

「専用機？　なんだそれ？」

「……あー、まずそっからか。ホント何も知らないなお前」

「う……」

「あーもう、いちいち落ち込むなって。これから知ってけばいいんだからさ」

姫燐がそう言って背中を叩きながら励ますも、それでも、一夏の顔が晴れることは無い。

（うーん、本当は校則違反だからやりたくないんだけど、まぁいっか）

オレは、一夏をサポートすると決めた。そして今、彼の精神状態は好ましくない。

何事もスタートがダメなら全てダメになる。それが彼女の持論だ。

だから、ちょいと一肌脱ぎますか！

「よっし一夏！」
「ん、なんだよキリ」
「行くぞ！」
「へ？　あ、ちょ、どこまッ！？」

突然、姫燐は一夏を軽々とお姫様抱っこすると、反対側の柵目掛け全力疾走を始めた。

「ま、待てキリ！　ぶつかる、ぶつかるーーー！？」
「大丈夫だ、せ～のッ！」
「ッ～～～～～～～～～！？！？」

そのまま姫燐は、３メートルはあるだろう柵を何と軽々と飛び越えて見せた。しかも、大の男を１人担いだ状態で。
冷静に考えればそんなこと、出来るはずが無い。だが、今その冷静さは一夏の頭からドロップアウトしていた。
ここで問題です、屋上の柵の向こうには何があるでしょう？

「お、落ちる！？」

正解は、『何も無い』でした☆　分かった方から抽選でハワイの代わりに、一夏くんが天国へ行きそうです。
どんどんと遠ざかる空、吹き荒れる風、近付く地面。
あ、わかった俺死ぬんだ。どうせなら、最後に１度くらいは千冬姉に恩返ししたか……

「一夏ぁ！」
「なんだよ、俺が心安らかに最後を」
「飛ぶぞ！！！」

「迎えようと……え？」

そこで、一夏はようやく気が付いた。自分を抱く腕が、人間のそれでは無く、深く吸い込まれそうな濃い黒に近い蒼色をした鋼鉄の腕であった事に。

それだけでは無い。いつの間にか自分を抱いていた筈の彼女は足も、身体も、顔さえも、深く蒼い装甲を見に纏う、鋼の鉄人と化していた。

耳を澄ませば微かだが姫燐の足元から、何かを放射するような音が聞こえる。

それがゆっくりと落下速度を殺していき、とうとう空中で完全に停止すると、唯一変わらない姫燐の声だけが高らかに響いた。

「ＩＳ起動！　Ｇｏ　ｆｏｒ　Ｉｔ、『シャドウ・ストライダー』！」

その声と共に、一夏を抱っこした鉄の騎兵は大空を駆け抜けた。

「うわぁぁぁぁーーーーーーー！？」

殺人的な加速で行われる急上昇に彼は今日、何度目か分からない絶叫を上げる。

「イィィヤッホォォォォォウ！！！」

「無理死ぬ落ちる堕ちちゃうぅぅぅぅぅ！！！」

テンションがハイに成り過ぎて奇声を上げる姫燐と、別の意味でハイになって良く分からない事まで叫び倒す一夏。

体中を駆け巡る風圧と、胃の中身を全てぶちまけそうな重圧に目を瞑りながらでも意識を失わないように必死にしがみ付くその根性は称賛に値するだろう。

そうして数分後、ようやく姫燐の動きは止まった。

「ヘイ、見てみろよ一夏！」

「ああ分かってる。キリ、お前俺を殺す……つも……り……」

何があっても開くものかと閉じていた瞳を開いた一夏が見たのは、先程までの灰色の世界では無く、ただただ光さす蒼の世界だった。

何も無い、ただ蒼と太陽と風だけが果てしなく流れていくだけの世界。

ふと下を覗き見ると、そこには見慣れない白い地面があった。柔らかそうでアレの上で昼寝したらきっと気持ちがいいだろうななんて事を考えてしまう。

「どうだい、最高の景色だろう？」

「あ、ああ……」

「空はいいぞー、悩みとか重い物全部、地上に置いて行けるからな」

ただの人間である一夏は生まれてこの方、空を飛んだ事など無いが彼女の言う事が何となく分かるような気がした。それほどまでに、この空間は壮大で、寛大で、美しく、息すら忘れてしまいそうなくらい一夏の心を鷲掴みにして放さない。

実際この時、一夏の頭には自分が抱えていた悩みなど、まるで別世界の事であるかのようにちっぽけに思えていた。

「なーんも無い蒼と白。オレ達の始まりに、ピッタリな景色だ」

そう言って彼女は笑った……様な気がした。仮面の下で。

「オレは！　このＩＳ学園で！　必ずオレの嫁を見つけて見せるぞーーーーー！」

「……なにやってんだ？」

いきなり叫びだした姫燐を訝しむような顔で睨む一夏。

「何って、意志表明だけど。一面の蒼空に誓うってなんかカッコいいじゃねぇか」
「ぷっ、なんだそれ」

ふっ、と一夏の顔から笑顔がこぼれた。

「おお、初めて笑ったな」
「え、そうか？」
「ああ、オレは初めて見る。ツチノコの盆踊りよりレアだねこいつは」
「……」
「……」

僅かな沈黙、そして、

「くくく、ヒヒヒッ、だぁーーーはっはっはっはっはっはっはぁ！！！」
「ぷくく、アハハッ、ひぃーーーはっはっはっはっはっはっはぁ！！！」

2人はこの大空に響く程のバカ笑いをした。数分間、気でも触れたかのようにただひたすら笑い続けた。
彼女は、初対面から1度も笑わなかったバカを見て。
彼は、ここ最近、笑うということ自体を忘れていたバカを見て。
嫌な事も、憂鬱も、全てを吹き飛ばしてしまうくらいに彼等は大笑いした。

「ようやく元気が出て来たじゃねぇか、オイ！」
「そうだな！　何か今までふて腐れてたのが勿体無いくらいだ。う

っし、じゃあ俺も！」

一夏は呼吸を大きく吸って、空を揺らす勢いで叫ぶ。

「俺は、絶対に強くなってみせるぞぉーーーーーー！！！」

この大空に、必ず強くなるという誓いを乗せて。

「だから、キリ。協力して欲しい」

「ん？」

「俺が、ちゃんと強くなれるように。この誓いが嘘にならないように、見ていて欲しい」

そう言って二カっと笑う一夏。

その言葉を受け、姫燐は一瞬動きを止めるが、すぐに首をぶるんぶるん振り、

「よく言った！　それでこそ男ってもんだ。あと、分かってるとは思うが」

「分かってるよ。どこまでできるか分からないけど、俺もキリの恋を全力でサポートする。約束だ」

見届け人は、この世界。

一夏は思った。俺は絶対に強くなって見せる。そうして、今度は自力でここに来て見せる。

この蒼と白の世界に、恥じない男に俺はなってやる、と。

「ははっ、しかし、レズに男を説かれるなんてな～」

「なっ、言いやがったなコイツ！　落とすぞ！？」

「……」

「……ん？　あ、一夏？　流石に冗談だぜ、今のは」

突如、一方向を向いたまま黙りこくった一夏の顔を心配そうにのぞき込む姫燐。

そんな一夏は顔面蒼白で、自分の視線に捕らえたある物を震える指で指した。

「な、なぁ、なんだよアレは？」

「何って、ジャンボジェットだな」

「いや、それは分かる。でもな」

「でも？」

「なんでココまで『ジャンボ』なんだ？」

一夏が指刺した物は、自分達の前を『横切る』民間の旅客機であろうジャンボジェットだった。

しかし、それは彼がいつも地上で眺めている奴よりも遥かにジャンボで、しかもあろうことか、ジェットエンジンが赤く光っているような気がした。と言うより、まず飛行機が一般ピーポゥである自分の目の前を横切るということがあり得ない。

「そらな、高度３万５千フィートだ。旅客機くらい普通にいるだろ」

ちなみに高度３万５千フィートとはメートル換算すると、地上から約１万メートルもある。

良い子はここまで旅客機以外では来ないようにしよう！

「大丈夫だ、ＩＳのシールドバリアーのちょっとした応用で酸素とか寒さは問題ない様になってっから……っておーい、一夏？」

姫燐が声を掛けるが反応が無い。

あばらを持つ様な形にして、一夏の顔を見るとプラーンと口からエクトプラズムを出しながら白目向いて気絶していた。想像を絶する事態に遭遇したとき、人はオートで気絶するように作られていると言われている。まさに、今の一夏がそうであるように。合唱。

「むぅ、肝っ玉が小せぇ奴だ。ＩＳ乗りになるんだったらこれ位の高さには慣れとかなきゃならねぇのに」

流石にそれは酷である。

「まぁ、いいか。全てはこれからだ。こっから強くなればいいだけなんだからな」

また一夏をお姫様だっこの体型にして抱きかかえると、姫燐は踵を返し地上へと向けて雲の中へと帰っていった。

「これから楽しみにしてるぜ、一夏」

その無骨な仮面の下に、頬笑みを隠して。

こうして、ＩＳ学園唯一の男とガチレズ男女の奇妙な協力関係は始まった。

２人の決意の果てにある物は何か、茨道の終わりはまだ誰も知らない……。

因みに一夏が次に目を覚ますと、保健室で阿修羅すら凌駕する存在と化した姉が土下座する姫燐を足蹴にしながら、説教と言う名の罵倒を浴びせかけていたので即座に２度寝を決め込んだのは余談である。

# 第2話　「俺の協力者はタクティシャン」

はーい、どうも全国の女子高生のみなさん。
オレ朴月　姫燐ってゆ――――んだ！！　よろしくな！！
好きな物はヘヴィメタルと女体。嫌いな物は耳に入れるタイプのイヤホンと抱き心地が悪い身体。
好きでも嫌いでもないのは消しゴムだよ！
え、なんでいきなりこんな訳分からん事ほざいてるのかって？
いいじゃんか、ちょっとくらいハイになっても。人間だもの。
……本当は昨日のアレのせいで織斑先生から出された反省文の処理をやってたら、いつの間にか朝になっていて一睡もしていないだけなんだがな。ったく、初犯なのになんなんだよ反省文１００枚を明日までにて。絶対に私情入ってるだろあのブラコン教師。
まぁそんなこんなで今、俺の頭は絶好調。だけど目蓋は月光蝶くらった有機物みたいにとろけそうなのだ。
だが、ここでオチオチ眠る訳にはいかない。
別に授業について行けなくなるからじゃない。織斑ティーチャーは確かに恐いが、授業自体はこんな基礎中の基礎、いつ何どき質問されても余裕で答える事ができる。退屈すぎてあくびが出るとは正にこの事だ。
ん？　じゃあなんで寝ないのかって？
それはゲッ○ー線の答え以上に、とーっても簡単なことさ。
だって、

「決闘ですわ！！！」
「おういいぜ、四の五の言うより分かりやすい」

こんなにも楽しそうな祭りを前に、惰眠を貪る奴なんて居ないだろう？

誰だってそーする。オレだってそーする。

## 第二話　「俺の協力者はタクティシャン」

全ての始まりは、織斑千冬が授業中に切り出した『クラス代表』を決める。という話題だった。

その名の通りクラス代表とは、そのクラスを代表する存在であり、もう少し先にあるクラス対抗戦に出たり、生徒会の会議にも顔を出さなければならない言わば、そのクラス――姫燐達の場合は『１年１組の顔』とも呼べる存在である。

普通こういうのは基本的に誰もが渋るモノだが、織斑千冬の自薦他薦は問わないという言葉のせいで、真っ先に吊るし上げられた哀れな子羊が居た。

「はい！　織斑くんを推薦します！」

生贄が決まれば後は芋づる式だ。次々とあちらこちらから一夏を推薦する声が上がる。ちなみにこの時、どさくさに紛れ姫燐も一夏を推薦したのは秘密だ。

しかし実際、姫燐も内心クラス代表は一夏でいいと考えていた。彼はＩＳを扱える唯一の男、言わば世界的な有名人だ。クラスの顔としてこれ以上に相応しい存在はいないだろう。それに、適度な精神的重圧は上を目指すのならもってこいなバネだ。

ぶちゃけてしまえばクラス委員長みたいなモンだし、今の一夏には軽過ぎず重過ぎず、丁度いいプレッシャーだろうと彼女は踏んでいた。と、これは後で一夏への言い訳に使う用の建前で、本心では長引いてもめんどくさいのでさっさと終われ。とそれだけを切望していたのだが。

だからこのままでいいし、他に立候補する者もおらず、どうせこのまま決定だろうと姫燐は見越していたのだが、

「納得が行きませんわ！」

忘れてた、コイツが居た。

見た目麗しいブロンドをロングに伸ばし、１０人中１０人が美少女と言い切るであろう顔立ちは日本人また違う西洋風の魅力に溢れているが、その高過ぎるプライドと常に人を見下した態度で全てが台無しなイギリスからの代表候補生。

「男が代表なんて言い恥さらしですわ！　このセシリア・オルコットに１年間そのような屈辱を味わえとおっしゃるのですか！？」

そう言って机をドン、と叩くセシリア・オルコットことバカ。

女尊男卑。昨今流行りの典型的な社会問題をこじらせているその姿に、姫燐は一昔前に流行ったモンスター父兄さんの面影を重ねていた。

（はぁ……見てくれは悪く無いのになぁ……モンペはちょっと……）

彼女の好みは、知的で聡明、なおかつ幅広い視野を持つボインだ。

少なくともC以上無いモノは乳などではない。ただの壁だ。

ロリはロリで悪くないし、その魅力も十二分に理解しているが、どちらかと言うと姫燐にとって彼女達は恋をする対象ではなく、愛玩動物のように愛でる対象である。

姫燐はペドフェリア達とは例えクアンタムシステムがあろうとも分かり合えないだろう。

だがしかし、超美少女級のロリに向こうから言い寄られてしまった時、姫燐は果たして正気を保っていられるだろうか？　きっと、

彼女は手をワキワキ息をハァハァしながら「今からオレが成長させてやるよ。主に胸周りを」とか口走りながらロリを押し倒しそのまま……話が脱線しすぎたので閑話休題。

その基準で言えば、セシリアは見た目はクリアしているのだが、内面が絶望的なまでにキリの好みとかけ離れ過ぎていた。

少なくとも、このように偏ったモノの見方しかできない様な奴に、彼女の心は絶対に傾きはしない。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で……？」

おーい、そろそろ黙ったほうがいいんじゃないかー？　周りのお前を見る目を見てみろ、すっごい怖いぞー。

と、姫燐はそんな助け舟をジャスチャーで送るが、一切届いて無いどころかそんな船、今のセシリアにとっては不法入国で即撃沈モノでしかないだろう。少し首を傾げただけで、見事にスルーされた。

「イギリスだって大してお国自慢無いだろ」

とうとう、言いたい放題なセシリアの罵詈雑言に一夏が反撃の一手を投じた。

「世界一マズい料理で何年覇者だよ？」

そーなのかー。最初の反撃が料理の事とは、さすが趣味に真っ先に家事を上げる奴は言う事が違う。

「美味しい料理はいくらでもありますわ！　あなた、わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

お前さっき日本のこと壮大にディスってたじゃん。一言一句そのまま返してやろうか……とか姫燐は思ってしまうが、眠気のせいで頭がポポポポーンとなっている今はいいやと、また睡魔との壮絶なドッグファイトに没頭していった。

つか教師、面白くなって来たって顔してないで止めろよ。副担任もオドオドしてないでさ。

悪口雑言も尽きたのか、互いに睨みあい、動かない一瞬即発状態。そして、セシリアは一夏を指さして叫んだ。

「決闘ですわ！」

「おういいぜ、四の五の言うより分かりやすい」

そのひと声に、もっとも沸き立ったのは誰だろうか。

決闘を叩きつけたセシリア・オルコットか？　叩きつけられた織斑一夏か？

いや、違う。先程までの眠気など何処へやら。この時、この瞬間、もっとも愉快そうに口元を歪ませ、もっとも期待に目を輝かせる少女。

言うまでも無い、朴月　姫燐だ。

実は彼女が好きな物は冒頭のアレが全てでは無い。

彼女が、朴月　姫燐が好きな物は、魂震わせる激しいヘヴィメタルと、抱き心地が最高な女体に加えもう１つ、

血肉わき心踊る戦いが、彼女の大好物であった。

○●○

「さーて、どうするつもりだい。一夏くんよ」
「……」
「相手はイギリス代表候補生で、なおかつ専用機持ちの超エリート様。かたやこっちは昨日まで専用機の『せ』の字すら知らなかった超が付くド素人」
「……」
「当然、ハンデを付けてやるキリッ。とまで言いきったんだから、オルコットの奴を余裕で完封できるくらいの勝算はあるんだよなぁ。いーちぃーかくーん？」
「……反省してます」

４時間目の授業が終わり、昼休みが始まるや否や席を立ち、満面の笑みを浮かべながら姫燐は頭を抱える一夏に詰め寄っていた。

「はァ……確かにむかっ腹が立ったのは分かるが、いくらなんでも向こう見ず過ぎだバカ。『例えいかなる時でも冷静さを失うなかれ』。強くなるための鉄則だぜ？」
「……善処します」

腕を組み、はァ……、とまた1つため息をつく姫燐。
しかし、その瞳はくまが出来ていようが相変わらず妖しく輝いている。

「まぁ、やっちまったモンは仕方ねえし、あのまま黙ってたら多分今頃、オレはお前の顔面を修正（グーパン）してただろうしな」
「お、おう……」

物騒な事を呟く姫燐に若干恐怖を感じる一夏。
眼が一種のB級ホラーにでてきそうなくらい怖いから尚更だ。

「さて、説教はここまでだ。今後の事は飯でも食ってゆっくり考えようぜ」
「わかった。……あ、その前にちょっといいか？」
「ん？」

そう言うと一夏は何かを思いついたように自分の席を立つと、窓際の1番前に座るポニーテールへの方に向かい声をかけた。

「箒」
「……」
「篠ノ之さん。一緒に飯喰いに行こうぜ」

おお、早速アタックを仕掛けてくれたか一夏よ。あの篠ノ之　箒を狙うとは分かってるじゃないか。
心の中でそんな事を考える姫燐。
篠ノ之　箒。
あのＩＳを開発した天才科学者、篠ノ之　束の妹で剣道の有段者。セシリアとは対照的な日本人らしい黒く長い髪をポニーテールにした、ちょっと気が強そうなイメージがあるが、凛とした出で立ちの和風美人。
特に目を引くのは高一　のそれとは思えない豊満なバストで目測でもＤ以上はあるだろうか、ブラボー……おおブラボー……そうとしか言いようがない。服の下からでもこれなのだ、その制服を脱いだらいったいどれほどの戦闘力が……！

「大丈夫、きりりー？　鼻血でてるよ？」
「ふっ、大丈夫だ問題無い。生憎と持病なもんでね」

同級生の心配そうな声にビッ、とブルース・リーのような無駄にカッコいい動作で鼻血を拭い、凛々しい表情をする姫燐。これで頭

の中がピンク一色でなければよかったのだが。
ともかく、姫燐は思ったより行動が速い一夏に感動を覚えていた。

「私はいい……」
「そう言うなって、ほら立て立て」
「お、おい！」

じれったくなったのか箒の腕を掴み、無理やり席を立たせる一夏。
お、おーい、流石にそれはマズくないですか一夏くんや。嫌がる女の子の手を無理やり引っ張るとか、そんな学園ドラマとかに出てくる捨て役のヤンキーみたいな行動はどうかと思うぞ。
いくらなんでもやり過ぎな一夏を嗜めようと、姫燐もそそくさと箒の席におもむく。

「なんだ、歩きたくないのか？」
「お、おい！　私は行かないと……！」
「なんなら、おんぶしてやろうか？」

さらにエスカレートするセクハラ魔に、姫燐は制裁を加えようと背後から腕を振り上げ、

「はい、そこま」
「なッ……離せ！！！」
「あ、おわぁ！？」
「でぃうぼぁ！？」

箒が一夏の腕をふり払い、おまけにボディタックルをかまして彼を後ろに吹っ飛ばした。当然、後ろで姫燐☆ダイナマイツ（ただのチョップ）の狙いを定めていた姫燐と共に。
バランスを完全に崩し、いくつかの机と席を巻き込んで後ろに尻

餅を付いてしまう一夏。
だが、思ったほどの衝撃は無かった。どうやら幸いにも、何かがクッションになってくれたようだ。
……クッション？　そう言えば、そんな物この教室にあっただろうか？
その何かを確かめようとして一夏は手を後ろに回して押し……

むにゅん

「むにゅん？」

思わず呆けた声が出てしまう一夏。
なんだろうかこれは？　とても柔らかく、それでいて暖かい。何かとても、そう遥か昔に似たようなモノを感じていたような、それでいてどこか言いようのない背徳感が同時に押し寄せてきて……

「な、な、何をしているのだ一夏ァァ！！？」
「へ？　何って……ッ！？！？？！」

悪鬼羅刹のような形相を浮かべて叫ぶ箒の声に何となく後ろを振り返り、そこでようやく自分がやってしまった事に気が付く。
衝撃が緩和されていた謎、そしてこの感触の謎。
すべてのデッドエンド（真実）は、そこにあった。

「き……キリ……！」
「ぁ……ぅん……」

一夏の尻に敷かれる形で、箒に負けず劣らずグゥレイトゥな右のオパーイを彼の右手に押しつぶされ官能的な声を上げながら、彼女は強烈に後頭部を打ち昏倒していた。

いくら男っぽくてガチレズとは言え、彼女も一介の女性。しかも身体つきだけで言えば、このクラスどころかこの学年でもトップクラスな彼女の胸を鷲掴みにして、何も思わない男など居ないだろう。薔薇とかホゥモとかそんな人種以外は。

当然、一夏は前者も後者も当てはまらない健全な一学生である訳で……

もう、色々と彼の中にある男の基本的衝動がトランザムでＥＸＡＭな明鏡止水的に乙女座でもないがセンチメンタリズムディスティニーを感じずにはいられない。

いつまでも、こうしていたいという悪魔のささやきが一夏の心に渡来する。

だが、そのデビルを一夏ごと狩るデスサイズは無慈悲に振るわれた。

「いつまで触ってるのだいい加減その手を退けえぇぇぇぇぇ！！！」

箒の竜巻すら発生させそうな回し蹴りが頭部に直撃する瞬間、一夏は思ったそうな。

やわらけぇ……と……。

●○●

「ふーん、幼馴染だったのか。篠ノ之達って」

「ああ、そうだ。この６年間、会ってなかったがな」

あの後、すぐに意識を取り戻した姫燐と一夏は食堂に足を運び、姫燐は昼食のラーメンをすすりながら、テーブル席で日替わり定食

を食べる箒と会話をしていた。

「その……先程はすまなかったな。私のせいで」

「いいっていいって。身体が頑丈なのが取り柄だし、それに悪いのは幼馴染とはいえデリカシーの欠片も無いこのバカだ」

そう笑って、隣に座る一夏を苦笑いしながら肘で小突く姫燐。

しかし、一体何がどうしてこうなったのだろうか。

姫燐の隣の席には、身体中を縄でグルグルの簀巻きにされ、デコに『もう二度とセクハラなんてしません。主とヴァルハラと篠ノ之箒に誓います』と書かれた紙をキョンシーのお札のように貼られ、おまけに目隠しと猿轡まで噛まされた、異様というか異質な姿に変わり果てた一夏の姿があった。

お昼時の食堂だというのに彼等の周りだけ、不自然にスペースが空いている。

「……なぁ、篠ノ之。さっきから言おうと思ってたんだが、流石にコレはやり過ぎじゃないか？　周りドン引きしてるし、つーかオレもドン引きしたいし」

姫燐が周囲に目配せしても目が合った途端、皆一様に明後日の方向へと顔を背けてしまう。自分が原因ではないのは分かってるが、女の子に目を逸らされるのは精神的に堪えるものがある。

「いくらなんでも、手を引っ張った位でここまでやるのは……」

「……そうか、気絶していたから覚えて無いのか……」

「は？」

「かまわん、この変態にはこれくらいが丁度いい」

さも当然のように言い切り、味噌汁をすする箒。

もしかして、こいつら幼馴染なだけで実は物凄く仲悪いんじゃ……。

真実を知らない姫燐が、そんな誤解をしてしまうのも無理も無い。

ああ、『知らない』ということは、時としてここまで優しいモノなのか。

流石に哀れに思った、というか周囲の視線に耐えきれなくなった姫燐は一夏の拘束具一式を外すことにした。

「ぷはぁ……あ、ありがとな、キリ」

「どういたしまして。次からは気を付けろよ、一夏……はて？」

なぜ一夏も顔を明後日に背けるのだろうか。微妙に顔が赤いのも謎だ。

ははーん、こいつはもしや……

「何だ一夏、オレに惚れたか？」

「いィ！？　な、ば、そんなんじゃねぇ！！！」

「はっはっは、だよなー。だったら何で明後日向いてんだよ？」

「い、いや……それはその……き、禁則事項です……」

「なーんーでーだーよー？　気になるじゃねぇか」

にしし と笑い、一夏の頬を指で突きながら詰め寄る姫燐。

そちらを向いてしまえば嫌でも目に入る、アレの感覚が忘れられません。

これが一夏の生涯で、初めて墓まで持って行く必要ができた秘密である。

どうやって誤魔化そうと、汗がダラダラ、目を白黒させる一夏への支援砲火は意外な所からやって来た。

「……おい一夏、１つ聞きたい。なんで、お前は朴月とそんなに仲

がいいのだ？」
「え、あ、箒……さん？」
ただし、その砲火の矛先は一夏自身に向いているが。
「さっきから黙って見ていれば、休み時間も所構わず親しげにして……昨日だって、一晩中わたしと一緒だったというのに朴月の話ばかり……あんな自然な笑顔も、朴月にしか見せんし……もしや、その、お前達は……もう……付き合って……」
「はぁ？　何言ってんだよ箒？」
箒の口が進む度に消え入りそうなボリュームになり、最終的には蚊の鳴くような声まで身体も縮めてしまう。俯き、このままガイアと一体化しそうな勢いで表情も視線も沈んでいる。
ここで、ようやく姫燐は悟った。
（ははーん……さては篠ノ之の奴、一夏のことが……）
先程までの一夏に対した辛辣な反応も、幼馴染の自分より、言ってしまえば新参者のオレと一緒に仲良さそうにしているのが気に入らなかった故の嫉妬からで、しかもずっと外を眺めてるフリして、休み時間のオレ達までしっかりチェックしてるんだからこいつはもう大当たりで間違いないだろう。
なんだ、ずっと不機嫌そうな顔してるだけの奴かと思ってたが、普通に可愛い所もあるじゃねえか。
「安心しな。オレとこいつはそんな仲じゃない」
「……でも、昨日のアレはどう見ても……」
本人が否定しても昨日の告白紛いが、どうしても箒の心に引っか

かる。
　まぁ、アレで誤解しない奴は隣で「何がどうなってる姫燐、説明してくれ」って顔をしてる唐変木くらいなものだが。

「大丈夫だ。オレがこいつを好きになるなんて、ヤ○チャが時○天に勝つくらいありえん」
「た、例えはよく分からんが……なぜ、そこまで言い切れるのだ？」
「う……それはだな……」
「俺が説明するよ、箒。キリは同性ントセィャ！？」
（お前は黙ってろバードヘッド！　昨日言ったこと早速忘れたか！？）

　箸の先端で一夏のＫＯＭＥＫＡＭＩを打ち抜き、強制的に口を塞ぐ姫燐。
　自分がガチ百合であることは、決して口外してはならない。
　あの後、姫燐が一夏に取り決めとしておいた事である。
　普通の人間に実は隣の人は同性愛者で、君を狙っている。と、口添えしたらどうなるだろうか？　少なくとも、一般常識を忠実に守っている人間からはドン引きってレベルじゃないくらい引かれて罵倒のフルコンボを受けるだろう。
　無論、そういうこと（キマシタワー）にバッチ来いな人だって居るだろうが、極めて少数派だ。彼女は、自分が異常者だと見抜けないほど恋に盲目ではない。いつの世だって、異端は世俗に迫害される定めにある事は歴史が証明している。
　彼女はそれを見越し、文字通り相手を『堕とす』事を目的とするプランを画策していた。
　自分がレズであることは一夏と自分だけの秘匿とし、狙った女性とは始めは友人として接近し、そしてフラグと親密度を徐々に構築し、最終的には共に禁断の園へ堕ちて計画通り……！　と、ほくそ笑む。
　新世界の神だって、３流悪役のように逃げ出すだろう完璧な作戦だ。

これなら、例え相手がノンケだろうと関係ない。自分から合意の上で百合の花咲き乱れる世界に堕ちてくれるのだから。

……ぶっちゃけ、そこら辺の結婚詐欺と似たような手口ではあるが。

だが当然、コレには相手に自分はレズでは無い……つまり相手に警戒心を抱かせないのが最重要で、いま一夏がしようとした事はこの作戦の根底すら台無しにしかねない危険な行為だったのだ。

「あー、とにかく！　オレはコイツとはそんな関係じゃない！　以上！」

「そ、それでもだな……」

クィックィッ

「？」

姫燐はそれでも納得しない箒を手招きするような手付きで呼び寄せると、決して一夏に聞えないように彼女の耳元で囁き始めた。

（篠ノ之、お前一夏の事が好きだろ？）

（なッ、ば！？？！？　何故その事を！！？）

そらアレで分からない奴なんざ、この広い地球上を探しても絶対に……横でノックダウンしているド天然記念物以外はいないだろう。きっと。

（落ち着け、篠ノ之はコイツがそう簡単に堕ちると思ってんのか？）

（あ……）

（ハッキリ言ってコイツはギネスブック級のニブチンだ。初見でコイツを堕とすとか、まだナ？ンボールセラフを無傷で落とす方が楽に思えてくるぜ。幼馴染ならその辺は分かってるだろ？）

（た、確かに……そうだな。冷静に考えてみれば奴を初見で堕とすなんて、剣道で声を出さずに一本取るくらいあり得ないことだ）

自分から言い出しといて何だが、幼馴染にまでこれ程こき下ろされるとは。

少し出た汗を拭いながら姫燐は続ける。

（だから安心しな。オレと一夏はただちょっと初日にウマが合って仲良くなっただけで、別にアンタの獲物を横取りする気はねぇよ）

アンタ自身を横取りする気は満々だが、というのは胸の内に仕舞ってそっと鍵をかけて。

（そ、そうなのか？　本当に？）

（ああ、オレのもっとも大切にするコレクションに賭けて誓う）

因みに、言うまでも無く殆どが表紙にＲ―１８と書かれた百合モノのゲームや薄い本である。

「そ、そうか。疑って悪かった……」

「いいさいいさ。あ、そうだ、だったら今度お互いの事をもっとよく知るためにお茶でもどうだ？　その後はホテ」

「う、う～ん……」

ここでようやく、一夏が黄泉の川から無事生還を果たした。

「お、やっと還って来たか。一夏」

「う、うん？　ここは……さっきまで俺、知らないお爺さんと話してたはずなんだけど」

「そうか良かったな、盆じゃなくても会えて」

まだハッキリしない頭と痛む米神を押さえる一夏を無視して、姫燐はラーメンのスープを飲み干す。

「ほんじゃま、篠ノ之の誤解も解けた所で本題に移りますか」

「「本題……？」」

「いや、一夏。お前は聞くなよ……」

小首をシンクロさせる変なところで仲が良い2人にツッコミを入れながら、彼女は水を氷ごと一気飲みし、本題を切り出した。

「どうやってオルコットの奴の天狗ッ鼻を叩き折るか、だ」

「あ、ああ、そうだな」

おまえ絶対に今思い出しただろ……とか言うのも今更なのでスルーを決め込む姫燐。

「ハッキリ言うぜ。お前がオルコットに勝てる確率は客観的に見て今のところ……」

「今のところ……？」

「0だ。勝機もキボーもありゃしない」

一夏も予想はしていたが、正面からストレートに言われると若干へコんでしまう。

「だ、だが一夏には専用機が用意されるはずだ。それなら……」

すかさず箒が疑問を口にした。

専用機……本来は各国の代表や企業にのみ与えられる、パイロッ

ト独特のカスタマイズが施された文字通り個人専用のＩＳだ。その大体は量産機とは比べ物にならないスペックを兼ね備えており、単一仕様能力という物を発現する物まである。
超簡単に言ってしまえば、赤い3倍の角付きのようなモノだ。
だが、姫燐はその意見をつまらなそうに吐き捨てる。
「専用機なら尚更だ。織斑先生に問い詰めた所、お前の機体が届くのは仕合当日になるそうだぜ」
「いつの間にそんな情報を……」
「当然だ、戦いにおいて情報は何よりも重要な剣であり盾だからな。ったく、しかも到着予定時刻が仕合の数分前とかアホか。『一次移行』すらしてるヒマ無えっつの」
一次移行――専用機とは言え、そのコアは初めからその人間に合わせられている訳ではない。
ＩＳには、意識に似たような物がある。曖昧だと言われても、それを司るコアの仕組みが判明していないので似たような物としか言えないが、ともかくＩＳのコアは操縦時間と比例して操縦者特性を理解していくのだ。それができて、ようやくその機体は本当にソイツ専用のＩＳとなるのだ。
ところで、何も知らない無垢な子を私色に染め上げるって激しく萌えないか？　少なくともオレは超萌ゑる。と、一夏への説明を締めくくる姫燐。
「さ、最後はともかく、一次移行のことは分かったよ……」
「それにだ。スペックも分からない。武装も分からない。安全性もわからない。んな分からん尽くしな兵器、戦場で使えるかってんだ」
「しかし、ならばどうするのだ？　機体が無いのではどうしようも……」

「有るじゃねえかＩＳなら。この学園に腐るほどな」

一瞬、彼女の言い分が箒には理解できなかった。

それはつまり……

「一夏に、第二世代のＩＳで戦えと言う事か！！？」

「オフコース、当然だろ？　機体が間に合わないんだからさ」

「だ、だからと言ってだな……」

「分かってる、相手は第三世代だ。機体スペックには、埋めがたい差ができるだろうな。だがそれでも、訳のわからん新型でぶっつけ本番するよりは遥かにマシだ」

今、学園で訓練用などに使われている第二世代と、代表候補生が持つ第三世代ではカタログスペック上、比べ物にならない差がある。だが、それでも今の一夏が置かれた状況はそれ以前の問題なのだ。

「じ、じゃあ、どうするんだよ。最新機でも勝ち目が無いのに、旧式の機体で勝ち目なんて本当にあるのかよ？」

一夏が上げる当然の疑問に、にっしっしと悪い笑顔を浮かべ、待ってましたと言わんばかりに姫燐は声を張り上げた。

「いい質問だ。んじゃ、最初のお勉強だ一夏。何で人類は今、生態系の頂点に立ってるんだと思う？」

「な、なんでって……」

「大きさはゾウに劣る。力はゴリラに劣る。速さはチーターに劣る。寿命すらコイに劣る人類が、なんで今この星を我が物顔で支配して

るのか？　その答えは……ここだ」

そう言って彼女は、自分の頭をコンコンと突いた。

「頭脳……頭だと言いたいのか？」

「正解だ篠ノ之。人類最大の武器はここ、知能だ。いいか、一夏」

「『戦術』ってのはな、『作戦』次第でいくらでもひっくり返せるんだよ」

「作戦次第で……ひっくり返せる……」

本当に、できるのか。本当に、俺はセシリアに勝つことができるのか？

まだ見ぬ強敵と、果てしなく弱い自分から来る不安に押しつぶされそうな一夏を、心底楽しそうに横目で見ながら姫燐は席を立つと、ポンと彼の肩に手を置いて、

「このオレに任せな。必ず、お前を勝者にしてやる」

力強い、芯の通ったハッキリとした声で彼女は言い切った。

その何時どんな時であろうと臆さず、怯まず、ただ目の前の困難に堂々と笑みすら浮かべて立ち向かうその姿は、自分の姉と――――自分がもっとも憧れる者の姿と重なって……だからだろうか。

「……ああ、信じてる。姫燐」

彼が一切の迷いなく、そう答えることができたのは。

一夏の答えが余程気にいったのか、彼女は更に嬉しそうに口元を歪まると、ステップとターンとバック転を織り交ぜて出口の方へと走って行った。

「お、おい、どこに行くんだよ、キリ！？」

「ん？　ああ、そうと決まればこうしちゃ居られないからな。色々と下準備を、ね」

「ま、待て朴月！　もうすぐ予鈴が……」

「山田ちゃんには、朴月は腹痛と目眩とヘルニアと虫歯とＬ５が同時に発症して保健室で寝込んでます。と、でも言っといてくれ～～～！」

ずいぶん色々と重症な嘘を言い残して、颯爽退場する銀河……ではないが美少年のような少女。

後に残るは、さっきの姫燐の奇行を噂する周りの喧騒だけ。

決して静かでは無いと言うのに、置いて行かれた一夏と箒の２人にはとても、とても深い静寂が訪れたような気分であった。

「ホント台風のような奴だな、アイツは……さて、俺達も戻るか。箒」

一夏も席を立ち、身体をほぐす。身体が、先程と比べて随分と軽かったのが不思議だった。

大丈夫、不安は無い。きっと、俺とキリならやれる。今はそう信じよう。

「……ああ、そうだな」

あれ？　なんでまた不機嫌なんだ箒は？

「……信じてるだと……私も……言わ……こと無い……」

まぁ、いいか。今はただ、1週間後のセシリアとの決戦に集中しなくては。

俺は強くなるんだ。こんな所で、つまづいてなんかいられない！

一夏は自然と、強く、強く己の手を握っていた。

彼等に訪れた最初の試練。

見える茨はとても刺々しく、道は果てしなく真っ暗だ。

だが、彼等は躊躇わない。ただ、己の誓いと決意に恥じぬ様に進むだけである。

その後、一夏が5時間目が始まった所で何も食べていない事に気が付き、午後の授業が地獄だった事と、姫燐が食堂を出てすぐ、廊下を全力疾走している所を千冬に見付かり、椅子に縛られた状態で午後の授業を受けるハメになったのは、非常に恥ずかしい余談である

## 第2話　「俺の協力者はタクティシャン」（後書き）

ちなみに、作者もオッパイ星人です。
だが貧乳も悪くな（ｒｙ

## 第3話　「セシリア・オルコット」（前書き）

初めに言っておきます。

オルコッ党の皆さま、お許しください！

## 第3話　「セシリア・オルコット」

セシリア・オルコットが自分の机に入っていた手紙に気が付いたのは、2時間目が始まる直前であった。
1時間目が終わり、次の授業の予習をしようと教科書を引き出した時、足に何かが当たったような感触を憶え、足元を見てみると、

（これは……手紙？）

一見デフォルメされたネコのように見えるが、耳から羽のような物が生えており、ルビーの様に真っ赤でクリンとした目が特徴な、何故だかよく分からないが無性にＩＳを起動して穴だらけにしたくなるキャラクターがプリントされた封筒が落ちていた。
それを拾い上げたセシリアは、一体何かと裏を返して見る。
そこには何もプリントされて無い無地に、ど真ん中に黒い文字でデカデカと文字が書きなぐってあった。
ふむ、と顎に手を置いて、そこに書いてある文字とにらめっこするセシリア。
ＩＳ学園の入試模試で主席をとった頭をフル回転させて、思案の海に浸かり、より良い答えを模索し続けた彼女の、長いようで短い数分間。
その果てに、彼女はたった1つの結論へと辿り着いた。

（……さ、さっぱり読めませんわ）

何となくだが、辛うじて漢字だという事は分かる。
だが、何だかフニャフニャしているし、妙に見難いし、自分が日

本にやって来る前に猛勉強した漢字とは似ているようで違う。
日本人は、皆この様に漢字を書くのだろうか？
英語でも、文字を意図的に崩した筆記体と呼ばれる物はあるし、他の国では微妙に書き方やニュアンスが違うことがあるとは言え、ここまで基本と違いが多過ぎるモノは無い。
ということは……、

（誰かの悪戯かしら……？）

全く、これだから島国の庶民は困る。
きっと代表候補生である自分の威光と強さに嫉妬した誰かが、直接戦っては敵わない事を悟り、このような下らない姑息な手段に出たのだろう。

（まったく、プライドの欠片も感じられませんわね）

中を読むまでも無い。どうせ、低能な庶民が無い知恵を必死に絞って考えた自分への怨み辛みしか書かれて無いのだろう。
そう結論付けると彼女は席を立ち、その手紙をゴミ箱に捨てようとしたが丁度そこで授業開始5分前の予鈴が鳴り、仕方なくポケットの中に適当に突っ込んでおくことにした。

（少しはしたないですけど……こんな物、いつでも捨てることは出来きますわね）

そんなことよりも今は、もうすぐ始まる授業の予習が最優先であった。

第3話　『セシリア・オルコット』

姫燐は携帯電話を取り出すと、最近ゲットした中では最高の収穫物（箒の電話番号）へとコールした。

『もしもし、篠ノ之です』

「おぅ、篠ノ之。一夏はどうだ？」

『ああ、朴月か。大丈夫だ、サボってはいない。なにせこの私が常に見張っているからな』

電話越しでも、彼女がそのブラボーバストを自慢げに張っているのが容易に想像できる弾んだ声だ。

放課後に一夏と2人っきりでトレーニングしている現状が、よっぽど幸せなのだろう。愛い奴め。

「そうかそうか、みっちりしごいてやってくれ。大会まであと6日、付け焼刃とは言え、何もしないよりはマシだからな」

『ふふ、任せてくれ。それより聞いてくれ朴月。一夏の奴、私が居ないからといって中学ではなんと帰宅部だったそうなのだ。恐ろしいまでに弱くなっていてな、まったく軟弱者め。今では見る影も無いが、実は小学校のころの一夏は私より強くて凛々しくてそれでいて』

「分かった。よーく分かったから、それはまた今度聞かせてくれ」

ホントどれだけ一夏と一緒なのが嬉しいんだ。学校とはテンションが完全に別人である。

こりゃ攻略には骨が折れそうだ、と心の中でため息を付く姫燐。

「それより、アレ。本当にちゃんと書いてくれたのか？」

『ん、ああ。お前の注文通りに書いたぞ、「果たし状」を』

いま姫燐が立っているのはこの学園内で数少ない、ＩＳを起動する事を許された場所である第３アリーナの会場内。そこの競技場の中央に、彼女は１人ポツンと佇んでいた。

先程、箒が『果たし状』と言った通り、姫燐は『ある人物』と戦う為にここに居る。

だが放課後となってから即ここに来て、もう結構な時間が経った気がするが、待ち人は一向に現れる気配がしない。

「果たし状には、放課後になったらここに来るよう指定しておいた筈なのに、一体どうなってんだ？」

『さぁな、決闘から逃げたか……いや、オルコットの性格からその線は考えられんか……』

「くそっ、わざわざ誰にも見付からない早朝に来て、アイツの机の中に入れた私の苦労を何だと思ってんだ。低血圧なめんなっつの」

そう、セシリアに手紙……いや、果たし状を送ったのは何を隠そうここで独り悪態をつく少女、朴月　姫燐その人であった。

昨日の放課後、姫燐は箒に果たし状を書いて欲しいと頼み込んだ。

最初は自分で書こうとしたが書き方が分からず困っていた所、たまたまそこに居た一夏によると彼女は幼い頃から中々に達筆であるらしく、「それにアイツ、こういうの得意そうだし」という助言からそれなりの報酬（一夏の盗撮写真）と引き換えに依頼したのだ。

まさか一晩でやって深夜に部屋に届けてくれるとは思わなかったが、そこは嬉しい誤算と受け取り、大っ嫌いな早起きをしてまで朝一にセシリアの机へとシュートして超エキサイティングにホームルームまで昼寝を決め込んでいたのだが……。

『しかし何故……ん？　すまない朴月、一夏が呼んでいるから切るぞ』

「ああ、悪かったな。頑張れよ、トレーニングも、一夏の方もな」
『……ッ！　い、言われるまでも無い！　でひゃな！』
必死に声を荒げ、壮大に噛みながら電話を切る箒。
あー、おもろい。こんなにからかい甲斐ある奴、そうは居ないぞ。
にしし、と笑い、携帯をポケットの中に突っ込む。
しっかし、まぁ……
「どこで道草食ってんのかねぇ……あの野郎」

●○●

「せっしー、ポケットから何か落ちたよ～？」
「え？」
教室の掃除当番を任されたセシリアが、今まで握った事すらなかったモップの扱いに苦戦していると、同じく掃除当番の同級生の１人が彼女に声をかけた。
「ああ、コレ？　ご心配なく、ただのゴミですわ。ついでに捨てておいて下さる？」
「でもコレ、お手紙みたいだけど～？」
そう言ってその同級生は手紙を拾い上げると、セシリアの前まで持って来る。
「はぁ……本当に困りますわ。何処の誰だか存じませんが、この様な子供の落書きみたいな文字で……」

「これ、落書きじゃなくて『草書体』だよぉ？」
「は？　そうしょ……なんですの、それ？」
「え～とね、草書体ってのは……」

草書体。
結構な歴史を誇り、簡単に言えば文化の基本法則に則り文字を速く書くことができるように、普段教育で教えている一般的な物とは違い、字画を大幅にカットした文体である。文字ごとに決まった独特の省略をするため、形を覚えなければ読み書きすらできないのが特徴なのだ。
今では滅多に使われず、日本人ですらマトモに読み書きできる人間は少ないモノを、イギリスからの留学生であるセシリアが読めないのも無理らしからぬことであった。

「今の日本では、目上の人とか、大事な人とかに送る時に使われる文章なんだよぉ～」
「だ、大事な人に……そうでしたの……」

危なかった。自分としたことが、とんでもない勘違いをしていたようだ。
このぐにゃぐにゃ文字が、そのような重要なモノだとは夢にも思っていなかった。
これが噂の『東洋の神秘』と言われる奴なのだろうか？

「あ、ありがとうございますわ」
「いえいえ～。どういたしましてぇ～」

しかし、それではこの手紙には何が書かれているのだろう？
わざわざその様な文章を使うのだから、下らない怨み辛みとは一概に言い切れなくなって来た。

なぜか、先程のマスコットの顔を縦にバックリ引き裂かないと開かない形になっている封を少し躊躇いがちに開き、封筒を捨て中を確認するが、やはり予想通り中も同様に草書体でセシリアには全く読めない。

「むむむ、困りましたわねぇ……」
「ん～、せっしー草書体読めないの～？」
「そ、そんなことは！？」
「だったら読んであげよっかぁ～？　その手紙」
「え！？」

とても以外な救援だった。
セシリアはこの眠たげな眼をした同級生を、よく言えばのほほんとした。悪く言えば何も考えてなさそうな、こういった格式ばった物とは無縁の存在だと思っていたのだ。

「わたしの家ってね、仕事柄こういう文字をいっつも使うの。だから、わたしも小さい時から教えられてるんだぁ～♪」

あんまり好きじゃないけどね～、とダボダボの袖を振り回しながら彼女は笑う。
この好機を逃す訳にはいかない。セシリアは、できるだけ『自然な態度』で彼女に解読を頼む事にした。

「そ、それじゃあ『せっかく』なので今回だ・け・は・特別にお願いしますわ」
「はいは～い」

素直じゃないなぁ～、と彼女はセシリアからそのぶかぶかな袖で器用に手紙を受け取ると、ふむふむと草書体に目を通し始めた。

長々と書かれた力作に、目を通すこと数分後。

「なるほど～、そういうことかぁ～」
「なんて、書いてありますの？」
「ん～、誰が出したのかは書いて無かったし、なんか茶色い点々とかもあったけど、とっても簡単に言うとだねぇ、『今日の放課後、第３アリーナで待ってます』って書いてあったよぉ」
「今日の放課後に第３アリーナ！？」

今日の放課後と言えば、もうかなり時間が経っているではないか！

「ッ！　こうしては居られませんわ！　えっと……」
「むふふ～、分かってる。掃除はわたしに任せて行ってきなよ、せっしー」
「恩に着りますわ！」

同級生に礼とモップを渡すと、出口へと全力疾走するセシリア。

「頑張ってねぇ～～～～♪」

袖の中の手を振りながら、同級生は彼女の背中にエールを送る。
それを受けたセシリアの姿はあっという間に、１年１組から居なくなってしまった。

「……ふぅ、それにしても久々に草書体なんて読んだなぁ～」

適当に独り言を言っても返す人間が誰も居ない教室は、何となく寂しいのでさっさと終わらせてしまおうと、やはりぶかぶかな袖で２本のモップを器用に操り掃除を始める同級生だが、

「それにしても果たし状かぁ、古風だねぇ……あれ？　そう言えばわたし、せっしーにあれが果たし状だって言ったっけ？」

先程の自分の言動に、沈思黙考すること少し。

ここで彼女が己の間違いに気が付き、急いでセシリアの後を追ってこの事を伝えれば『あのようなこと』には決してならなかっただろう。

「まぁ、いっか♪　それより早く終わらせてお菓子食べよっと♪」

だが残念ながら彼女は、よく言えばのほほんとした、悪く言えば物事を深く考えない性格であった……。

○●○

セシリア・オルコットの人生は、決して優しいものでは無かった。

当然、人が人として世に生きる以上、人生という奴は誰にでもハードモードを突きつけるのは当たり前である。だが少なくとも、そんじゃそこらの同年代と比べれば、彼女が今まで歩んで来た人生は壮絶すぎるものがあった。

名門貴族である実家の発展に生涯尽力した偉大な母と、婿養子という立場の弱さから誰だろうと卑屈であった父を早くに事故で亡くしたのを皮切りに、莫大な遺産を、築き上げて来た地位を、そしてオルコット家の誇りを汚さんと狙うハイエナ共と渡り合う為に、その貴重な青春を心身共に削る様々な勉学に使い、ようやく代表候補生という椅子まで辿り着いたのだ。

だが、日に日に悪質になっていく老獪な親族たちの手口に限界を感じたセシリアはある日、国のＩＳ操縦者代表となる事を決意する。

自分が最高レベルの重役であるイギリスのＩＳ操縦者代表にさえなってしまえば、オルコット家の名は世界に轟き、その基盤は確固たる物となり、吸収を目論むハイエナ共も尻尾を巻くしかなくなる。
それが彼女の目論見であった。
故に、例えどのような壁が立ちふさがろうと、彼女に敗北や後退などは許されない。
敗北はオルコット家の破滅。しいては、自分自身の破滅。
誰にも頼らず、誰も信じず、一度の失敗すら許されないたった独りの決死行。
そんな孤独な道筋に今、１つの転機が訪れようとしていた……。

●○●

セシリアは廊下を速足で歩き、先程の手紙の内容をリフレインさせていた。
待ち受けているであろうこの生涯、初めてのイベントに嫌でも顔に血が昇り、息が荒くなり、心臓が張り裂けそうになる。
そう、きっと違いない。
あの手紙は名門貴族であり、イギリス代表候補生でもあるこのセシリア・オルコットへ叩きつけられた、

（ら、ラ、ラ……『ラブレター』……ですわよね……）

どうしてこうなった。

先程の暗いモノローグが台無しな今世紀最大の勘違いを孕んだまま、セシリアは悶々と手紙のことについて思いを馳せる。
まず、あの草書体と言う文法。
あのクラスメイトが言うには、滅多に使われない『大事な人』に送る時に使う文字……。
つまり、これはきっと『本当に愛する人』に手紙を送る時に使われる文法なのだろう。
彼女の両親はきっとこの、真実の愛を伝える文法を皆に教える崇高な仕事についているのだ。

（そ、その様なモノで書いて来たということは……やはり間違いありませんわ）

もう本格的に火照りが止まらない顔をブルンブルンと振って、無理やり冷まそうとする。
間違いなのはその無駄に豊かな発想力なのだが、それを彼女に嗜めることかできる存在は今、おやつのドーナツを幸せそうに頬張っており不在である。

（でも、宛名がありませんでしたし……一体どなたが……）

ぱっ、と思いつくのは、この学園唯一の異性である彼だ。
だがあの人をバカにした態度を取る、代表候補生すら知らない明らかに学の無さそうな無礼者が、この様な由緒ある文字で手紙を送って来るだろうか？
それに彼とは6日後、大ゲンカの末に決まった決闘が控えている。
今から決闘する相手に恋文など送るだろうか？
いくらなんでも、それは無いだろう。戦う相手と相思相愛になっても、やり難いだけだ。
そう冷静に判断するセシリア。できれば、もっと根本的な所を冷静

に見つめ直して欲しい。

（で、ででは、送り主はじじじ『女性』……！？）

あの厚顔無恥ではないとすれば、自然とそうなってしまうのだ。

このＩＳ学園には生徒どころか教員も、用務員１人を除いては女性しか居ないのだ。

その用務員も既婚者だと聞いているし、流石に彼では無いだろう。

となれば、残るのは女性しかありえない訳で……。

「ふ、不潔ですわ！」

思わず声を大にして叫んでしまい、周りが何事かと視線を向けるが、今の彼女にはそれすらも意識の外だ。

いくら彼女が女尊男卑主義であろうとも、流石に一般常識ぐらいはある。

女は、男と交わり子を成す。それが自然の摂理だと言うのに、女同士だと？

不潔だ、邪道だ、我々をお創りになった神に対する冒涜だ。

だが、それだというのに……

（何故！？　なんで、こんな……胸の高まりが止まりませんの……！！？）

彼女は、孤独だった。いや、孤独であろうとした。

耳元で甘い言葉をささやく男は皆、自分の向こうにある遺産しか見えておらず、女もさして変わらない。ささやく甘言が愛情か、友情かの違いだけだ。

誰も、この『セシリア・オルコット』という人間を見ようともしない。

だから拒絶した。誰が、貴様らのようなプライドも誇りも無い犬畜生共になびくものか。

何を考えていようか知った事か。ありとあらゆる人間を拒み、見下し、はね除け続けた彼女であったが、そのじつ、心は誰よりも深く『愛』に飢えていた。

愛したい、愛して欲しい、本当の自分を見て欲しい。

その役目を果たすべきであった両親は、彼女の物心つく前に他界し、代わりに彼女が今まで愛し続けたのは『オルコット』という名であった。

『オルコット』の為なら何でもできる。たとえ、泥水をすすり、戦火へ飛び込み、血川にこの身を汚す事となろうとも悔いは無い。

しかし、所詮『オルコット』は名前だ。それ以上の存在になど成れはしない。

苦楽を分かち合う事も、彼女の身体を優しく抱くことも、その名前を……『セシリア』の名を呼ぶことも無い。

それを心のどこかで悟っても、彼女はただ妄信的に『オルコット』を信じ続けた。

そうしなければ、自分はその足で立つことすらできない弱虫だから。

そんな彼女に、『真実の愛を告げる』手紙は訪れた。

もしかして、この人なら自分を、こんな情けない自分を愛してくれるのだろうか？

性別など関係無い。抱きしめて、苦楽を分かち合って、優しく真っ直ぐに目を見て自分の……『セシリア』の名前を呼んでくれるのだろうか？

（……確かめなくては）

もう一度、もう一度だけ、誰かを、信じてみよう。

彼女は息を整え、彼女は運命の扉をゆっくりと……開いた。

○●○

ようやく御出でなすったか。
姫燐は丁度サビに差しかかったヘヴィロックが響くヘッドフォンを外して首に掛けると、開いた扉を、正確にはその扉を開けた人物を見遣った。

「よぅ、重役出勤ごくろうさまなこった。セシリア・オルコット」
「あ、あなたは……朴月　姫燐さん？」
「おお、オレの名前を憶えていてくれたとは、光栄だねぇ」
「え、ええ。なにせ、あのクラスでは唯一、わたくし以外で専用機を持っているお方ですから……」

それに、昨日の食堂で壮大に目立ちまくってましたし……という言葉に片手でおでこを抱えながら、テンションが上がると周りが一切見えなくなる自分を戒める姫燐。

「頼む……昨日の事は今すぐ忘れてくれ」
「わ、わかりましたわ……」

……あれ？　おかしいな。
コイツの性格なら、ここで「はん、専用機持ちの恥さらしですわ。このダニが！」と嫌味の一言でも飛んでくるだろうと思っていたのだが、何時の間にこんなにも謙虚な性格に生まれ変わったのだろうか？
まぁ、殊勝な態度に関心するがどこもおかしくはない。と、姫燐

は話を続ける。

「で、お前はアレを読んだから、ココに来たんで間違いないな？」

「た、確かに、読ませていただきましたわ……」

「だったら……話は早い」

姫燐はヘッドフォンを外し、太陽のアクセサリーが付いたチョーカーに触れ、叫んだ。

「ＩＳ起動。Ｇｏ　ｆｏｒ　ｉｔ『シャドウ・ストライダー』」

「えっ！？」

その瞬間、彼女の身体は宙に浮き、チョーカーから強烈な光が迸る。

次々と展開されていく装甲が、瞬く間に彼女の全身を覆い隠し、先程までタダの少女だった姫燐の姿は、鋼鉄の機人へと変貌していった。

ＩＳにしては非常に珍しい全身装甲（フルアーマー）タイプ。黒に近い蒼色を基調とした、無骨な装甲が随所に散りばめられてありながらも、しなやかな女性の肉体を思わせるデザインだ。

両籠手には、羽のような形状をしたブレード付きの、腕より一回り大きいガントレットが装着されており、両脛にも同様の足用パーツが付いている。

美少女と言えた顔を完全に隠すフルフェイスからは、彼女の象徴でもある燃え上がるような赤い髪が、平時より伸びて腰位までのポニーテールのように突き出ており、金色に淡い発光をする２つのカメラアイからは無表情だというのに、見る者の背筋にナイフを突き立てられたかのような悪寒を走らせる。

ヘッドフォンを持っていた筈の右手にはいつの間にかボロボロの赤いマフラーが握られており、それを首に巻くのが、車で言うキー

を差し込む動作だったかのように、カメラアイが点灯し、周辺の大気が震えた。

もし、この世に『闇夜を馳せる女神像』というものが有るというのなら、このような姿をしているのだろうか。

これが、これが彼女の専用機。『シャドウ・ストライダー』……！

「悪いが、オレはお前の事をまだ何にも知らないんでね。相手になってもらうぜ、セシリア・オルコット」

腕を組み、堂々と宣戦布告を言い渡す姫燐。

その雄々しくも壮麗な姿に、思わず息をのむセシリアであったが、彼女の言葉でようやく本来ここに来た理由を思い出した。

自分は、告白を受ける為にここに来たのでは……？

「で、でも……」

「安心しな。この第３アリーナは貸し切りにしてある」

本来は今日の放課後は３年生の先輩方が使う予定であったが、全員に袖の下（一夏のスナップ写真。全１５種類）を送ると皆快く会場を明け渡してくれた。全く、モテる男は便利である。

しかし、まだここを伝説の木の下だと勘違いしているセシリアには、彼女の意図が上手く伝わらない。

なぜ彼女は告白どころか、自分に向けて臨戦態勢をとっているのだろうか？

これは一体……、

（……ハッ！　そう、そう言うことですのね……）

ようやく彼女は事の次第を理解し、自分のイヤーカフスへと手を

掛ける。

「分かりましたわ。ＩＳ起動、行きますわよ『ブルー・ティアーズ』！」

瞬間、彼女のイヤーカフスも姫燐のチョーカーと同じように眩い輝きを放つ。

姫燐と同じように、装甲が次々とセシリアの身体を包んで行き、『青き雫』はその姿を現した。

姫燐のシャドウ・ストライダーとは違い肌は露出しており、汚れない海のように清らかな青い装甲と、宙を浮く数機のユニット。そして巨大なレーザーライフル、『スターライトｍｋ？』を両手で構えたその可憐な姿は『青の雫』の名に相応しい機体だ。

「ほぅ、射撃型か……んで、その横に浮いてるのはＢＴ兵器（ビット・ウェポン）ってところか」

「ふふっ、どうかしら？　あなたこそ、見た所は近接型の様ですわね。射撃型であるこのブルー・ティアーズとは相性が悪いのではなくて？」

「さぁね。一皮剥けば、実は内蔵火器のオンパレードかもしれないぜ？」

くくくっ、と仮面の下で悪役の様に笑う姫燐。

「さぁ、来いよ。お前の力を見せてみろ」

「それではお言葉通り、わたくしの全てをお見せして差し上げますわ！」

……はて？　やはり何かおかしい。

この様に高圧的な態度に出てやれば、オルコットのような高慢ち

きはすぐにバカにされたと思い冷静さを失うのだが、今日の奴は何と言うか……非常に素直なのだ。

まるで、とても親しい人と触れ合っている時のような……。

その姫燐の予想は、当たらずとも遠からずという奴であった。

（絶対に、認めさせてやりますわ。このセシリア・オルコットの存在を！）

そう、彼女は事の次第を理解していた。壮大に間違った方向に。

お前の事をまだ何も知らない。当然だ、自分と彼女はまだ会って3日しか経っていないのだから、何も知る訳が無い。故に彼女は、この様な手段に出たのだ。

拳と、拳で語り合う。

昔、家にあったので興味本位で読んだ日本の少年マンガで得た知識が、こんな所で役に立つとは思わなかった。

男って、野蛮な生き物ですのね～。と、この時は流し読みしていたが、今ならこの気持が少しは分かるような気がする。

きっと彼女は、とてもシャイなのだ。

タダでさえ告白には勇気がいるのに、女が女に告白するというのは常人が持ち合わせない程の並々ならぬ勇気がいるであろう。

だから彼女はこのような回りくどい手段に出たのだ。

自分の気持ちを少しでも伝え、そしてわたくしの心を少しでも知るために。

今思えば、代表候補生を決める立候補の時にも、彼女はそれを裏付ける行為をしていた。

熱烈な視線も、あの謎の踊りのような物も、今思えばきっと自分に好意を伝えたかったが故の行動だと彼女は悟る。

そんな不器用で、だけど真っ直ぐに自分の事を思ってくれる彼女に愛おしさすら覚えてしまう。

（ですけど……！）

それはそれ、これはこれだ。

今は、全力で彼女の気持ちに答える。それが今の自分に出来るベストだ！

「踊りましょう、このセシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲で！」

そうして、セシリアは己の翼と共に空へ舞い上がる。

致命的かつ奇跡的な勘違いを抱いたまま……。

●○●

まず先手を打ったのは、セシリアだった。

「喰らいなさい！」

セシリアは戦闘を開始してから直ぐに相手との十分な距離を確保すると、空中からスターライトでまだこちらを見上げたまま地上を離れない姫燐に向け発射する。

それでも彼女は両手をぶらん、とさせたまま微動だにせず、ただ襲いかかって来る凶弾を眺めるのみ。

（なぜ、避けようともしないのかしら……？）

もしや、彼女のＩＳは防御に特化しているのだろうか。

しかし、それでも光学兵器を完全に無効化できる装甲など聞いた事が無い。

当たっても軽いかもしれないが、それでもまずは着実にダメージを……。

そう考えていたセシリアの思考は、姫燐の手刀によって『弾丸ごと』縦に叩き斬られた。

ギャイン！！

「はぁ！？」

真っ２つになったレーザー弾は姫燐の斜め後ろへと反れて行き、地面に当たって消滅した。

あっけに取られるとは、まさにこの事であろう。

レーザー兵器の利点は、その弾速の速さと防御の難解さにある。

実弾とは比べ物にならないスピードで飛来し、熱線によって相手をぶち抜く。

防御するには、その超スピードを見切り回避するか、同じように光学兵器で相殺しなければならない。それを見てから叩き落とすなど、ハッキリ言って人外の技だ。

だというのに、それを彼女はいとも簡単にやってのけた。

にわかには信じがたいが、まだ弾速を見切ったのはまだ分かる。

だが、光学兵器を搭載していない様に見えた彼女の機体が、一体どうやってビームを弾いたのだ……？

（……ッ！　あ、あれは！）

ブルー・ティアーズの情報コンソールが、姫燐の姿をズームで映

し出す。
先程の危機など何のその。赤いマフラーをなびかせ、威風堂々としたその姿は不変で……いや、変化はあった。強烈な変化が。

「右手が……光ってる……？」

そう、先程レーザーを弾いた右手が黄金色に発光していたのだ。
恐らく、手にエネルギーを纏わせ、膜のようにして作っているのだろう。
確かに、この状態ならレーザーを叩っ斬る事だって不可能ではない。
だが、それでも……

（この様な機体、見たことも聞いた事もないですわ！）

湧き上がる隠せない焦りと共に、更に何発か連射するが今度は左腕も同様に発光させた姫燐に全て叩き落とされてしまう。

「どうした？　ストレートだけじゃ、バッターは打ち取れないぜ？」

軽口を叩き、パンパンと手を叩いて挑発する姫燐。
いくらでも隙は有っただろうに未だに一歩も動いていないという、完璧に人を舐めくさった態度に、普段のセシリアなら間違いなくライフルをクラッシュさせん勢いで激昂していただろうが、今の彼女には通用しない。
セシリアは自分を、正確には自分の更なる猛攻を誘っていることを理解していた。

（彼女は、わたくしを試している……ならば！）
「お望み通り、変化球ならどうかしら！？」

彼女の声に反応して、腰のあたりに搭載されていた自分の機体名でもあり、最大の特徴。ＢＴ兵器『ブルー・ティアーズ』が４機発射された。

彼女の脳波に反応して動き、縦横無尽に空を駆ける小型機が姫燐を囲み、発射態勢に入る。

例えどれほど反応速度に優れていようとも、１８０度の４機同時オールレンジ攻撃を２本しかない腕で防ぎきることなど不可能だ。

（今度こそ、当てさせて貰いますわ！）

だが、その目論見はまたしても発射された『弾丸と同時に』空振りする事となる。

「へっ？」

消えた。そうとしか言いようが無かった。

確かに捕らえていた筈の姫燐が、先程まで佇んでいた黒い影が、発射を命令したとたんに、その姿を消していた。な、何を言ってるのか分からないかも知れないが、セシリア自身も何が起こったのか分からなかった。

「な、なにがどうなって……」

「超スピード。悪いがタネも仕掛けも世界もない、チャチな芸当さ」

「ッ！？！？」

肩に手を置き、耳元でささやく声に背筋が、いや身体の全てが一瞬、凍りついた。

バッ、と後ろを振り向くのと同時に、また彼女は地面へと落ちて行く。

い、一体いつの間に背後を取られたのだ!?
さらなる思考の混沌へ陥るセシリアに、姫燐は淡々と説明を始める。

「お前はさっき、このシャドウ・ストライダーを近接型って言ったな？」

姫燐は着地すると同時に、また腕にエネルギーを充填する。

「惜しい、悪くない着眼点だ。確かにこの子は接近戦が得意だが、正確には少し違う」

背を屈め、両腕を後ろに向けると、更にエネルギーを腕部に集中させていく。

「この子、シャドウ・ストライダーは……」

そうして限界までチャージし、エネルギー膜がまるで某ネコ型ロボットの様に球体状に膨れ上がった状態になったせいで、あらぬ方向に暴れる両手を必死に制御しながら、

「バッリバリにイカしてイカれた、『超高速スピード型』さぁぁぁァ！！！」

その理性とチャージを、ブッ千切った。

「モードチェンジ・『カーテンコール』！　ぶっ飛べ！　シャドウ・ストライダぁァァァ！！！」

ドラ○もんハンドが爆発し、溜まりに溜まったエネルギーが間欠泉のように姫燐の腕から溢れだす。その力を利用して、姫燐は文字通り地面を『ぶっ飛んで』行く。

「イィィィィヤッハアァァァァァァぁぁぁぁぁ！！！」

狂気すら……いや、狂気しか感じない奇声を上げながら知覚すら困難なスピードで大地を馳せる姫燐。そのイカれた速度は最新鋭機である第3世代のスピードが、まるで三輪車であるかのような錯覚すら覚えてしまう。

先程の超スピードは、これをチャージせずに発射した状態で出した物だった。

無論、フルチャージには劣るが、それでもイグニッションブースト級の爆発的な加速を得る事ができるのでセシリアが消えたと錯覚するのも無理も無い。

「む、無茶苦茶ですわぁぁぁぁぁ！！！」

原理は分かったが、訳が分からない状況に、セシリアも叫ばずには居られなかった。

この狂気の産物を前にして、ヒステリックに叫ぶなという方が無茶ではあるが。

しかも、恐ろしいことに彼女はこれを、この暴走と言っても全く問題ない状態のＩＳを己が思うまま制御しているように見える。じゃないと、未だに壁にぶつからない理由が他に思い浮かばない。

（わ、わたくしは夢を見ていますの……？　それも、悪い夢を……）

ところがどっこい、これは現実……紛れもない現実である。だか

らこそ余計にタチが悪い。
とうとう様子見に飽きたのかセシリアの居る空中へ、腕を下に向け急上昇する姫燐。
当然、壮大に朴月シャウトを響かせながら。

「こ、来ないでぇぇぇぇぇ！！！」

半狂乱なセシリアが涙目になりながら悲鳴に近い声をあげ、腰部に付けられた2本のミサイルランチャーを放つ。
だが、それすらこのスピード・バーサーカーには届かない。

「遅イぃ！　遅すぎるぜミサイルさんよォ！　もっと死にモノ狂いで頑張れよォ！？」

ミサイル達も逃げ回る姫燐のバックに必死に食らいつくが、それでも出力が違い過ぎる。
あっという間に置いて行かれ、目標をロストしてアリーナの上空に張られたバリアーに激突し、爆散した。
一歩間違えればこうなるのは彼女の方だと言うのに、それでも頭の大切なネジを全部クーリングオフした狂人はケラケラと笑い続ける。

「い、嫌ぁァァァぁァァァ！！？！？」

そして、逃げ回る所を狙い撃ちしようとスターライトのスコープを覗いていたセシリアが、姫燐『だった何か』の急接近に悲鳴を上げ……。

激しく咲き誇った花火は、音も無く散り逝くのみ。
決着は、先程の乱痴気騒ぎが嘘のように、あっさりとついた。

○●○

「おぇ……気持ち悪……」

あの壮絶な戦いの後、姫燐は逆流しそうな胃の中身と格闘しながら、夕闇照らす寮への道のりを1人淋しく歩いていた。

ああ、どうして自分はいっつもこうなんだろう。

ケンカとなれば、いっつもテンションがレッドゾーンまで簡単に吹っ切り、壮絶な自爆をしてしまう。

今回はまだ相手が振られても大丈夫なオルコットだからよかったモノの、これが篠ノ之だったら多分1週間は立ち直れなかっただろう。

あんなモン見て、ドン引きしない女子など居ないだろうから、もはやセシリアとの関係修復は絶望的だろうか。今日の謙虚なオルコットならまだ自分の好みにギリギリ滑り込みセーフだったのだが、惜しい事をした……。

（しかし、今回の目標は無事に達成したから良しとしよう。うん）

そう今回、彼女がセシリアに果たし状を送った理由。

それは全て、6日後に控えた一夏とセシリアの決闘の為であった。

初心者の一夏がセシリア勝つには、事前対策が必要不可欠だ。

だが、セシリア本人にお前の機体の事を教えておくれ。と言った所で、つっ返されるのがオチだろう。

当然、敵のデータが無ければ対策など立てようが無い。

だから今回、姫燐が戦ってでも、セシリアの正確な情報を入手しておく必要がどうしてもあったのだ。

まぁ、結果は色んな意味で散々だったが。世界がまだ一方向に定

まらないし。
しかし、やっぱり気になるのはオルコットの態度だ。
オレと一夏が仲良い事を知らない筈が無いし、故に、絶対に断られると思ってたので、相手をその気にさせる挑発のパターンを１０８式まで考えて来たのだが、その大半が無駄になってしまった。
なんでアイツは、自分に不利益しか無いはずのこの戦いを２つ返事で受けたのだろう？

（まぁ、考えてもしかたない、か……）

何にせよ、データは手に入った。あとは、一夏と今後の事について話し合うだけ……

「お待ちしておりましたわ……朴月さん」
「……あ？」

ゾンビのような顔色と共に揺れる足取りがようやく寮の玄関にさしかかった所で、自分を待つ意外な姿があった。
パツキン残念美人代表。セシリア・オルコットである。
しかし、その眼には涙を溜めており、今にも溢れだしてしまいそうだ。

「……なんだよ」
「教えてくださいまし。なぜ、ですの……なぜ……」

涙声になりながら、オレに答えを求めるオルコット。
あー、やっぱりアレが納得いかなかったのか。無理も無いことだ。

結果的に言えば、オレはオルコットとの勝負に負けた。

理由は簡単、ガス欠である。
学校で決められたＩＳ同士の戦いのルールは、相手のシールドエネルギーを０にする事で勝利となる。
そして、オレの機体。シャドウ・ストライダーが最後に使ったモード『カーテンコール』は、文字通り最後の手段であり、機体の全エネルギーを腕にぶち込む変態モードだ。
んで、今回はデータも取ったしもういいや。と、こんな時くらいしか使う機会ないし、ワザと負ける為に発動し、テンションの赴くまま壮大に暴れて、壮大にセシリアの真正面でガス欠して、壮大にライフルで腹をパンされて、お終い。自業自得とは言え、正直シャレにならない痛さだった。
当然、セシリアからしてみれば、最後の最後までコケにされたようにしか見えないだろう。
それがよっぽど悔しいのか、オレが帰って来るまでずっと待っているとは……。
だが、オレだって決してデータ収集のためだけに手を抜いていた訳ではない。

「今日は……本当に悪かったな、オルコット。だけどな、オレはお前に勝ったら……ダメなんだ。勝つのは……一夏じゃないといけない」

そう、オレがお前に勝つのは、一夏の奴が勝ってからだ。そうしないと、意味が無い。
これはアイツの喧嘩だ。サポートこそすれ、オレが代わりに戦って勝ってしまったらアイツの怒りは何処に向ければいい。
オルコットからしてみれば勝手な言い分さ。だけど、そういうモンだろ？
ケンカって奴は、本人同士で決着を付けないと無意味なんだ。

とっさの言葉だったので、上手く伝わったかどうか不安だったが、オルコットの涙が止まっている所をみると一応は伝わってはいるみたいだ。

「じゃあな、6日後。楽しみにしてるぜ……」

そうして、オレは彼女に心の中で焼き土下座し、オルコットを置いて寮の中へと入っていった。

●○●

残されたセシリアは、1人決意を新たにしていた。

あの後、頭から落下した彼女が意識を取り戻した後、何も言わずに立ち去ってしまったため、絶望に打ちひしがれていた。

認めてもらえなかったのか……やはり、自分はどこまでも孤独なのか、と。

それでもなぜ、自分はダメだったのかと、せめて理由だけでも聞こうと玄関で待ち伏せしていたのだ。

そこで帰って来た姫燐に、涙声でハッキリとは言えなかったが意志はちゃんと伝わったらしく、彼女は心底苦しそな顔だというのに優しく諭してくれた。

「オレは勝っちゃダメなんだ。勝つのは一夏でないといけない」と。

つまり、姫燐は自身がこのセシリア・オルコットに相応しくないと思ったのだ。

本当に相応しい、勝者になるべき人物は織斑一夏だと言う。

冗談ではない！　自分の事を本気で大切に思ってくれる人間と、あの案山子以下、自分がどっちを選ぶと思っているのか！

……確かに、あの異様なテンションに引いたのは確かだが、それでもこの気持は変わらない。未来の嫁の欠点１つ許せないで、何が名門貴族か！

（見ていてくださいまし、朴月さん……いや、姫燐さん！）

６日後、織斑一夏の奴をケチョンケチョンにした後で、わたくしは貴女にこの気持を伝えます。

その時は、今度こそ貴女の腕で……。

同時刻　一夏と箒の部屋

「なぁ……はぁ……ハァ……はぁ……箒……ヒィ……さん……」

「ん、どうした一夏！　ペースが落ちてるぞ！」

「む……ムリ……ハァ……放課後からずっと腕立て……フゥ……いつまで……」

「情けない。お前はその程度の男ではないだろう！　さぁ、あと腕立て４２７３１回、頑張るんだ！」

「も……無理……千冬ね……キリ……助け……」

「バカ者！　トレーニング中に女の名前を呼ぶなど、死にかけの甘ったれが言う台詞だ！　ま、まぁ一夏がどうしてもと言うなら私の名前なら呼んでも……」

結局、このトレーニングは本日の成果を伝えに来た姫燐が、無理やり箒をドロップキックで止めるまで続いたという……。

## 第3話　「セシリア・オルコット」（後書き）

もう一度言っておきます。

オルコッ党の皆さま、お許しください！

# 第４話　「恋と信念の円舞曲」（前書き）

# 第４話　「恋と信念の円舞曲」

「一夏、調子はどうだ？」
「……ああ、問題無い」

一夏は姫燐の声に、自分の身体を包みこんだ鎧武者を彷彿とさせる第二世代型ＩＳ『打鉄』の腕を軽く動かす。
しばらくすると、ＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）が作動し、鋼鉄の身体が万有引力に逆らい宙に浮く。
嫌でも高鳴る鼓動を押さえ、左手を閉じたり、開いたり、

「どうした、震えてんのか？」
「……ああ、震えてるよ」

少し不安げな表情を浮かべる姫燐の言葉に、一夏は素直に答えた。
これから始まる決戦が、待ち受ける強敵が、重力を裏切るこの感覚が、これから試練を乗り越えてまた１つ強くなる自分自身が、

「楽しみで楽しみで、嫌でも身体が疼いちまう」
「くくっ、そうかい。あんま調子乗んなよ？」

巣立つ子を見送るようなはにかみで、姫燐はＩＳを装着した一夏の太ももをコンコン、と小突き念を押す。
６日間。長いようで短い期間だったが、出来る手は全て打ったつもりだ。
それでも、一夏とオルコットの実力差に埋めがたいモノが有るのは事実。
しかし、それでも喰らい付き、喉笛を噛みちぎる為に努力はしてきた。

作戦もある。勝算もある。気合は元より。あとは……

「お前次第だ、一夏」

「ああ、これだけお膳立てしてもらったんだ。絶対に勝って来るよ、キリ」

現代で自由に羽ばたく翼を持つ唯一の男は薄暗いドックから、太陽の光さす戦場へと飛び立って行った。

「ああ！　もし負けたら次の箒とのトレーニング、絶っ対に口出ししてやらねぇからなぁーーーーーーーーー！！！」

ああ、それは困る。本当に、割とマジに本格的に死ぬ。殺される。鍛え殺される。

戦いが始まってもないのに背中に薄ら寒いモノを感じながら、一夏は向かい立つ。

眩い太陽に照らされた、『青い雫』の眼前へと……。

## 第４話　「恋と信念の円舞曲」

「あら？　おかしいですわね。いくらわたくしがここ最近、『あの方』を思い眠れぬ夜を過ごしているとは言え、貴方のその機体。専用機でも何でもない、ただの第二世代に見えるのですが……？」

ドックから出て来た一夏の姿を見た瞬間、僅かな驚きを孕みなが

ら明らかに人を小馬鹿にしたような口調で目を細めるセシリア。
会場である第3アリーナの客席からも、困惑のざわめきが沸き起こる。
無理も無い、彼には事前に第三世代の専用機が与えられる手筈となっていたのだが、今彼女の眼前に相対するのは、圧倒的にスペックで劣る第二世代のＩＳ『打鉄』に身を包んだ織斑一夏……。
タダでさえ勝ち目が無いと言うのに、更に絶望的な状況に自分を追い込むとは、自棄でも起こしたのだろうか？

「……あー、今なら『これは夢だった』ってことにしといてあげますから、さっさとご自分の機体を取りに行かれてはどうかしら、おバカさん？」
「お気使いは感謝するが残念ながら、これは夢なんかじゃない。俺の機体は間違いなくこの『打鉄』で……」

一夏は、『打鉄』唯一の装備である刀を取り出し、

「今から『青き雫』を地面に叩き落とすのも、間違いなく俺『達』だ」

セシリアの顔面に、生涯最ッ高のしたり顔と共に突き付けた。
普段ならセシリアも、客席も、この世界中の誰もが笑い飛ばす台詞だろう。
だが、できなかった。むしろこの場にいるセシリアを含んだ殆どの人間が息を呑み、目の前の存在に畏怖すら感じてしまった。
彼がＩＳを使える唯一の男だから？　あの織斑千冬の弟だから？
いや、そんな下らない理由では無い。
彼には、『迷い』が無いのだ。
この絶望の中でも、彼の表情が、態度が、言葉が、物語っている。
必ず勝利すると、敗走なんてする訳が無いと。敗北の可能性という

『迷い』が一切見えないのだ。
ただ、彼の真っ直ぐな眼は勝利するという『希望』のみを見据えている。

もしかしたら、この男なら本当にやってのけるかもしれない……。
この絶望を、希望に変えてしまえるかも知れない……。

観客達は皆自然と、全くの無意識にそんな事を思ってしまっていた。
……数名の例外を除いては。

その例外の1人であるセシリアは、不愉快に心を煮えくり返してちゃぶ台返ししていた。
ふざけるな。自分が、このセシリア・オルコットと『ブルー・ティアーズ』が貴様程度の男などに墜とされるだと？　ありえない、タダの状況が見えていない愚かなハッタリだ。
だと言うのに、なぜ心は平常を保てない？　なぜ頭に上り続ける血流を押さえられない？
男など、取るに足らない存在だというのに！
しかも、『自分の』姫燐をたぶらかし、あまつさえ馴れ馴れしくあだ名で呼び接するこの男などに！！！

（……だったら、わたくしが直々に教えて差し上げますわ）

貴様がいかに愚かで、矮小で、脆弱かつ彼女に相応しくない大バカ者であるかを！
手加減など不要、最初から全力でブルー・ティアーズを作動させ、チャンスなど与える暇なく墜とす！

『それでは、仕合開始！！！』

「行くぞ、セシリア！」

「さぁ、踊りなさい……このブルー・ティアーズとセシリア・オルコットが奏でる円舞曲で！」

○●○

一方その頃、観客席。そこの最前列で、うっとりと自分の世界にトリップしている少女が１人。

（一夏……）

先程の勝利宣言を聞き、別の感情を寄せる例外の１人こと篠ノ之箒は乙女の純情をバーストエンジェルさせていた。

どこからどう見ても一夏にベタ惚れな彼女は、久方ぶりに再会した時の想い人をこう評していた。『しばらく見ない内に見る影もない腑抜けとなってしまった男』と。

だが先程の一夏の宣言は、その幻想を彼女のハートごと偽・螺旋剣でぶち抜いてぶち壊した。

一夏は、私の婿はあの時から何も変わっていない所か、この６年で更に強く、凛々しく、カッコよくなっていたのだ。

（一夏……）

ほぅ……と恍惚のため息を付き、彼の勇士を例え１フレームでありとも見逃さない様に食い入り、網膜に焼き付ける。

今すぐ立ち上がり、この胸の中で顎が尖った人達のギャンブルを

見る人達みたいにざわめく思いを、どうせ聞えているからと開き直ったゲームチャンプのように情熱的に伝えたい……！

（一夏……一夏……！）

今はダメだ。分かっている、いくらなんでも人目が多すぎる。

しかし、この粗ぶる思いを今伝えずしていつ一夏に伝えるのだ？

思えば、自分が今までずっと彼と男女の仲となれなかったのは、どこか恐れていたからでは無いだろうか？　『もしも』に躊躇して、傷つくのを恐れて立ち止まる。

だから、自分は別れの時であろうとも弱いまま、彼に何も言えなかった。

だが、彼は立った今、　自分に見せてくれたではないか。迷いを捨て去った者の『強さ』を！

（一夏一夏一夏イチカいちか一夏イチカいちかぁァ！！！）

そう、迷いを捨てろ。恥や名聞など知った事か。

彼が、彼さえ隣に居ればそんなモノ、リサイクルすら出来ないゴミ屑同然。

深呼吸と共に眼をクワッ、と見開くと箒は観客席から立ち上がった。

身体が軽い。周りの有象無象の視線が、こんなにも気持ちいいなんて初めて！

もう、なにも怖くない！！！

「一夏ぁぁーーーーー！　私は、お前が大すふふぉ！？」

「はーいお客様、前のお席で立つのは後ろに迷惑だからおやめ下さいね、っと」

しかし、恐怖を忘れるということは同時に、ありとあらゆる危機に対して疎くなるという事である。

彼女の一世一代の告白は、空気の読めるＫＹによる頭部をパックリ……ではなく、普通に頭に振り下ろされた手刀よって、フェイタルカウンターされてしまった。

「ほ、ほほほほほ朴月!?　なななななじぇここに!!」

彼女は一夏と共に、ドッグで最終調整をしていたはずでは!?

「とりあえず落ち着け。ドックの中じゃ生で見れないからな。ホレ、さっさと座れ」

そう言って姫燐は箒の横の席に、「よっこらせっぷく丸」と変な掛け声をして座り、未だに混乱する箒も、言われるがままに席に付く。

「な……なぁ、朴月……い、今のはな、別に邪な気持ちがあった訳では無くな……ただちょっと自分に正直に生きてもいいのではないか？　と思っただけでな……」

「あぁ、分かってる。全部オールライトだ」

パァ、と今まで滝のように脂汗を流していた箒の顔が明るくなり、

「お前さんが、うちのクラス全員と先生方が居る中で、恥も外聞もまぁーったく気にせずに一夏に君が好きだと大・喝・采したかったのはよぉーーーーっく分かってますから」

「ツーーーーーーーーー!!?!!?!!?」

通常の三倍より更に赤く、魔を断つ剣・ブラッドも裸足で逃げ出す程に真っ赤になった。
切腹だ。とにかく切腹するしかない。もうこの世に生きてはいられない。

「ブッ！？　お、おい何してんだバカが！」
「離せぇぇぇぇぁぁぁぁ！！！　もう死ぬしかないぃぃぃいいいいいぃ！！！」

完全に正気を失い、泣き喚きながら服を脱いで、短刀も何も無いのに腹を掻っ捌こうとするバカを何とか羽交い締めにして止める姫燐。
当然、姫燐がこの時、目の保養に加えて関係無い所まで触りたおし、箒の肉体を思う存分堪能したのは言うまでも無い。彼女が暴れるのを止めるのについカッとなってやったので、セクハラにはならない。反省も後悔もしていない。

「はぁ……はぁ……はぁ……」
「ハァ、ハァ……少し落ち着いたか……チッ」

ようやく抵抗が無くなった所で、姫燐は心底名残惜しそうに箒を解放した。

「告白は大いに結構だが、ＰＴＯを弁えろ」
「う……うむ……」

極上の餌の前で『待て』を喰らい、そして結局貰えなかった子犬のようにショボン……とする箒。
くそう、可愛いなぁ。でもここまで重症じゃ、今更オレが入り込む余地なんて無い。攻略は不可能だな……はぁ……。しかたない、

これからは精一杯愛でさせて貰うとしよう。
アディオス、マイライクじゃなくてラヴ……。

「な、なぁ……朴月、苦しいんだが……」
「ん～……？」

おっと、つい失恋のショックとそのプリチーさに某動物王国の王張りのスキンシップをしてしまったが、流石に時期尚早だったか。
あーあ、このわがままボディを独占できる一夏の野郎マジ爆発し……一夏？

「……あ、忘れてた」

ここでようやく、姫燐は何のために自分がここに居るのか思い出す。しまった。箒の告白未遂のせいで試合をまったく見て無かった。
急いで会場の方へと視線を戻す姫燐と箒。

ワァァァァァァァ！！！
「なっ……！？」
「ほー……」

沸き立つ観客、信じられない様なモノを見た顔で固まる箒、そしてその中でただ一人、別に何事も無いと言った冷めた表情をする姫燐。
そう、彼女も一夏の姿に別の感情を寄せる例外の１人。

朴月　姫燐は最初から、彼の勝利しか信じていなかった。

●○●

いったい何がどうなっている？
セシリアは額から流れ出る汗を、湧き上がる焦燥を隠せない。
余裕だと思っていた。所詮は素人、自分のブルー・ティアーズのオールレンジ攻撃は、初心者如きがどうこう出来る代物では無い。第二世代の機動力なら尚更だ。
一瞬でブルー・ティアーズにハチの巣にされ、無様に落下すると思っていた。
だが現実はどうだ？　目の前の雑魚であったはずの男は、飛来する『最後の』ブルー・ティアーズが発射した弾道を、まるで未来が見えているかのように巧みにかわすと、

「これで、最後ォ！！」

そのまま突進し、すれ違いざまに手に持った刀でビットを両断する。
これで、最後の1機まで切り落とされた。
さっきから全てこうだ。自分がブルー・ティアーズを射出して敵を包囲しようとも、それら全てをいとも簡単に切り抜け、本体を決して狙わずにビットのみを破壊していく。
自分とした事が、頭に血が昇り過ぎていた。その狙いに気が付くのが遅すぎた。

「よう、どうした？　随分すっきりとしたデザインになったじゃないか？」
「ぐぐっ……織斑……一夏……！」

そう一夏の、姫燐と共に立てた作戦は、一番厄介なブルー・ティアーズをさっさと封じることであった。

これさえ封じれば後はライフルのみ。ライフルだけとなればいくら速かろうと所詮は『点』、避けるのはさして難しくない上に、一夏が使う打鉄の得意とする接近戦に持ち込めば、例え初心者であろうとも結果は一目瞭然だ。

そして彼が行って来た特訓は全て、このブルー・ティアーズを避ける事のみに特化してきた。

この前のデータを元に組まれた5日間、打鉄を使った状態での徹底した『朴月印の対ブルー・ティアーズ用』シュミレート・プログラム。

姫燐が気が付いた、セシリア本人すら気が付いていない『確実に全て自機狙い』であるという欠点も再現した、完璧なガチ対策。

アリーナの使用許可を得るのに非常に苦労したが、時には力尽くで（主に姫燐が）、時にはお話合いで（やはり姫燐が）、時には賄賂で（言うまでも無く姫燐が）、文字通りありとあらゆる手段を講じて使用権を奪取し操作訓練に明け暮れ、そのお陰もあって、一夏はブルー・ティアーズの軌道をセシリアと同じ、いや下手をすればセシリア以上に理解していた。

起動さえ分かれば、怖い物では無い。

「戦闘開始から3分38秒……ちょっと昨日より遅いな、キリにドヤされそうだ」

「な、何を言っていますの……？」

セシリアには、眼前に立ちふさがる底知れない男に恐怖を抱いた。

本当に、彼は1週間前の『織斑一夏』と同じ人物なのか？　ただ、見下すだけの存在でしか無かった筈の彼が今、果てしなく立ちふさがる巨壁に見える。

己の不覚に奥歯を噛み締めるセシリア。

自分の油断、慢心、乱心、全てが己の首を絞めているこの状況を作った自分が、不甲斐なくて仕方が無い。

だが、後悔は後だ……。

「ふっ……ふふふ……」

「ん？」

「お見事ですわ、織斑さん。わたくしのブルー・ティアーズが貴方如きに完封されるとは、夢にも思っていませんでしたわ」

「そりゃどうも」

「……今まで申し訳ありませんでしたわ。正直、わたくしは今まで貴方の事を虚弱貧弱無知無能な島国のお猿さんだと思っていました」

「あ、ああ……」

今までの彼女からした自分の評価の酷さに、一筋汗をかく一夏。

「ですが、認めざるを得ないようですわ。貴方が、わたくしに立ち塞がる『壁』だという事を……ですから」

「ここからは、油断も慢心も無い。本当のわたくしで、お相手いたしますわ」

彼女を纏う気が変わる。

今までの、どこか真剣みに欠けていた表情ではなく、ただ立ち塞がる壁を破壊するために全神経を集中し、研ぎ澄まされた無表情へと一変させ、その殺気が一夏の身体を突き抜けた。

（ようやく……本番か……）

一夏の腕に、自然と力が篭る。

ここまでは予定調和。問題は、ここからだ。

観客席で、共に作戦を考えた姫燐も同じことを考えていた。

ブルー・ティアーズを封じ、あとは接近戦に持ち込むだけなのだ

が、この『だけ』が曲者なのだ。
機動力が圧倒的に負けているこちらが、どうやって接近するか？
当然、武装がライフルのみとなったセシリアは逃げに徹するだろう。一度第3世代の性能で引き離されてしまえば、第2世代である打鉄では追いつくのは絶望的だ。
かと言って、遠距離武装がない打鉄は何としても近付くしかない。遠距離武装がマトモに揃った『ラファール・リヴァイブ』で行くという案もあったが、ヒヨっこの一夏では遠距離武装を使いこなせないと判断し、なら武装が1つしかない分、集中できる打鉄のほうがまだマシだと判断したのだ。
だが、遠距離攻撃が無くては逃げ回る自分より素早い相手に接近するなど不可能。
一見、絶望的に詰んでいるように見えるこの状況。だが、一夏の眼から闘志が消える事は無い。
自分独りでは、とっくに諦めていたかもしれない。だけど、今の自分には不思議と不安は無い。

（本当に、俺はいいパートナーに恵まれたよ……）

なぜなら、彼は最高の相棒に教えてもらったから。

『戦術は、作戦しだいでいくらでもひっくり返せる』事を！

「行け！　一夏ぁ！」
「うおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

そうして彼は相棒の声援を受け、雄たけびと共に突進した。
……セシリアとは『反対側の』方向に。

「……はぁ？」

一瞬、本人達を除くセシリアも含めた会場全ての人間があっけに取られた。
何故に？　前ならともかくよりにもよって後ろ？
どうなっている、ここまできて自棄になるとは思えない。
だがこの状況を打開するには、どう考えても逃げられる前に一か八かでセシリアに突進し、一撃を加える以外に勝機が無いように見える。その唯一のチャンスを、彼は自ら棒に振ったのだ。

「ど、どういうつもりかは知りませんが……容赦はいたしませんわ！」

気を取り直し、向こうから勝手に離れて行ったおかげで距離を離す必要が無くなったセシリアが、スコープを覗きライフルで一夏を狙い撃つ。
一夏も打鉄をフルスロットルで飛ばすが、それでもセシリアの狙いとレーザーのスピードの方が速く、どんどんシールドエネルギーを削られていく。

「一夏！」

観客席の箒が、居てもたってもいられずに立ち上がった。
何をしているのだ一夏は！　これでは、ただ嬲り殺しにされるだけではないか！？

「どうなっている朴月！　作戦は一体どうしシャナ！？」
「だーかーら、お前は座ってろっての」

今度は膝の裏にチョップを直撃させ、無理やり箒を座らせる姫燐。

「し、しかし一夏が、一夏が！」
「安心しろ、まだアイツは負けちゃいない」
「これでは時間の問題だ！　なぜあの状況で引かせた、一か八かなら勝てたかも知れんのに！」
「……はぁ」

粗ぶる箒に姫燐はため息を1つ付くと、あくまでも冷静、冷淡に語り始めた。

「バーカ、『一か八か』だぁ？　何でこのオレの作戦が、んなもんに頼らなくちゃならねぇんだ。事前に対策練ったのに一か八かに縋るなんざ、救いようのないアホがやる事だ」

命を賭ける作戦に『一か八か』なんて不確かなモノは、あってはならない。
彼女が、一夏の為に丹精込めて練り上げた作戦は、そのような不良品では決して無い。

「だ、だが……」
「ま、ポップコーンでも片手に黙って見てろよ」

姫燐は先程とは打って変わってニカッ、と春風のような笑顔で恥ずかしげもなく言い切った。

「オレの自慢の相棒が、オルコットの野郎を叩きのめすその姿を、な」

ちなみに、この一言がまた箒を悶々とさせたのは言うまでも無い。

○●○

「へっくしぃ！」

ううん、このタイミングでくしゃみとは、誰かが噂でもしているのだろうか。

だが、状況はそんな呑気なことを考えている場合ではない。

今まで一切消費しなかったからまだ余裕はあるが、それでもシールドエネルギーは着実に削られていく。あと数発マトモに喰らえば……負ける。

「あと少し、あと少しだけもってくれ打鉄！」

目的のポイントまで、あと少しなんだ！

被弾を繰り返しながらも、一心不乱にあの場所へと上昇する一夏。

「……随分と粘りますわね。でも、これで！」

所詮は悪あがき、スコープ越しに空を駆け上がる一夏の姿をしっかりと追いかけ、

「終わりですわ！」

トリガーに指を掛け、収束し照射された光の弾丸は容赦なく焼く。

「ッきゃあ！？」

「よし、かかった！！」

セシリア・オルコットを、正確には、彼女の『眼球』を。
一夏は『太陽』を背に受けながら、不意の襲撃に思わず目を押さえるセシリアを見て作戦の成功を確認した。
そう、今回の作戦はこの『逆光』を利用したモノだ。
自分を囮にし、セシリアにスコープで太陽を直視させる。
幼い頃、理科で学ばなかっただろうか？　太陽を『レンズ』で覗いてはいけない、と。
レンズはその仕組み故に光を一点に集める。しかもそれが、兵器に利用されるほど高性能なスコープに使われるレンズなら、そしてそれを肉眼で覗いたら果たしてどうなるだろうか？
全ては、この為の布石だった。先にブルー・ティアーズ破壊する事に集中したのも、その後、ワザと自分から引いたのも、全てセシリアをライフルを使った射撃に集中させるためだったのだ。
一時はどうなるかと思ったが、全ては『彼等』の思惑通り。
そして、ようやく生まれたこのチャンスを逃す愚か者などいない。

「トドメだ、一夏ァァ！！！」
「おっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

セシリアも何とか避けようと機体を必死に動かすが、もう遅い。
ブーストを全開にしながら急降下し、刀を振り上げ一夏は全体重を乗せて彼女に叩きつけた。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

散る火花、揺れる世界、落下していく2つの機影。
己の悲鳴と一夏と共に、セシリアは地面へと落下して行く。
激しい衝撃、舞う砂埃、そしてゆっくりと立ち上がる1つの機影。
機影は衝撃のショックにまだ少しふら付きながらも、刀を杖代わ

りにしっかりと2本の足で立ち上がり、呟いた。

「俺の……勝ち、だ。セシリア」

会場が、嵐のような歓声に呑まれた。

大番狂わせ、ブラックホース、そんなレベルではない。この少年は裏切ったのだ。

この第3アリーナに入る前に誰もが思った、セシリア・オルコットの勝利という未来を見事に裏切ってみせたのだ。

自分に向けられる一向に鳴りやまない拍手と喝采の中、一夏は思う。

本当に凄いのは俺なんかじゃない、キリと『打鉄』だ。と。

彼女の作戦無しでは、自分は間違いなくセシリアに勝てなかったし、打鉄がここまで保ってくれなかったらやはり自分は負けていた。

こんなに弱い自分を、支えてくれた彼女達が居たから、俺はこうしてここに立っている。

この勝利は、俺と、キリと、この打鉄のモノだ……！

彼女に礼でも言おうと、観客席に居るはずの姿を一夏は探す。

ＩＳに備え付けられたハイパーセンサーは、最前列で立ち上がり叫ぶ彼女をハッキリと映し出した。

「……ッ！　……ッ！！！　……ッ！！！」

何かを必死に叫んでいる様に見えるが、喝采が邪魔で聞えない。

彼女の声を聞こうとハイパーセンサーを限界まで集中させると、ようやくハッキリと聞え出した。

「バッカ野郎ッ！　なに油断してんだ！！　オルコットのシールドはまだ０になってねぇぞ！！！」

思考が、凍る。
その言葉の意味を真に理解したのは、背後から飛来した弾丸が頬を掠めた直後だった。

「チィッ！　あんな使い方をしたせいでバレルがひん曲がってしまったようですわね……」

バッ、と先程自分が出て来た場所を振りかえる一夏。
砂埃が舞うクレーターからゆっくりと影は立ちあがると、ボロボロのライフルを邪魔だと言わんばかりに投げ捨てる。

「な……うそだろ……？」

最後の一撃は完全に入ったはずだ。
キリの話では、例え第三世代のＩＳであろうとも耐えられるものでは無かったはずだ。
なのに、なぜまだ彼女は立ちあがれる！
異常事態に思わず後ずさりする一夏。そこで、ふと彼女が投げ捨てたボロボロの、刀傷が入ったライフルが足に当たる。

（……まさか！）

信じられない、まさか彼女は咄嗟にライフルを盾にしたのか！？
そのせいでダメージが軽減され、ギリギリで耐えきったというのか！？

「負けられませんの……」
「えっ？」
「こんな所で、わたくしは負ける訳には行きませんの……！」

血走った眼で残された最後の武装、接近戦用ショートブレード『インターセプター』を起動するセシリア。
とっくにその眼から正気は消え去っており、ただ自らを突き動かす確固たる信念のみが、満身創痍の彼女の身体を突き動かす。
『オルコット』の名を護るために、自分のプライドを護るために、そして……何よりも！

「わたくしを愛して下さった『あの方』のために！　貴方にだけは負けるわけにはいきませんのよぉぉ！！！」

ショートブレードを片手に、一夏に最後の接近戦をしかけるセシリア。

「くっ！！」

刺し、引き、薙ぐ。高速で振るわれる彼女の鬼気迫る猛攻に、一夏は防戦しかできない。
接近戦が有利なのは、あくまで彼女が遠距離用のライフルを持っていた時だけだ。
同じ土俵に立たれてしまっては、あとは経験と技量の差だ。
セシリアも本来は接近戦は専門外だが、それでも初心者の一夏のそれを越える実力も経験も備わっている。

「落ちろ！　落ちろ！　落ちろォォ！」
「ぐっ、ううう……」

徐々に捌ききれなくなり、押され始める一夏。
そして、ついに刀を持った腕に、セシリアの一撃が入る。

「がぁア！！」

唯一の武器である刀を落とし、抵抗手段が無くなった一夏の腹部にすかさずセシリアの回し蹴りが飛ぶ。

「げほっ……！」
「一夏ッ！？　あんのバカ野郎……！」

椅子に八つ当たりしながら姫燐も即興で策を考えるが、ダメだ。
どうやっても一夏が勝つビジョンが浮かばない。
そもそも、あそこで落とせなかった時点で彼の敗北は決まっていたようなモノなのだ。

「クソッ！　ここまで来て……」

箒も同様に唇を噛み締める。
このまま、オルコットの成すがままにされるしかないのか！？
しかし観客である彼女達に、出来ることなど何もない。

「これで……お終いですわァ！」

倒れて蹴られた腹を押さえる一夏に、セシリアはトドメを放とうとする。
迫りくるセシリアをどうこうする手段など無く、ただ茫然と眺めることしかできない一夏。
ああ、負けだ。こんなもの、勝利とは言えない。
ごめん……箒……打鉄……キリ……。

そして、勝敗を決するアナウンスは非常にも告げた。

「勝者、『織斑一夏』！」

この勝負の、勝者の名前を。

●○●

勝因は、セシリア側のエネルギー切れだった。

まぁ、即死しない方がおかしいほどのダメージを受けたのだ。いた仕方ないモノはあるだろう。

だが勝負は勝負。例えどんな内容であろうと勝者は、最後までエネルギーが残っていた織斑一夏に他ならなかった。

当然、本人達は納得している筈が無く、

「あれほど調子乗んなっつっただろうがこのボケがぁぁぁぁぁーーーーーー！！！」

「ごめんなさボルグ！！？」

アリーナの中に降り立った姫燐の容赦無いハイキックが、心身共にボロボロな一夏の側頭部をなにそれ関係無いね、とばかりに蹴り抜いた。

「ああ、てめぇはアレか？　やっぱり3歩あるいたら大切な事を忘

れるバードヘッドなのか？　だったら今夜は焼き鳥パーティにしなくちゃなぁァ、このド畜生が！！！」
「だ、だから、ごめんマジギブ、ギブ！！　縦に割れる！　臓物一夏になっちゃうって！！」

ダウンした所を即座に持ち上げ、めちゃ許せん一夏にバックフリーカーを仕掛ける姫燐。
ロープを要求する声が聞こえるが完全に無視。完全にルール無用の残虐ファイトである。
未だかつて、ここまで彼女がプッツンした事があっただろうか？
いやない。

「そこまでにしておけ、朴月」
「あぁ？　なんでだよ篠ノ之？」

そんな一夏の姿を見かねたのか、姫燐に制止を呼び掛ける箒。

「ほ、箒……」

今の一夏には、彼女が救いの天使に見えていた。

「まだ一夏は初心者だ。同情の余地はある」
「だ、だけどなぁ……」
「だからこれから油断どころか、泣いたり笑ったり出来なくなる程に徹底的に鍛え直さなくてはならないな。当然、今から」

が、直ぐに地獄の獄卒とさして変わらなく見えるようになった。

「さぁ、行くぞ一夏！　まずはグラウンド３７５６４周からだ！！」
「い、嫌だぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

姫燐から一夏を受け取ると、箒は断末魔を上げる一夏を引きずりながら意気揚々と第3アリーナを後にして行った。

なぜだろう大戦中に、桜花を見送った人達もこんな気持ちだったのだろうか？

胸に渡来するモノを「まぁ、どうでもいいな。アイツだし」と適当にスルーしながら姫燐は、未だ鳴りやまない歓声を掻き分け、アリーナの中心で独り茫然と立ち尽くす彼女へと声をかけた。

「よぅ、惜しかったな。オルコット」

「……あ」

しかし、彼女の姿を見た瞬間、セシリアは俯きながらそっぽを向いてしまう。

「おいおい、どうしたんだ？」

「見ないで……下さいまし……」

「は？」

「こんな惨めなわたくしを……見ないで……」

頬に、一筋の透明な雫が浮かび上がっているのが分かる。

彼女は、セシリア・オルコットは泣いていた。

「惨めだ？　んな訳あるかよ、あれは誰がどう見てもお前の勝ちだったさ」

「でも……でも……わたくしには、もうッ、なにも残ってッ……」

過程はどうであろうと、敗北は敗北だ。

自分は、『オルコット』を護るという誓いを、愛しい人の期待を裏切ってしまった。

その絶望感と、ズタボロになったプライドが後ろ指をさし続ける。
お前は、酷く惨めで無価値な負け犬であると。

「わだぐじはぁ……わだぐじはぁ……」
「……」

だだ、子供の様に泣きじゃくる事しか出来なかった。
存在価値を失った自分に、意味なんてない。
だけど、どうしたらいいか分からずに感情のまま泣く事しかできない。
悲しい、悔しい、ただひたすらに無様。
どうしようもない感情の行き先が見付からない。
このまま、いっそこの世から消えてしまえたら……

ギュッ
「え……？」

そんな事すら考えていた彼女の凍え切った心と身体に、突然、暖かい物が渡来した。
あったかっくて、大きくて、優しい。まるで、全ての痛みを柔らかく包みこんでくれるようで……

「なッ……ヘェ！？」

突然の事に呆けていたセシリアだったが、ようやくそこで気が付く。
自分は、あの方に、愛する姫燐に抱きしめられているのだと。

「な、な、ななんあななきり、きりりりりりしゃん！」
「落ち着け……この際だから言う。正直に言ってオレはお前が嫌い

だった」
「う、ぐすっ……」
「とりあえず最後まで聞けよ。今回の勝負だって、オレは一夏が圧勝すると思ってた」
あれだけ念入りなガチ対策にあの作戦だ。
姫燐は一夏の勝利は絶対だと確信を持って送り出した。
「だが、実際はどうだ？　お前がエネルギー切れを起こさなければ、一夏の奴は間違いなく負けていた。それは何故だと思う？」
答えは実に簡単、それは単に……
「お前が強かったからだよ。オルコット」
「わたくしが……強い？」
「ああそうだ、オレはお前を、セシリア・オルコットを見くびっていた」
今まで姫燐はセシリアの事を、プライドが高いだけの世間知らずなお嬢様だと思っていたが、最後に立ちあがったあの気迫。そんじゃそこらの奴が、そう簡単に出せるモノでは無い。『あの方』とは誰の事だか知らないが、あの時、彼女が見せつけた力は姫燐の予想を大幅に超えていた。
「そ、そんな……あの時はただ無我夢中で……」
「だからこそ凄いんだ。無我夢中であれだけの力を出せる奴なんざ、そうは居ないぜ」
「姫燐さん……」
「それに、何も残って無い訳無いだろ。お前は生きている、生きてるなら何度でも、何だってやり直せるさ」

そう言って姫燐はセシリアの頭を撫でる。
抱きしめられて、撫でられる。たったこれだけの事だというのに、どこか懐かしくて暖かいこの感触に、セシリアは心から満たされて行く。
こんな感覚、何年振りだろうか……。

「認めるよ。お前は、セシリア・オルコットは大した奴だ。誰がどれだけお前を貶そうともオレが……オレだけは何があっても胸を張って言い切ってやる」
「あ、ああ……！」

やはり、自分は間違っていなかった。
この人を信じて、好きになったのは正しかった……！

「あー、とにかくだっ。これからもよろしくな！　『セシリア』……ッ」

ここまで言って、姫燐はようやく自分が取った行動がこっ恥ずかしくなって来たのか顔を赤くしながらセシリアを離すと、回れ右して走り去ってしまった。

「セシリア……名前で……呼んでくれた……」

自分には、『オルコット』を取ったら何も残っていない。
感づいてはいたが、ずっと向きあわないようにしていた自分のコンプレックスが、今、ゆっくりと解けて無くなっていく音が聞こえる。
この胸の内で激しく高鳴る感情は、決して『オルコット』のモノなどではなく、確かに『セシリア・オルコット』自身のモノなのだ

から。

ようやく見つけた自分自身の姿、それを堪らなく愛おしく思いながら、彼女は第3アリーナを後にした。

## 第４話　「恋と信念の円舞曲」（後書き）

はいどうも、この頭悪い小説の作者ことクラふぉうです。
第４話、いかがでしたでしょうか？　作者としては毎話毎話内容がアレなので投稿するたびに受けるかどうか不安で心臓バックバクの心不全です。
しかし、毎話送られてくる皆さまの暖かいコメントにいつもいつも作者のハートはエンダァァァァイヤァァァァな感動巨編です。

さて、前書きはここら辺にして、ここからが本題です。

今まで長くて４日間以内に次を書いていましたが、４月に入り、そろそろ学校が始まるのでこれまでのペース維持が難しくなってきました。
しかも、作者はこれとは別に投稿用のも書いているのですが、こっちが楽しすぎて最近全く進んでいません。ガッテム。これも進めたい、じゃないと締め切りに間に合わない。

なので次回からは結構遅くなるかもしれません。
楽しみにしていただいている皆様には非常に申し訳ないのですが、ご了承ください。
たとえ何日も更新しなくても「アイツ……いい奴だったのに……」ってな訳ではないのでご安心を。

では、また次の話で。これからも、変態ワガママ作者とこの小説をよろしくおねがいします。

# 第5話　「Ｅｓｃａｐｅ　Ｆｒｏｍ　Ｔｈｅ　Ｓｃｈｏｏｌ　（前編）」

金曜日の夜、学生寮。

箒による虐待というか拷問スレスレの訓練からようやく解放され部屋に戻り、今日の特訓内容を心底楽しそうに語るルームメイト兼幼馴染を尻目に、一夏は文字通り傾れ込むようにベッドに投身する。

確かにここに来るまでは運動などあまりしていなかったが、それでも運動神経はクラスでもいい方だったはずだ。だが、目の前で同じトレーニングをしていたというのに自分とは対照的なとても生き生きとした表情をする箒を見ると、もしや自分はの○太も真っ青な運動音痴ではないのかと思えてしまう。

……まぁ、ただ単に彼女が人の皮を被ったプ○デターか何かなだけであるが。

希望の見えぬ明日に、瞳のハイライトを尊厳というか色々大切なモノをズタボロにされた少女の様に曇らせながら無心に天井のシミを数えていると、携帯電話が軽快な音楽と共にメールの着信を告げた。

腕立て伏せのしすぎで動かす度に醒鋭孔を突かれたかのように激痛が走る腕を何とか律しながら、一夏はポケットから携帯を取り出し、ディスプレイに映し出された名を確認する。

そこには別におかしい事では無いのに、一夏の予想を大幅に裏切る人物の名が記されていた。

（キリ……？）

自分のクラスメイト兼協力者からの突然なメール。

彼女は日常生活ではまどろっこしい事を極力を嫌うため、用が有るならなら即座に電話の方で連絡を入れるので、メールで来るというのは非常に珍しい事に思う。少なくとも、一夏が彼女のメールを受けるのは初めての事であった。

（何の用だろ……）

まさか、直接口では言えない事なのだろうか？

可能性として無い訳ではないだろうが、例え暴れた牛が１００匹来ても優雅に歌っていそうな神経をしていそうな彼女が、この様な女々しい事をしてくるだろうか？

たとえ彼女なら、初デートの約束であろうと思い立った瞬間、閻魔の御前であろうとも背中を叩きながらありとあらゆる都合を無視して大声で相手に取り付けそうだ。

そんな本人に聞かれたら、利き腕じゃない方の腕で片足を持たれ、崖の上で逆さ釣りにされそうな事を思いながら携帯を開き中身を確認する一夏。

《篠ノ之の奴は今、近くに居ないか？》

最近流行りの顔文字も記号も何も無い飾りっ気が皆無な文章に、少し「キリらしいや」と思いながら一夏は文章を打ち込み返信した。

《箒ならシャワーを浴びに行ったけど、箒になんか用か？》

そして返信後、携帯を閉じて一息つこうとした瞬間、すぐさま今度は先程とは別のアラーム――――電話の着信を告げる音楽が手の内で震えだした。

ディスプレイに映し出され名は、言うまでも無いだろう。

『よぅ、一夏。伊達にあの世は見てないか？』

「……ああ、本当に、フランダースのネロ達に来たのと同じのがお迎えに来そうだ。んで用事は何だよ、箒ならまだまだ上がるのに時間かかるぞ？」

紛れも無い本心で、今の状況を簡潔に伝える一夏。
その言葉に苦笑いしながら、姫燐は事の次第を告げた。

『いやそうじゃない、今日オレが用が有るのは篠ノ之じゃなくてお前だ。一夏』
「俺に？　お前が？」

一体なんだろうか？　彼女が自分に用などと、協力関係の事以外では思い当たる節が無い。
その協力関係であるが、目の前の問題は数週間後に控えている『クラス代表戦』ぐらいで、それはこの前、彼女自身が「トーナメント表が決まってない以上、気にしても仕方ないから今は、お前の専用機の調整と訓練に集中する」と言い切ったばかりだ。
しかし生憎と、専用機の訓練は前のクラス代表を決める戦いにて、対策の為にした賄賂などをフル活用したアリーナ独占が千冬姉にバレてしまい、しばらくのあいだ使用禁止を喰らってしまったため不可能。しかも彼女が使った賄賂も在庫ごと全て没収をくらったらしく、キリを含む生徒全員が非常に悔しがっていた事が記憶に新しい。
なぜか箒が何処となく嬉しそうだったのが気掛かりだったが、賄賂とは一体どんな物だったのだろうか？
そのあいだ手持ち無沙汰なので、姫燐の勧めもあり一夏は基礎体力を付けるために箒とのトレーニングに勤しむ事にした……結果がこの地獄のような筋肉痛の日々な訳だが。

「まさか、またグチを聞けって訳じゃないよな？」
『ああ、ソイツは……もういい。終わった……終わった事なんだよ……』

つい先日、一夏は姫燐の愚痴に散々付き合わされたばかりなのだ。

内容は主にセシリア・オルコットについてのモノで、彼女が言うにはこの前、セシリアが可愛かったから堪え切れずつい抱きついてしまったらしく、その日以来セシリアから露骨に避けられるようになってしまったらしい。

普通に挨拶しても明後日向かれるわ、昼食に誘っても即座に逃げられるわ、授業中に目が合っただけで寝た振りをされるわ、極めつけにはちょっとプリントを取る時に指が触れあっただけで、ワナワナと震えながら俯き、へたり込まれてしまった事まであるそうな。

ここまで避けられると、流石の姫燐でも飲まずにはやってられない。

チャイルド麦酒片手に一夏の部屋で延々と泣き語り、本来の部屋主達は朝まで一睡もさせてくれなかった。

いくら彼女にはデカい借りがあるとは言え、もうしばらくは勘弁願いたかったので一夏は少し胸をなで下ろす。

『んじゃ、もう一度確認だ。箒はシャワーに行って確かに傍に居ないんだよな？』

「ああ、居ないけど……？」

なぜここまで念入りに箒が居ない事を確認するのだろうか？

その答えを、一夏は嫌でも理解する事になる。

ニヒヒと、どこかの解決狐のような笑い声と共に、彼女は言った。

『うっし一夏。明日、オレとデートしろ』

その言葉にどこか、彼女と初めて会った時のような衝撃が一夏の

中にリフレインして、

「……はぁ？」

やはり、初めて会った時のような気の抜けた返事しか、織斑一夏には出来なかった。

## 第５話　「Ｅｓｃａｐｅ　Ｆｒｏｍ　Ｔｈｅ　Ｓｃｈｏｏｌ　（前編）」

わからない、さっぱり分からないぞ。

次の日こと土曜日の早朝、私服姿の一夏は待ち合わせの駅で１人、悶々と昨日の電話について考察していた。

何故だ、彼女はガチレズ……格調高く言うと百合の人だったはずだ。

この前だって、お前女は『乳』と『尻』どっち派だ？　と真顔で堂々とセクシャルハラスメントをして来たばかりだと言うのになぜ、水を被ると女になる訳でもない正真正銘『男』の自分をデートに誘う？

デート……もとい逢引、いくら恋愛とは無縁な自分でも、どのようなモノか位はマンガなどで知っている。愛し合う２人の男女が外にお出かけする事……で、間違いないんだよな？

あまりの異常事態に、自らの常識すら危うくなっていく。

ダメだ、非常識に囚われてはいけない。いいか冷静に、冷静に考えるんだ。

もしかしたら『デート』というのは名前だけで、友人同士の冗談と言う奴なのかもしれないし、それともセシリアにフられたせいで、元々ダメな頭がとうとう本格的にイレギュラーになってしまったのだろうか？

もしや、まさか俗に言う『二刀流』という奴に目覚めて……

「んな訳あるか、バカ」

「バィァラン！？」

後ろからの奇襲チョップに、一夏は頭を押さえながら振り向いた。

そこには、慣れ親しんだいつもと同じ呆れ顔、同じ声、同じ……

……？

「あ、あのー……」

「ん、なんだよ。一夏」

「あなたは『朴月姫燐』さんで間違いない……んですよね？」

「それ以外に誰が居るってんだ。オレの後ろにス○ンドでも見えるってのか？」

「い、いやだって……」

一夏にはある意味スタ○ド能力者よりも、よっぽど奇妙で衝撃なモノが映っていた。

姫燐の足元が、足元が２つに分かれていない。

一夏が履いているジーンズとは違い、ゆったりとした布で出来ており、それがふわりと風に揺れている。ぶっちゃけてしまえば膝位までの長さの、

「スカート……だと？」

異常事態のターンはまだ終わっていない。それ以外にも何時もの

トレードマークであるヘッドフォンも無く、代わりに首には赤いゆったりとしたスカーフが巻かれており、上も半袖のシャツの上に簡素なロングコートを羽織った出で立ち。
それらを赤と黒で統一し、いつもは適当に切り揃えられた赤髪も、パイロットキャップを被ってストレートに決めており、しかも何故か昨日までは肩位だったのに今では腰位まで伸びている。
まぁ、このエマージャンシーを一言で言ってしまえば、

「キリが……女の子だ……」

この一言に尽きるのであった。
普段、なぜか制服でも男物を着ている彼女が、仕草も趣味嗜好もおっさんそのものな彼女が、こういうのには無縁だと思っていた彼女が！
一夏に、電流走る。
馬子にも衣装とはいうが、これはもうそんなレベルでは無い。
普通に可愛いのだ。普段、色気もへったくれも無い格好をしている事も相まって、ギャップ効果という奴だろうか？　ともかく、いつもの彼女とは違い嫌でも女性である事を認知させられて……。

（あ……あ……？）

一夏は、茫然とするしか無かった。
正直、自分と彼女がここまで仲良くなれた背景には、彼女が『男っぽかった』と言うのが少なからず関係している所がある。
異性では無理な、どんな事でも気兼ねなく話せる同性。
普通の生活では別に珍しくも無いはずのそれが、今の一夏の環境には逆鱗や、紅玉並みにレアな存在なのだ。だから彼を異性だからと言って意識せず、こちらも意識する必要が無い姫燐の存在は、この女だらけの学園生活で生活する上で、一種の清涼剤のような物だ

った。
だが、今の彼女は違う。
女物の服を着ているだけで、頭がどうしても彼女の事を『仲の良い友人』である以前に、『1人の女性』として認知してしまうのだ。
よろしくない……この状況は非常によろしくない……。
夢から覚めた直後の様に、だんだん現実味が帯びてくる。
これは白昼夢でも何でも無い、自分と、キリの2人っきりの逢引である事に。

「……？　おい、どうしたんだよ一夏？」
「ふひゃい！？」

不意に肩に彼女の手を置かれ、つい過剰な反応でそれを振り解いてしまう一夏。
後ろを向き、大きく息を整えるその仕草を見て姫燐は一瞬ポカンとするが、次の瞬間には全てを理解したのか顔を過去最高に嫌らしく歪めて、

「うーん、オレは悲しいぞ一夏ぁ～♪」
「うひゃひゃおひゃ！？！？？」

後ろから、彼の背中に思いっきり抱きついた。
無論、その豊満なπを満遍なく当ててんのよする様な形で。

「オレはお前の事を、今まで友人だと思ってたんだがなぁ～」
「あああ、あのキキキキリさんささささ！！？？？」
「まさか手を払われるとはなぁ～、オレは夢想転生を習得できそうなほどの哀しみを背負っちまったよぉ～」

世紀末で水を求めるモヒカンとどっこいどっこいな笑みを浮かべ

て、哀しみを語るイソップガール。無論、一夏に対するセクハラは更にヒートアップさせながら。

「あ、謝る！　男らしく何でもするからとにかく離して！！　その双丘を離してくれキリ！！！」

「……言ったな」

計画通り……！　今の彼女の顔を表現するには、これ以上に適する言葉は無いだろう。

パッ、と未練も何もなく一夏の身体をリリースすると、姫燐は服の乱れを整え後ろ髪を掻き上げた。

「んじゃとりあえず、行きの電車代はお前持ちな。『男らしく』、頼むぜ？」

●○●

ハメられた……。

休日だというのに人が少ない電車の中で座りながら頭を抱え、一夏は自分が犯してしまった過ちをただひたすらに後悔していた。

いくら女の子の皮を被っているからと言って、こいつの中身は狡猾な策士なのだ。それは協力者であり、少し前にその恩恵を受けた自分自身が一番良く分かっていた筈なのに。

きっと、自分は今日中このネタで揺すられるのだろう。下手をすれば、このデートが終わった後もずっと……。

「安心しろ、流石にこれ以上はたからねぇよ」

そう言いながら、上機嫌で鼻歌を歌う姫燐。
一夏の隣に座る彼女はいつもの足組みではなく、ちゃんと足を解き、手を膝の上に置いた仕草でちょこんと座っている。
女の子なら別にどうと言うこと無い仕草だというのに、それがまた一層不気味に一夏には見えてしまう。

「な、なぁ、キリ」
「ん、どしたよ？」

なんとなく、聞くのが怖いのだが……それでも聞かない訳にはいかない。

「どうして、その……今日はズボンじゃ……」
「ああ、これか？」

そう言って、スカートの裾をひょい、と持ち上げる姫燐。
その無防備な振る舞いが、また一夏をヤキモキさせる。

「お前なぁ、一応オレも女だぜ？　そりゃ休日くらいスカートを履くさ」

この言い分は本当の事ではあるが、それが全てではない。
確かに、姫燐はモテる為にそれ相応のファッションは勉強しているし、休日には女物を着て街に行く事だってある。だが、基本的にめんどくさい事が嫌いな彼女は別に人目を気にしなくてもいい時や場所……主にタダの買い物の時や、自室ではズボン（ていうかジャージ）１択だ。
学園は別にスカートでも構わないのだが、やっぱりズボンの方が楽であることや、そっちの方がレアで需要ありそうだから。という理由でズボンを着用している。

そして今日は別に気取る必要が無い相手……男の一夏とのお出かけな訳だが、あえて彼女はズボンではなくスカートを履いて行く事にした。

理由はとっても単純明快、一夏の反応が面白そうだったからである。

いつもはズボン姿の男っぽい姿しか見せた事が無いので、あえて今日はこういう女のファッションで出て行き、いわゆるギャップ萌えという奴をリアルでやるとどうなるのか実験してみたのだが、効果は抜群であった。

自分の女の子らしい服装に呆然としてあたふたする一夏の姿は、カメラを持っていなかったのが非常に悔やまれるほどに失礼ながら大爆笑モノだった。箒とかが居ればもっと面白い事になっただろう。

「そ、それでだな、昨日からずっと聞こうと思ってたんだが、なんで今日は俺とその……デートに？」

「あー、それはだな」

やはり緊張した声色で昨日、彼が悩みに悩み非常に疲れ果てているというのに、羊が柵を飛び越えるのをストライキする位に悩み抜いて結局答えが出なかった問題の答えを求める。

「なぁ一夏。お前ここ最近、トレーニングを休んだことあるか？」

「休んだことか……？」

そう言えば、クラス代表戦の対策から今日まで、平日も休みもずっとトレーニングに明け暮れていたような気がする。我ながら酷い青春だ。

「『継続は力なり』って言うがな、根の詰め過ぎも良くない。物事は大抵、ほどほどが一番だ」

彼女が思い立ったもの、そんな巨人のスター的青春を送りそうになっている一夏の身を案じての事であった。というか、昨日やたらハイテンションな箒との会話で明日からヘレクレス・ファクトリーも真っ青なトレーニングメニューを計画している事を聞き、一夏を多少強引にでも学校から引きずり出さないと、本格的に力石君みたいになりそうだと判断しての行動である。

昨日、箒が近くに居ない事を念入りに確認したのもこの事からだ。万が一聞かれれば、１００％ややこしい事になる。

「だから……デート？」

「そう、故にデート」

これもサポートの一環だ。

前々から姫燐は思っていた。コイツには恋愛というか、他人の好意に気が付く回路が須らくイカれていやがる、と。

そいつはバッドだ。このまま生きれば、多分コイツは誰かが差しのべられた救いの手にすら気付かずに１人孤独にくたばるだろう。コイツがこれから進む道は、たった独りで大往生を迎えれるほど生易しくは無い。

コイツにはパートナーが必要だ。それこそ、この修羅道でさえ共に笑い合って墜ちて行く相方が。

無論、その道連れを選ぶのはコイツ自身だ。コレばかりは、所詮は他人のオレがあれこれ決めていい問題じゃない。

だから、一夏には自分で気が付いて貰わなくてはならない。

アンタと共に、墜ちる覚悟を持った人間の存在に。

だから姫燐はその一環として、このデートプランを企画した。

正常な男女のお付き合い、と言うモノを通してこのポンコツを少しでも修理できればと考えたのだ。これが今日、面倒が嫌いな彼女

が女物を着て来た理由その2だ。
　プラン次第では多少の荒療治も考えてはいたが、明らかにオレを意識しているこの様子なら廃案でいいだろう。
まずは、コイツに女性を意識する事を覚えさせないとな。自分から意識し始めれば、自然と他人の好意にも敏感になって行くだろう。主に箒とか、箒とか、箒とかの。
　そんな事を思いながら心の中でガッツポーズをする姫燐の横で、一夏はとにかく心を静めようと他の事、他の事をひたすらに考えていた。
　そうして、開口して飛んで来た言葉は、

「なぁ、キリ」
「ん、今度はなんだ？　スリーサイズ以外なら答えてやる」
「俺……外に出ていいのかな？」

　本来なら悟ったニートの戯言にしか聞こえないが、一夏が言うとたんに重みが別格になる言葉だ。
　彼はその気になれば世界をちゃぶ台返しできるスーパーフェミニスト兵器――ＩＳを世界で唯一動かす事が出来る『男』で、当然その身体の謎を欲しがっている人間は誇張抜きで星の数だろう。
　そんな数の人間が自分を狙っていると教えてくれたのは、他ならぬここで呑気に鼻歌を歌う彼女自身である。

「ああ、その件か」
「キリもこの前言ってたじゃないか。俺、迂闊に外に出かけたらマズいんじゃないかなー、って思ったんだけど」
「大丈夫だ、問題ねぇよ。やっこさんも、流石に今は仕掛けて来ないはずだ」
「なんで言い切れるんだ？」
「それはだなぁ……と、コホン」

姫燐は咳払いと共に一夏に説明を始めた。

「まず、お前はＩＳ学園の生徒だ。この時点で相手からすれば厄介な事この上無い」

ＩＳ学園は各国から生徒が集まるだけあって、それらを統括するためにどの国の干渉も受けない一種の治外法権として機能している。

ここ生徒は言ってしまえばＩＳ学園という国に住む国民であり、迂闊に手出しをすれば即座に外交問題に発展しかねないのだ。しかも、それが全国的な著名人であれば尚更に。

「でもさ、相手はその……その道のプロって奴等だろ？　俺をさらうのに、どこの国がやったのか分かるような証拠とか残すのか？」

「どうした、今日は妙に冴えてるな。その辺もオールライトだ」

もし万が一、どこかの国が一夏をさらい、その謎を解明して『男性でも動かせるＩＳ』が量産できたとしよう。

しかし、それを表に出す事は非常に難しい。

当然、出来てしまえば『男でも動かせるＩＳ』は世界唯一の技術となり、利益を求める為に国はその技術を独占したがるだろう。だが、独占してしまえば一発でバレてしまうのである。

「あの国は、織斑一夏を誘拐した」と。

そうなれば世論は一気に最悪レベルになり、外交も全て絶たれるだろう。敵も大勢増える。

そんなことになってしまえば、その国に残された道はただ１つ。

「滅び」、のみである。

かと言って、他の国と共同で開発しても滅亡すらチラつく超ハイ

リスクを負う割には、国という単位で考えるとリターンが少なすぎる。

しかもその技術自体も最悪、極度の女尊男卑思考の女性達によって闇に葬られかねない。

男と女が戦争したら3日と保たないで男が負ける。

このご時世をもっとも分かりやすく現した、どこの誰だか知らん奴が言った言葉だが、実に的を得ている。

例え男がＩＳを動かせるようになっても、誰もが最初は素人なのだ。

技術的にも不安定な所が多いだろうし実戦経験も浅い集団では、技術的に安定した百戦錬磨の兵達にはやはり勝ち目が薄い。

個人的な見込みでは、良くても『3日』の部分が『1週間』に変わるだけだろう。

だから、迂闊に動いてもロクな結果にはならない。

織斑一夏は男達の『希望』であると同時に、一部の女共にとっては『絶望』という表裏一体の存在なのだ。

「下手すりゃ暗殺とかもして来るかもしれんが、その点も心配いらんだろ」

「な、なんでだよ……」

「そりゃお前がさっきも言った通り、『絶望』であると同時に『希望』だからさ」

そう、彼は『希望』。どんなに貧困に喘ぐ国でも、彼の謎さえ手に入れば一気に経済大国へと華やかにクラスチェンジするだろう。

それほどまでにＩＳという兵器は今、この世界の根底を形成しているのだ。

例え一部の女共でも、余程のアホじゃない限りはいくらでも利用価値がある金どころか富権力財宝が全てごっちゃになった卵を即座に潰すなどと考えないはずだ。

「ま、余程のアホが来ても、そう簡単にはお前は死なねぇよ」
「……どういうことだよ？」
「決まってるだろ。このオレが、お前を護るからさ。シュワちゃんが銃撃戦で生き残る確率くらい安全だぜ？」

そう言って、彼女はウインクをしながらスカーフの下に隠された太陽のチョーカーをツンツンと突いた。
……なんで、こういう台詞を素面で吐けるのだろうか？　俺には絶対に無理だ。
などと、お前が言うな。と、どこからともなくツッコミが飛んで来そうな事を一夏は考えていた。

「それに今日は、『最強のボディガード』様がついてきてるからな」
「最強の……ボディガード？」
「お、着いたみたいだぜ」

一夏が聞き返すのとほぼ同時に、アナウンスが目的の駅に到着した事を告げた。

「さぁ、行くぜ。今日は遊び倒すぞーーー！」
「お、おい！　ボディガードって……」
「大丈夫大丈夫。お前が心配する事なんざ、何も無ぇよ！」

そう言って姫燐は困惑する一夏の手を引き、電車から降り立つ。
駅のホームから覗く朝の陽射しは、そんな2人を微笑ましく見守っているように見えた。

○●○

セシリア・オルコットは激怒した。
必ず、かの邪智暴虐寝取り野郎を除かねばならぬと決意した。
休日、たまたま朝早くに目が覚めてしまい、何となく朝の散歩にでも出かけようと部屋の外にでた瞬間、彼女は偶然にも見てしまった。
姫燐の部屋から出て来た、可愛い洋服を着た『女の子』を。
心臓が急ブレーキをかけたかのように跳ね上がる。
ホワィ？　何故？　どうしてこうなった？
我が愛しの彼女は人数の都合上、１人部屋でルームメイトは居なかったはずだ。
では、あの女は一体だれだ？　もしや、自分以外にも彼女が？
そりゃあの日以来、「おはよ、セシリア」と挨拶されるだけで顔を直視できないし、「昼飯食いに行こうぜ、セシリア」と呼ばれるだけで食事が一切喉を通らなくなるので心配をかけないよう逃げるしかないし、「ん。悪りぃ、セシリア」とちょっと指先が触れあっただけで全身の力が抜けてしまうが、何も嫌われる様な事はしていないはずだ。うん。
ならばますます分からない。あの女は一体……？
そこで、セシリアの無駄に賢い入試トップブレインが閃いた。

（まさか……姫燐さん！？）

いつもとは違いすぎる服装に一瞬信じる事ができなかったが、この学園であのような美しい赤髪をしているのは彼女だけだし、先日に比べ妙に長い髪もエクステを使えば何とかなる。
では、姫燐はそのような格好で一体どこに？
多少心苦しいモノを感じたがそれよりも好奇心と使命感が勝り、ＩＳの装着よりも遥かに速い速度で外行きに着替え、彼女の後を付

けること駅前まで。
そして、そこに居た。討つべき寝取り野郎は。

（織斑……一夏ッ！！！）

待て、まだ慌てるな。感情を殺し、近くにあった植え込みに身を隠すセシリア。
姫燐が後ろから彼を小突き、振り向いた彼はやはり彼女の服装について自分と同じように驚愕している様に見える。
そして、彼女が肩に手を置くとオーバーリアクションで驚く一夏。

（あ……あざといですわ……！）

実際にはオーバーリアクションでも何でもないのだが、彼女の嫉妬に狂ったフィルターを通せばあら不思議、あっという間にあの男が姫燐の気を引く為に一芝居打った行動に早変わりである。

（ぐっ……ぐぐぐぐぐ！！！）

あの試合で、セシリアは一夏のことを中々に骨のある男だと思ったし、それに少しカッコいいかも……とまで評価を格上げしていた。
しかし、やはりそれは間違いであった。
男など、所詮は皆同じ。貪欲に女を狙うハイエナなのだ。
この前、後学のためにルームメイトに借りて読んだ「リリープリンセス」に書いてあった通りである。

（マンガというのも、案外バカにできませんわね）

バカなのは彼女の頭なのだが、それを口に出来る人間は残念ながら居ない。

そうして1人、うんうんとまた新たな勘違いを突貫建築していると、

ギュッ

（――ッ！？？？！？？！？！？？！）

抱きしめた。彼女が織斑一夏を抱きしめた。

あまりの事態に己の中の小宇宙が消滅しかけるが、何とか持ち直し目の前の現実に立ち向かう。

姫燐が、後ろから、幸せそうな笑みを浮かべて、織斑一夏に、抱きついています。

どう見てもバカップルです。本当に、本当にありがとうございました。

（……神は、言ってますわ）

寸分の迷いなく『ブルー・ティアーズ』を腕だけ展開装着し、レーザーライフル『スターライトｍｋ？』を取り出すセシリア。

（その綺麗な顔の中身を、今ここで一切合切ぶちまけさせろと……！！！）

非常に自分勝手な神も居たモノである。

セシリアの中に仮にも人を1人殺そうとしているのに、自分でも恐ろしく思えてくる程の冷淡さがこみ上げてくる。だが、今は好都合。殺しに感情など邪魔なだけだ。

（くッ、姫燐さん退いて下さいまし！　ソイツ殺せませんわッ！）

スコープを覗き、一撃で仕留められるよう脳天に照準を合わせよ

うとするが、後ろから抱きついている姫燐が邪魔で思うように照準が付けられない。

（きぃぃぃぃぃ！　妬ましい羨ましい疎ましいですわーーー！）

自分も彼女に抱きしめられた事はあるが前からだけだ。バックはまだ未体験なのだ。

だというのにあの男は、あの男はァぁぁぁぁぁぁ！！！

（パニッシュ＆デス……ですわ）

主よ、お許しください。そして出来れば、あの男を速攻で地獄に叩き落として遠慮なく骨の髄まで地獄の業火で炭火焼にしてくださいまし。

やっと姫燐が一夏から離れる。それは、奴の守護天使が彼を見捨てたのと同意義であった。

（デリート……！）

最高のオリジナル笑顔を浮かべながら、セシリアがトリッガーに指を掛けようとしたその時、

「ここで何をしているオルコット？　学校外でのＩＳの起動は禁止されているはずだが？」

声が、聞こえた。

織斑一夏に憑く、もう1人にして文字通り史上最強の守護天使の、そしてセシリア・オルコットにとっては無慈悲な告死天使の、底冷えするような審判の声が……。

●○●

「それで、貴様が街のド真ん中でＩＳを起動させ、一体何をしようとしていたか……弁解があるなら聞こうか」

休日だというのに空席が目立つ電車に揺られながら、セシリアは死罪を待つ罪人のように、そしてその死刑の執行人である彼女……織斑千冬はスーツじゃない以外はいつもと何ら変わりない威風堂々とした態度で隣り合って座っていた。

「私が見た限りでは、貴様はウチの生徒達にライフルを向けていた様に見えたが……私の見間違いだったか？」

全て解りきっている筈なのに、ここであえて事の次第を聞くのはセシリアに発言を許すという彼女なりの慈悲だ。もし千冬が本当に無慈悲なら、すぐにでもギロチンは落ちている。

「見間違いでは……ありません……」

デッドエンド。今のセシリアの状況は正しくソレである。

現場を目撃され、現行犯逮捕されてしまった以上、どうあがいても絶望。どう言い逃れしようとも道場送り。どう逃げ出そうにも石の中にいる。

もはや彼女に残された道は１つ、祈ることだけであった。

そして、告死天使はため息を１つ付き、セシリア・オルコットへの審判を下す。

「そうか。なら、次からは注意するように」

「はい。お母様、お父様、セシリアも今そちらに……へっ？」

アイアンメイデンの蓋は、閉じる事が無かった。

どういう事かは分からない。

だが、セシリア・オルコットは一命を取り留めた。それだけは確かな真実だった。

「え？　ん？　ふぇ？」

「何を不抜けた声を出している。当然、帰ったら反省文は書いて貰うがな」

そのような紙切れで命を繋げる事ができるなら何百枚でも書くが、それでもセシリアは腑に落ちない。

何故だ？　なぜ審判は下されない？

その事をセシリアはおずおずと千冬に尋ねると、

「ああ、その事か。……今回は初犯だからな、次回からは容赦はせん」

少し答えを溜めたのが気になったが、余計な事を口走って刑が再執行されても嫌なのでセシリアは何も言わない。

その代わりに、気になっていた別の要件を切り出す事にした。

「そ、その、織斑先生はどうしてこ……」

「偶然だ」

まだ言い切っていないのに、千冬は即答した。

「で、では何でわたくし達は何故この電車に乗っ……」

「偶然だ」

流石にコレは苦しい。
偶然で自分の弟が乗っている隣の車両に、しかも付かず離れずに向こうの様子がチェックできる丁度いい席に座るだろうか。
それにセシリアに説教をするならそこら辺の喫茶店でいいし、２人分の電車代まで払ってまで、この姫燐と一夏が乗るこの電車に無理やり引きこむ理由が無い。
……『セシリアへの説教』と『弟の尾行』を両立させるには、これ以上に適した手段はないが。

「……何かおかしいか？　オルコット」
「い、いえ、とっても自然な理由ですわ先生……」

この人に眉間にシワを寄せながら睨まれて、ＮＯを唱える事のできる人間なんてこの地球上に存在するのだろうか？　少なくとも、セシリアには到底不可能な事である。

「……」
「……」

気まずい、非常に気まずい。
なんなのだ、このプレッシャーは。無言で腕を組みながら座っているだけだというのに、大気が彼女にひれ伏し、この重圧を作っているのではないかと錯覚してしまう。
それにもう１つ、彼女の服装がまた威圧的だ。

「せ、先生？　また、随分とその……こ、個性的な私服ですね？」
「……そうか？　私は外出する時はいつもコレだが」

嘘つけ。セシリアは心の底からそう思った。

トレンチコートにつば広ハット、男物のスーツにサングラスまで装備して、それらを見事に黒と僅かな白に統一した姿は、どう見てもメン・イン・◯ラックか何かの成りそこないだ。

それらを見事に着こなしているのは素直に凄いと思うが、それでも傍から見れば完全に不審者である。というか、いわゆる裏社会でシノギをしている人にしか見えない。

客が少ないのもあるだろうが、自分達の周りに人が居ないのは間違いなくこの人のせいだ。と、セシリアは確信していた。

一昔前のスパイ映画だって、もう少しマシな服を着るだろう。

しかもそれを私服てアンタ……。

「なんだ、異存でもあるのか？」

「い、いえ……ありません」

言いたい事も言えないこんな世の中じゃ……な気分になっているセシリアを尻目に、ずっと一点のみを凝視する千冬。さっきから、姫燐が明らかにこちらをチラチラと見ているのにそれすら眼中に無いようだ。

神様は完璧な人間を作ることは決して無いという事を悟りながら、セシリアは口を開いた。

「あ、あの……先生？　その辺にしといた方が……」

「バカを言うな。なんのために今日、山田先生に仕事を全て代わってもらったと……オルコット」

「は、はひぃ！？」

今まで見たこと無い、獲物を狩る者の目をした千冬に正面から見据えられ、狩られる者でしか無いセシリアは完全に震えあがる。

そうして千冬はゆっくり、一言一句丁寧に殺気をラッピングし、両手でセシリアの双肩を掴みながら質問した。

「貴様は、先程、何かを、聞いたか？」
「聞いてません！　聞いてません！　最近、鼻炎が酷くて何も聞えませんでした！」
「ならいい。あと、もう私に構うな」

肩から手を離され、涙目になりながら自分の胸に手を当てて、生きてる事の素晴らしさを実感するセシリア。完全に尋問だったが「もう命あるだけでいいや」と、どうでもよくなって来る。
そんなこんなをしている内に、電車のアナウンスが次の駅への到着を告げた。

「……降りたか」

この駅の付近は歓楽街で、若者が喜びそうな店は大抵揃っている。
確かにデートには持ってこいな場所だ。
千冬は立ち上がると、まだ座りながらエクトプラズム状態のセシリアに向かって言い放つ。

「いいか、オルコット。寮に真っ直ぐ帰れ、そして今日見たことは全て忘れろ。分かったな？」
「……ふぁい？」
「では、また学園でな」

セシリアを乗せたまま、千冬の背後で電車のドアが閉まる音がする。
さて、ここからが本番だ。
……前々から、問題児だとは思っていた。
確かに、一夏を良い方向へと導いてくれているのには感謝している。

特に、この前のクラス代表決定戦での著しい成長は目を見張るモノがあった。
だが、校則違反の常習犯である上に、犯罪にまで平気で手を染める。
あのような盗撮写真、一体いつ撮ったのだ。しかも、それを第三者にばら撒くとは……回収にどれほどの時間と労力を割いた事か。
そしてあまつさえ、どのような思惑があるかは知らないが一夏とデートなどと……もはや捨ててはおけん。

（やはり、あのような輩に一夏は任せてる事などできん！）

朴月姫燐、少しでもデート中に一夏におかしな行動をしてみろ……その時は貴様を……。

織斑千冬はコートを翻すと、またこっそりと決してバレないように2人のストーキングを再開した。……あくまで、本人はストーキングのつもりで。

ああ、最強のターミネーターにロックオンされてしまった姫燐。
そしてそれ以外にも別のもう1つの影が、彼等に近付きつつあった。

「一夏ぁ……どこへ逃げたァ……」

はたして、彼等の運命や如何に。
――中編に続く。

「ん！」
「どうしたんだ、キリ？」
「なんか、オレの知らない所でフラグが立ったような気がするぞ！　このフラグレーダーがティンと来た！」
「その1本だけみょいん、ってなってた髪、そういう機能あったんだ……」
「ああ、しかもオレの予想じゃお前にも立ってるぞ一夏！」
「なんか激しく嫌な予感がするけど……まぁいいか」
「あー、はーやくこいこいフラグ回～収ぅ、っと。ヒャッホイ！」

フラグはフラグでも、それが死亡フラグだという事は未来を知らぬ彼等が知る由も無い事であった。

## 第5話「Ｅｓｃａｐｅ Ｆｒｏｍ Ｔｈｅ Ｓｃｈｏｏｌ （前編）」（後書

更新が遅れると言ったな……アレは嘘だ。
……はい、実はこのネタがやりたいが為だけに４月１日に無理して
まで上げて、結局過去最低に遅くなったクラふぉうです。ただのア
ホですな。

初の前後編ですが、理由は簡単。
作者にもここまで長くなるとは完全に予想外だったからです。
イベントも始まったばかりだし、下手すりゃ中編まで行きそうな勢
いです。
しかし、それだけ今回は重要なイベントが盛りだくさんな訳なんで
すが。

それでは、また次回～

# 第6話　「Ｅｓｃａｐｅ　Ｆｒｏｍ　Ｔｈｅ　Ｓｃｈｏｏｌ　（中編）」

早朝、朝の職員会議が終わり1年1組の担任と副担任こと、織斑千冬と山田真耶は職員室で互いに事務仕事をこなしていた。

クラス代表戦が控えている事もあり普段に比べれば仕事内容はハードだが、それでも千冬はテキパキと、真耶は少しもたつきながらも着実に仕事を消化していく。

そして一区切り付いた所で真耶が淹れて来たお茶をすすりながら、2人はこの前のクラス代表決定戦について花を咲かせていた。

「それにしても、織斑くん凄かったですね。第二世代のＩＳで第三世代に勝ってしまうなんて。流石は千冬先生の弟さんです」

「ふん、あのような無様な勝利、白星にカウントしていいモノでは無い。むしろ私としては、あの状況から立ち上がったオルコットの方を褒めてやりたいぐらいだ」

そう辛辣なコメントを言いながらもその口元は緩んでおり、これは彼女が非常に上機嫌だというサインである。

いつも険しい表情をしているので誤解されがちだが、ゆっくり彼女を観察してみると以外に表情が豊かで、結構思っている事が顔に出やすいタチなのだ。似ていないようで、やっぱり細かい所が似ている姉弟である。

元彼女の教え子であるためそれを理解している真耶は、微笑みながらその言葉をオートで脳内変換する。

「全く、あのバカはいつも肝心な所で油断する」

（まったく、いつまでたっても一夏は変わらないな）

「あそこまで有利な状況で、逆に追い詰められるとは……」

（しかし驚いた、私が少し見ない内にあそこまで強くなっていたと

は）

「姉として、非常に不甲斐なく思う」

（お姉ちゃんは、とっても嬉しいぞ）

「……山田先生、聞いていますか？」

（……真耶くん、私の言う事を聞いて）

「はッ！　はい！　ちゃんと聞いてにちゃぁ！！？」

不意をつかれた千冬の問いに、手に持ったお茶をひっくり返し、アツアツの中身を服と肌に引っ被ってパニックを起こす真耶。

すかさず、千冬が持っていたハンカチで水分をふき取る。

「大丈夫ですか、山田先生？」

「は……はい……ごめんなさい」

まだ少し呆けながら、千冬の姿を見遣る真耶。

因みに、今の千冬の言葉を山田流エキサイト翻訳するとこうなる。

（大丈夫だったかい？　真耶くん）

あと、ここに何か薔薇とかそういうキラキラしたオーラを付属して、千冬の表情を２００％くらい緩めれば、あっという間に山田印のアイフィルターは完成だ。

彼女の一挙手一投足を眺めるだけで、心の中で壮大に悶える真耶。

……まぁ、一言で言ってしまえば彼女、山田真耶も大概な人間であった。

「そういえば織斑くん。最近よく篠ノ之さんとトレーニングをしている所を見かけますね」

「ああ、そうだな……」

そこで少し千冬の表情が曇る。
この表情は、何か心配ごとがある時の表情だ。と、真耶はＯＦで察知する。

「どうしたんですか、織斑先生。何か心配ごとでも？」
「ん……いや、なんでもありませんよ山田先生。帰宅部だったあのバカにも、ようやく男としての自覚が出て来たのでしょう」

表面上はそう取り繕うが、内心千冬の心は波立っていた。
確かに、トレーニングに励むこと自体は問題ない。
これから幾多の試練が待ち受けているであろう我が弟には、本人がどう思っていようが嫌にでも強くなって貰う必要がある。故に彼の意思を無視してまで、このＩＳ学園に入学させたのだから。
しかし、あの箒とのトレーニングはいくらなんでもやり過ぎだ。
自他共に認めるヒューマン最強の千冬の目から見ても、異常だとキッパリ言い切れる訓練をほぼ毎日の様に繰り返している。
本来、トレーニングというのは一度肉体を『破壊』し、そしてより力強く『再構築』することによって強靭な肉体を作って行く行為だ。だが、今の彼等の訓練はその『再構築』をする暇を与えず、即座に次の『破壊』を行っている。
これではただ全てを破壊し続けるだけで、全てが次に繋がらない無意味な堂々巡りだ。
一夏の事を気にかけてくれる箒にはいつも感謝している。この前も彼女の密告があったからこそ、あの問題児の悪事を暴くことができた。
しかし、今回の件は流石にやり過ぎだ。後で直々に口出しする必要があるかもしれん。

（あまり、好ましくはないのだがな……）

だが今、自分はこのＩＳ学園の教師だ。教師という立場である以上、例え肉親であろうとも、親友の妹であろうとも、全ての生徒に対して平等に当たらねばならない。

それゆえに、親身になり過ぎる事が出来ない。

箒は『どこかのマッドさん』とは違い、筋を通し、しっかりと諭してやれば話が分かってくれる奴だという事は知っている。しかし、それを他の生徒達はどう思うだろうか？

恐らく、自分が箒の、そして弟の一夏のためだから特別に動いた。と、思う生徒が少なからず現れるだろう。

そうなってしまえば、詰みだ。もう織斑千冬という『教師』を信頼する者は居なくなる。

（まったく、厄介な奴だよ。『立場』というモノは……）

どうしたものか……と、思案に暮れながら立ち上がり、窓の外を覗く。

空を見上げると今日は澄み渡る快晴で、僅かな雲が千冬の憂鬱などどこ吹く風と流れて行く。次に下を見下ろすと、休日の朝から部活動に所属している生徒達がランニングに精を出し、中には私服で街に出かけるのであろう生徒達の姿も……姿も……。

「……山田先生」

「どうしましたか？　織斑先生」

「すまない急用ができた。私は今日、早引きする」

「え、えぇ！？　いきなりどうしたんですか！？」

「仕事も君に全て押しつける形になってしまうが……どうしてもやらなくてはいけない事ができた」

その時、真耶は悟った。この有象無象を一切見ず、その先に待ち

構える『何か』のみを真っ直ぐに見据えた顔は、彼女が決意を超○金Z並みに固めた時の表情だ。さっきから敬語をスッパリ忘れているのも、このモード時の特徴だ。

この状態に入った彼女は、第三者が何を言おうが止めることは出来ない事を真耶は知っている。なら、自分が出来る事はただ1つ。

「はい、任せて下さい。織斑先生……お気をつけて」

「ああ、すまない。この埋め合わせは、何時か必ずしよう」

何も言わずに、その背中をそっと押す事だけだ。

なぜなら、その表情は彼女が久しぶりに見せる、真耶が一番大好きな表情だったから。

真耶の後押しを受けた千冬は自分のバッグを引っ掴むと、人類最強のスピードで職員室を出て、「教師？　ルール？　何それ」と言わんばかりの勢いで廊下を駆け抜ける。

普段はストイックなまでに真面目な彼女をここまで突き動かすのだ、余程重要な要件なのだろう。

真耶はその足音が聞こえなくなるまで彼女の背中を見送り、そして足音が完全に聞えなくなった辺りから先程の表情とセリフに壮大に独り悶え始め、事務椅子に座りながら子供の様にグルグルと回しながら、バランスを崩し後ろに思いっきり転倒した。

そうして1時間後、仕事をかなぐり捨てた鋼鉄の意思と面皮を持った成りそこないメン・イ○・ブラックは、実の弟と学園きっての問題児とのデートのストーキングを開始した……お前、それでいいのか？

第6話　「Ｅｓｃａｐｅ　Ｆｒｏｍ　Ｔｈｅ　Ｓｃｈｏｏ

## 1　（中編）」

ここはＩＳ学園から少し離れた所にある歓楽街。
完成してからまだ日が浅いが、その広大な敷地にモノを言わせ、若者向けの店を中心にありとあらゆる専門店が出そろっている。
無論、この近辺では間違いなく最高にデートには持ってこいな場所で、先程から一夏や姫燐と同年代位の男女が仲睦まじく腕やら何やらを絡めながら歩いている。
何時もなら、やるなら場所を考えてやってくれ。と冷めた視線しか送ることしかできない一夏だが、今日は少し、いやかなーーーり事情が違った。

「さーて、まずは何処へ行きますかねっ、と」
「……」

なぜか女物を着た姫燐に、なぜか手を引かれて歩く自分。
周りの視線が酷く痛い。痛風ならぬ痛視線だ。ＩＳ学園で似たような状況に慣れてなかったら、間違いなく自分はここから逃げ出していただろう。朴月姫燐からは逃げられない、そんな気がしなくもないが。
自分も同じ立場に立って、ようやく分かる。カップルという奴等は、皆この苦行に耐えられるというのか。昔からチャラチャラした女連れの不良達には良い印象を持った事が無かったが、こういう所だけは見習う必要があるかもしれない。
いや、それ以前に自分とキリは決してカップルなどでは……

「おい、一夏！」
「ほ、ホワィ！？」

思考のどん底に陥っていた一夏を覚醒させたのは、少し不機嫌そうに眉をひそめる全ての元凶こと姫燐の一声だった。

「なにさっきからボケっとしてんだよ」

「あ、ああ、その、ゴメン」

「ったく、折角のデートなのに女に任せっきりってのは、まるでダメな男のやる事だ」

つまりお前の事だよ、一夏。と締めくくる姫燐。

そうは言われても、こちらはデートなんぞ初体験なのだ。右も左も分かったモンじゃない。

そんな事を思いながらも、口に出したらまた小言がガトリング掃射されきそうなので黙る事しか出来ない一夏。

「しゃあねぇな。んじゃ先ずは、オレの用事から片付けさせて貰うぜ」

「お前の用事？」

そう言うと姫燐は、一夏を電化製品の専門店へと引きずり込んだ。

例えＩＳという超技術が発展しようとも、人間の生活というモノはそう簡単には変わるモノでは無い。店内に入った途端、最新のテレビやエアコン、掃除機などが一斉に彼等を出迎えた。

「あ、あの掃除機、少し試してみたいな」とか「お、電球が安いな」とか、必要無いのに自然と思ってしまうのは主夫の悲しきサガである。

そんな一夏を尻目に、姫燐はズカズカと目当てのコーナーへと一直線に向かう。

「うっし、あったあった」

「これは……カメラ？」

彼等の目の前にズラッ、と並ぶ、色取り取りの様々なサイズをしたカメラ達。

彼女の言う用事というモノは、どうやらコイツらしい。

「キリって、写真が趣味だったのか」

「あー、趣味というか、どちらかと言えば実益のほうが多いような……」

彼女にしては歯切れが悪い台詞に、首を傾げる一夏。

まぁ、それもいた仕方ない事で。姫燐からしてみれば真実を言える訳が無い。

今日彼女がここに来たのは、没収されたカメラの代わりを買うためだった。

この前、自室で賄賂用の写真（一夏のアレコレ）を加工編集していると、突如抜き打ち部屋検査という名目で現行犯を押さえられ、それら一切合切を没収されてしまったのだ。

のちに聞けばその日、他の部屋には抜き打ち検査など無かったらしく、しかもその検査をしたのが生活指導でも何でもない千冬だった事から恐らく、どこからかこの情報を入手し、独断で動いたのだろう。あんのブラコン教師め、まさかＨＤごと持って行きやがるとは。せめてここで叩き割ってくれ。

賄賂を渡した奴には皆かん口令を布いたし、他の誰かには言った覚えなど当然ない。

大方、自分以外があの写真を持つ事を良しとしない身内こと『あんちくしょう』の犯行だろうが……畜生、今度会ったらどんなデマを吹き込んでやろうか。

実は一夏はカブトムシが好物だとか、実は一夏は丸ボウズな女が好きだとか、実は一夏は窒息プレイフェチなんだドゥーユーアスタ

ンドゥ？　とか吹きこんでも彼女なら全く疑わずに実行に移すだろう。

……まぁ、何を吹き込んでも一夏が可哀そうな事になるのは間違いないのだが。

「どういうのを買うつもりなんだ？」

「んー、できれば小さめの方がいいな。手ブレを押さえて、あとは軽くて持ち運びに便利で、加工と消音が楽な機種の方が……」

うーん、たかがカメラだと思っていたが、その筋の人間から見ればこれ程までに違いがあるモノなのか。と、一夏は素直に感心する。……加工とか消音とか言ってる時点で色々察するべきなのだが、生憎と彼はまだ古い地球人であった。

（しかし、なぁ……）

楽しそうにカメラを物色する彼女を見て、一夏は思う。

今日の出来事で思い知らされた。よくよく考えれば、自分はまだ彼女の事を何も知らないのだ。

朴月姫燐はガチレズで男っぽく、腹黒くてよく笑う女学生……それだけだ。

今までドタバタが続き自然と仲良くなってきたので気にしてなかったが、好きなモノとか趣味とか家族とか、俺はまだ彼女の事をこれっぽっちも理解していない。

（キリって……何が好きなんだろう？）

今度、機会があったら日頃の感謝を込めて、彼女の好きなモノを作ってあげるのも良いかもしれないな。

そんな事を思いながら、一夏は新しいカメラを手に持った姫燐と共

に、レジに向かって行った。

○●○

その後2人は様々な店を転々とし、昼ごろには一夏もデートに慣れて来たのか、自分から行きたい店を積極的に言うようになった。ただ選ぶ店全てが主夫臭く、姫燐に笑われていたが。

太陽も真上に差しかかる頃、朝から動きっぱなしだった2人は昼食を兼ねて喫茶店で休憩を取る事にした。昼時だったが上手く席を取ることができ、早速やってきた店員にそれぞれの注文を頼む2人。

「えーと、紅茶とホットケーキを」

「んじゃオレは、この『爆熱シャイン・アンド・ヘブンイチゴパフェ』と『ハートブレイクレジェンドラコーヒー』を」

なにそのGなイチゴパフェとコーヒー、と驚愕の眼差しを向ける一夏。

「ん、ああ。心配すんな、お前に喰ってもらうことにはならねぇよ」

いや、彼女の胃袋以前にネーミングとかその他諸々が心配なのだが……。本当に、ただの喫茶店なのかここは？

「ていうか、キリって甘い物平気なのか？」

「おう、大好きだぜ？　オレの部屋行けばチョコとか普通にあるしな」

つか、美味い物全般が好きだな。と付け加える姫燐。

学食でラーメンやかつ丼しか食べている所しか見た事が無かった一夏にとって、また新たな発見だった。

「なんだよ、オレがパフェ喰うのがそんなに変か？」

「いや……そうじゃなくてさ。俺、よく考えればお前の事、まだ何にも知らないんだなぁ、って」

そう、変だと思うのではない。今の一夏は、彼女を変だと思う事すら出来ないのだ。

物事を『変』だと思うには、その物事に定められた『基準』と照らし合わさなければならない。だが一夏は、朴月姫燐という人間の『基準』を知らない。だから、ただひたすらに驚くことしかできないのだ。

「んー、そうか？　お前が多分、オレの事を1番よく理解してると思うけどなー」

「だけどさ、互いにまだ色々知らない事が多いし、それに興味があるんだ。キリがどんな事が好きで、ここに来る前は何をしていたのか、とかさ」

その言葉が余程意外だったのか、姫燐は眼を丸くしていた。

しかし、すぐに少し恥ずかしそうに一夏から視線を外し、頬を指で掻いて呟く。

「……あんまし、面白い話じゃないぜ？」

「あ……何か、聞いちゃ悪い話しだったか？」

「うんにゃ、平凡すぎて面白くないってことさ」

それから彼女は自分の過去と、家族について話し始めた。

「オレは物心ついた時からこんなんだったよ。気が付いたら女の子が好きで、気が付いたらこんな喋り方だった。環境も、そんなに変じゃなかったと思うんだがなぁ……」

我ながら不思議だ、と首を傾げる姫燐と、ハハハ……、と苦笑いする一夏。

「親は両方とも居るぜ。なんかエネルギーとか何かだったかの研究員してる親父と、どこにでも居る専業主婦のお袋がラブラブで、兄弟とかそんな類は居ないな」

な、普通だろ？　と彼女は一夏に聞き返す。全く、なんでこんな普通の環境からこのような変態が生まれてしまうのだろう？　人類の神秘だ。

「んで普通に小中卒業して、就職率良いし、何より全国から女の子が集まる女子校だからＩＳ学園を選んだ、以上お終い」

「そうなのか……ん？」

そこで、一夏にある疑問が浮かび上がる。

「なぁなぁ、キリ」

「なんだ？」

「前々から気になってたんだけどさ。どうしてキリは専用機を持ってるんだ？」

専用機は本来、セシリアのような国の代表候補生や、大手の企業に所属している、または一夏のような特例以外には支給される事は無い。しかし話を聞く限りは、果てしなくただの一般人に近い姫燐がどうして専用機を持っているのだろうか？

「ああ、この子の事か」

スカーフの下に隠された太陽のアクセサリーが付いたチョーカー……シャドウ・ストライダーを突きながら、その事についても説明を始める。

「この子はオレがＩＳ学園に入学するって言った時に、親父が入学祝いでくれたんだよ。まぁ、入学祝いって言うよりも稼働テストに丁度良かったからだろうな。さっきも言ったが、親父の奴は何かのエネルギーを研究してて、そのエネルギーをなんか最新のＩＳとかに組み込む為のテストフレームらしいんだよ、この子はな」

無論テストフレームだからその新エネルギーとやらは使われて無いし、安全性を高める為に不必要なまでに装甲だらけだし、テスト用にエネルギーを照射する武装しか組み込まれてないんだがな。と、付け足す姫燐。

「なるほど、そうだったのか」

これで少しだけ、キリの事が分かった。

普段の立ち振る舞いから、もっと自分が想像もできないような壮絶な人生を送ってきたのかと思っていたけど、そんなことは無い。彼女もまた、普遍な１人の女の子なのだ。……ただちょっと、いやとても性癖が特殊なだけで。

「さて、今度はお前の番だ。一夏」

「ひょ？」

「なに言ってるんだ。まだお前のフェイズが終了してないぜ？」

なんのことか分かりませんと、虫野郎のような声をだす一夏を見て、彼女はやって来たイチゴパフェを食べながらニヤニヤとターン交代を宣言する。

「オレだけ過去バナ言ってお前が言わないってのは、ちょいと虫が良過ぎじゃないかい？」

「え……それは、そうだけど」

「安心しな。オレは例えお前がベトナム帰りだろうと、光の国からやって来た巨人だろうと受け入れる。お前と同じさ、オレもお前の事がもっと知りたいし、興味があるんだ。『織斑一夏』って人間にさ」

今度は、一夏が顔を赤らめる番だった。

自分で言っておいて何だが、これは言われた側からすれば結構に照れる。全くの無意識にこんな事をほざいていた自分を胸中で少し嗜め、彼は少し遠い目をしながら自分の過去を語りだした。

「俺……いや俺と千冬姉はさ、小さい頃に両親に捨てられて、それからずっと2人暮らしだったんだよ」

あちゃあ、マズイ事聞いたか……という顔をしている姫燐に一夏は、別に気にしてないさ、と言って話しを続ける。

「それから千冬姉は俺の事をいっつも護ってくれて、そのおかげで俺は小中を普通に卒業できたんだ。生活は決して楽じゃ無かったけど友達とかも居たし、なにより千冬姉がずっと傍に居てくれたから俺は今、ここにいる」

ああ、なるほど。こりゃブラコンにもなるわ。と、姫燐は斜め後ろの席に陣取る今朝からずっと自分達をストーキングして来ている

黒服を見遣った。……つか、オレの話をしてた時とは段違いな真摯っぷりでこっちを見てるけど、まさかとは思うがこの距離で会話が聞えてるのか？　さすが人類最強、聴力も最強なのか。

「……続けていいか、キリ？」
「ん、ああ。スマン」

視線を一夏に戻し、また彼の話しを傾聴する姿勢に戻る。

「それから高校入試の時に、学費が安くて就職率が高い『藍越学園』を受験しようと思ってたんだが……」
「ああ、それなら知ってる。試験会場で迷子になった挙句、間違って入った『ＩＳ学園』の試験会場にあった試験用のＩＳを勝手に動かしたバカな『男』がいるって話だろ？」
「……そんなに有名なのか、この事」
「そりゃ、試験会場がパンデミックかってくらいの大騒ぎだったからな。あの時、あそこに居た奴は無論、居なかった奴でも知ってるぞ。そのバカの話はな」

割と本気で落ち込む一夏のつま先を足で突きながら、彼女は彼女流に励ます。

「まぁ、そのバカのお陰でこうしてオレ達は会えたんだ。そこまで悲観するような事じゃない。むしろ感謝して然るべきだと思うぜ」
「……そうだな、アレも今思えばそんなに悪いことじゃないのかもしれない」

昔ずっと、考えていた事がある。
もし自分があの時、ＩＳと出会わなかったらどうなっていただろうか？　ということを。

最初はずっと後悔していた。あんな事が無ければ今頃はきっと、こんな女子だらけの学校で見世物パンダなんかじゃなく、授業をそこそこマトモに受けて、悪友の弾達とバカをやって、また家で姉を待つ平穏な毎日を送っていた筈なのに、と。

しかし、ここ最近はそんな事をスッパリ思わなくなった。

千冬姉や箒とも再会して、平穏とは程遠いが充実した日々を送って、そうして彼女とも出会って……。楽しいのだ。毎日が、あの緩やかでどこか退屈だった日常とは違い、今は1日たりとも同じ様な日が無い、生きていると実感できる濃密な毎日が楽しくて仕方ない。本当に、キリには頭が上がらない。彼女と出会わなければ自分はまだ、あの日の屋上から1歩も前に進めていなかったかもしれないのだから。

「そうそう、暗いことなんざ考えるだけ時間の無駄無駄。ポジティブシンキングに行こうぜ、それが人生って奴を楽しむコツさ」

「ああ……そうだな」

姫燐は、どこまでも明るい少女だ。太陽という言葉が、ここまで似合う女性も珍しい。

どんな時でも明るく笑って、適度に軽いジョークを飛ばしながら真っ直ぐに夢を追い続ける。そんな彼女に一夏は、一種の尊敬を覚えていた。

その精神の『強さ』。自分が追い求めている、形無きモノの1つの完成形を彼女は持っているのだから。

「俺も……いつか強くなりたいな、キリみたいにさ」

「オレが……強い？」

「ああ、キリは強いよ。俺なんかよりも、ずっと」

「……そいつはちょっと違うぜ、一夏」

パフェを削り取る手を止め、姫燐は少しだけ、ほんの少しだけ悲しそうな表情をした。
それは一夏が初めてみる、太陽の陰りだった。

「オレは、自分で言うのも何だが確かに強いよ。少なくともそんじゃそこら奴に負ける気はしない。だけどな……支えてくれる人が居てこそ、人って奴は本当に強くなれるのさ」
「……キリには、居なかったのか？」
「さぁな、正直に言うと……分からないんだ」
「分からない？」
「ああ、オレは今まで親父とお袋に育てられてきた。友人もそこそこ居た。だけど今こうして思えば、オレは本当に愛されてたのかな……って思う時がある」
「……どういう事だよ？」
「実感が湧かないんだ。過去を見ても、自分が、『朴月姫燐』が本当に愛されていたって実感がな」

親が悪かった訳でもない。自分は必要な教育と、必要な愛を充分に受けて育って来た筈だ。しかし、どこか心には虚しいモノがずっと住み着いて引っ越す気配が無い。

「理由はきっと、オレの趣味を誰にも、両親さえずっと隠してたからだろうな。少し離れてようやく分かった事だけど、ずっと負い目があったんだろうな。オレを産んでくれた人達にさ」
「でも、それじゃあ何で俺にその事を教えてくれたんだよ？」
「……新手の高校デビュー？」
「いや、俺に聞くなよ……」

まぁ、そんな事いいじゃねぇか。と話と終わらせ、コーヒーを飲みながら一夏の斜め後ろを見てほほ笑む。

「だから、オレは少しお前が羨ましいよ一夏。あんなにも、お前の事を真剣に愛してくれている人が居るんだからな」

その言葉の意味を理解した一夏は、少しだけ彼女を見習って、最高の笑顔で自慢した。

「ああ、千冬姉は俺の自慢で最高の、大好きなたった1人の姉さんだからな」

嘘偽りない、本当の愛情を込めて。

「くくっ……そうかい。妬けちまうな」

そんな一夏を見て、彼女はこのセンチメンタルな気分ごと、コーヒーを飲み干そうとして、

「ブふフォぉ！！？！？」

中身をビックバンにぶちまけた。

「ゴホッ、ゲホッ、ブくフィぃひィッ～～～～～～ッッッ！！？？？！？」

無理だ。コレは必中に熱血と祝福と努力をかけた位の一撃必殺だ。ヤバい、本格的に腹筋が光になる。腹を押さえながら、一応人前だという事もあり俯いてなんとか笑いを堪える姫燐。だが、その努力もこの衝撃の前には撃滅して抹殺されかねない。

その必殺技は、姫燐の斜め後ろから放たれた。そう、あの忍んでない黒服が、ＨＤ奪ったあと人を鬼のような形相で長時間ＩＳで引

きまわしの刑にしやがったあの鬼畜鉄面皮が、

グラサン越しでも分かるくらい、すっげえ嬉しそうにほっこりしてるとか反則すぎるだろッッッ！！！

絶ぇ―ッ対に聴こえてやがったな、あの野郎。っべー、これマジでっべーは！

カ、カメラ……カメラはどこだ……。今日買ったカメラはまだ充電してないから使えないし、ならばせめて携帯のカメラでツチノコがそこらの小石に見えるレアな光景を激写しようと、痛む腹を堪えながら携帯をカメラモードにして顔を上げシャッターを……

「あ……」

カシャ、と姫燐がぶちまけたコーヒーを正面から受け止め真っ黒になった一夏の姿を、カメラはしっかりくっきりデータフォルダに記録した。

●○●

その後、即座に喫茶店に代金を払い、逃げる様にその場を後にした2人は適当な裏路地まで全速力で走り込み、そこでようやく一息を付いた。

背後からの気配も消えており、どうやら千冬もついでにまく事ができたようだ。

「す、スマン、一夏。でもアレは……プクク……」

まだあのインパクトから立ち直れない姫燐は、口元を押さえながら謝罪の言葉を述べるが、当然まったく謝っているようには見えない。

「勘弁してくれよ……しかもこれ、コーヒーだろ？」

着ている簡素なプリントが付いた『元』真っ白、『ただ今』染み塗れのTシャツを摘み、MPが無くなった時に軍〇ガニに出会った時のような表情をする一夏。コーヒーの染みは頑固で厄介なのだ。

「あー……なんなら、どっかで新しいの買ってこようか？」

「いや、まだ大丈夫だ。それよりキリ、水とティッシュ持ってる？」

「ん、ティッシュならあるけど……」

「だったら、水をどっかで買って来てくれないか」

今回は完璧に自分が悪いので、姫燐は文句1つ言わずにそれに従う。

そこら辺にあった適当な自販機で水を買い、また同じ裏路地へと戻って行く。

「ほい、一夏」

「さんきゅ、キリ」

彼女から水を受け取ると、一夏は自分が持っていたハンカチに水を染み込ませると、おもむろに上着を脱ぎ始めた。ここ最近、箒に鍛えられっぱなしだったため、そこそこに筋肉が付き始めた肉体が風に晒される。

こういう時は染みの下にティッシュを敷き、その上から濡れたハ

ンカチでトントンと叩き、汚れをティッシュに移すのが最善なのだ。
これだけで、染みは大分落ちる。

「さて、後はティッシュを……キリ？」
「ど、どうした。一夏？」
「……ティッシュが欲しいんだけど」
「わ、悪い悪い、ホレ」

ポケットからティッシュを取り出し、ポイッ、と投げる姫燐。

「どこ投げてんだよ……」

しかし、彼女がピッチングしたティッシュはあらぬ方向へと飛び、溝のドブへとダイブしてしまった。これではもう使えない。

「あ、あれれ～、おかしいなぁ～？　あは、あははは」
「そりゃ、後ろ向いて投げりゃ誰でもそうなるって」

先程からなぜか後ろを向いて、一夏の方を見ようとしない姫燐。
その頑なな態度に、少し疑念を抱いた一夏は『カマ』をかけてみる事にした。

「ねぇキリさん、どうして後ろを向いているの？」
「それはね、背後からの敵襲に供えるためだよ」
「じゃあ、どうしてティッシュ投げる時ぐらいこっちを向かないの？」
「それはね、バックアタックは即パトる危険が高いからだよ」
「……服着たけど」
「おっ、そうかそうカッツィ！！？」

服を着たと言ったな、アレは嘘だ。
未だに半裸の一夏の方へと振りむいた姫燐は、顔を真っ赤にしながらまるで『女の子』ようにとり乱し、また１８０。クイックターンした。

「バ、ババババッカ野郎ッ！！！　下ッらねぇ嘘ついてんじゃねぇ！　次やりやがったら服と肌縫い合わすぞ！！　分かったな！！！」
「あ……ご、ごめんなさい、ハイ」

胸を押さえ、乱れた呼吸を整えようとしてやっぱり整えられない姫燐。
一夏が彼女を怒らせた事は初めてでは無いが、それでもここまで感情を乱した彼女を見るのは初めてだ。
もしかして、キリって結構ウブなのか？
散々人にセクハラしておきながら、男の半裸１つでここまで狼狽するだなんて……。
普段、人に弱みを見せない彼女だからこそ何と言うか、物珍しいというか、被虐させたくなって来るというか、もうちょっとくらい涙目を見てもバチは当たらない様な……。

「……ハッ！」

危ない危ない。自分は一体何を考えていた。イジメダメ、ゼッタイカッコ悪い。
それに、あのようなセクハラ紛いは女が男にするからまだ許されているのであって、逆の場合はもう完全に規制対象のレッドゾーンぶっち切りで、万が一誰かに見られたら……

「なぁ、もしかしてお前、織斑一夏……か？」
「……」

万が一この、半裸の男がその肉体を、涙目になって縮こまってる女の子に見せびらかしている様に『見えなくも無い』シーンを誰かに……例えば中学時代の悪友に見られたら俺の人生は間違いなく……

「なぁ、一夏……」
「弾、誤解が無い様に言っておくがコレは」
「わかってる。何も言うな」

おお、さすが中学時代ずっと共に居たマイフレンド。
何も言わずとも分かってくれたか。

「お前も、れっきとした男だったんだな……」

今まで女には興味が無いとばかり……とほざいてうっすら目尻に涙すら浮かべながら、まるで旅から帰って来た息子の成長を見た親のような表情を浮かべる悪友と書いてクソ野郎。
通報されるよりかはマシだが、これはこれでムカツク。そんなことを思う一夏であった。

「いいから速く服を着ろヘンタイがぁぁーーーーーーーーーー！！！」

――――後編へ続く。

# 第7話　「Ｅｓｃａｐｅ　Ｆｒｏｍ　Ｔｈｅ　Ｓｃｈｏｏｌ　（後編）」

「ふーん、五反田弾ってのかアンタ」
「おう、あのバカと同じ中学出身さ。よろしくな、朴月ちゃん」

お互いの簡単な自己紹介を済ませた姫燐と弾は、軽快なＢＧＭが流れる男物のファッションを扱う専門店であのバカこと一夏に着せる為の服を選んでいた。

あの後、姫燐の説得もあって何とか誤解は解け（弾は終始『分かってる』としか言わなかったのが気掛かりだが）、もういっそこれなら新しいのを買った方が速いという事で、弾の紹介によってこの店に3人でやって来たのだ。……あのバカこと一夏は、ちゃんと弾の羽織っていたジャケットを借りたので補導はされなかった。念のため。

因みにその本人は今、また半裸になりながら試着室で頑固な染みと果てしない闘争を繰り広げている。

「しっかし、なんでアイツばっかりいつもこんな可愛い娘とばっか……くぅ」
「一夏の野郎、中学の時も似たような感じだったのか？」
「ああ、そりゃもう。『女殺しの織斑』と言えば、うちの近隣校で知らない奴はいなかったからね」

おかげで、野郎共に命を狙われた事も1度や2度じゃないぜ、と乾いた声で笑う弾。普通なら冗談だと笑う所なのだろうが、彼がこの時だけチラッと見せた地獄を見飽きた最低野郎のように濁った眼が、今までの苦労を物語っていた。

弾の話によれば中学の時も、告白紛いの約束まで取り付けるほどに彼にお熱な少女が居たそうだが、結果は今の彼を見る限りお察し

下さいということだろう。

「ったく、ホントに進歩のねぇ奴だぜ」

「いや、アイツは充分変わったよ」

「はぁ？　どこがだ、今の学校でも本当に人類か疑わしくなってくる唐変木さは一切変わってねぇぞ？」

「確かに、アイツは本当にホモサピエンスから生まれて来たのか怪しく思える筋金入りの唐変木だ。だけどな、さっきその唐変木さまに今日何をしに来たのか聞いたらなんて答えたと思う？」

今日何をしに来たのかと聞かれれば、そりゃあやっぱり……

「『デート』だよな。オレと一夏の」

「ああ、流石の俺も、今日ばかりはギャラルホルンが本当に鳴るんじゃないかと思った」

因みに、『ギャラルホルン』とは北欧神話にでてくる、天使達が鳴らすこの世をラグナロク状態にするのを宣言する時に使われる角笛で、まぁ鳴ってしまったらざんねんながら人類は死滅してしまった！　状態になってしまうハタ迷惑な一品だ。平日の目覚まし時計と同じくらい永遠に鳴って欲しくない代物である。

「だってな、『あの』一夏が、だよ？　アイツの口から『デート』なんて単語が飛び出すなんて、マジ心臓が止まるかと思った」

そう、彼――――五反田弾が知る限りでは、織斑一夏という人間は明らかに『異常』だった。

一夏のモテっぷりは老いも若きも関係無く、燦然と輝くダイヤの様に全ての女を魅了して止まない。どんな女性でも彼の前では『恋する乙女』と変わりなく、もはやここまで来るとルックスや中身な

どの問題ではなく完全に『呪い』の域だ。そう確信させるほどに、彼はとにかく異性という異性に好かれた。
一夏に好意を寄せる女はそれこそ星の数。そしてその星々全てが玉砕していった。
理由は簡単。彼は、これまた呪われているとしか思えない程に『女心』という奴に鈍感なのだ。
どれだけ激しく好意を示そうとも、どれだけ露骨にアプローチしようとも、その一切合切にあの男は気付かない。もし女の恋心に気が付かない事が法律的に罪ならば、今頃一夏は石座布団に座りながら市中引きずり回しののち、討ち首獄門されたあと、アイアンメイデンにぶち込まれるくらいの大罪人となるだろう。
そんな男にこの目の前の少女は、2人っきりで出かけてるこの状況を『デート』と言い切らせたのだ。
彼の心臓が止まりそうになったのは、冗談も膨張も無い本心。それほどまでに、この事件は衝撃だったのだ。
無論、やたらおモテになる一夏が女性と2人っきりで出かけたのはこれが初めてではない。

「昔な、俺達のクラスメイトに『凰　鈴音』って奴が居たんだ。そりゃもう見てるこっちが恥ずかしくなるくらい一夏にぞっこんな奴でな、何度もアイツと2人っきりで出かけた事がある」
「……ちょっと待て、一夏の野郎すこし前に『デートなんて今日が初めてだ』とか抜かしたばっかだぞ？」

午前中に何となく気になったので聞いた所、証言した発言だ。
こんな嘘を付いた所で意味など無いし、なにより彼の少し照れくさそうな仕草は嘘に見えなかった。

「そら、アイツが言うならそうなんだろう、『アイツの中では』な」
「ま、まさか……」

「そう、そのまさかさ。アイツにとっちゃ鈴とのデートは『ただのお仲のいいお友達同士のお出かけ』だったんだよ」

鈴音が一夏と2人っきりで出かけたのは、1度や2度ではない。弾達クラスメイト一同も『もしや鈴なら……鈴ならやってのけるのかも』と思い、常に2人を同じ班や係にしたり、皆で出かけても彼等だけを残して即座に撤退したりとサポートを惜しまなかった。が、駄目。中学2年生の頃に両親の都合で彼女が転校してしまい、最後まで彼女の淡い恋心は伝わらないまま、全てのお膳立ては徒労に終わってしまったのだ。

「その鈴って奴も可哀想に……」

「ああ、全く心から同情する。それなのに朴月ちゃんは、俺達が1年以上かけても出来なかった事をモノの数カ月でやってのけたんだ。ホント、一体どんな魔術を使ったんだよ?」

どんな魔術って、普通に「デートに行こうぜ」って誘っただけなんだが……。

返答に困る姫燐だが、そのストレートこそが最強のルールブレイカーだったという事に気が付かないのは致し方無いことだろう。

「まぁ、正直に言うとだな、俺は君に感謝している」

「えらく唐突だな。オレはまだアンタに会ったばかりだぜ?」

「会ったばかりでも分かるさ、俺はアイツと定期的にメールでやり取りしてるんだが、君の事は何度も一夏から聞いているよ。色んな事を教えて、常にあのバカの手助けをしてやってるそうだね」

寂しそうな、それでいてほんの少しだけ悔しそうな顔をする弾。

「本当はな、一夏がＩＳ学園に行くことになっちまった時、心配だ

ったんだ。アイツはちゃんとやって行けるのかってね」

それは酷いモンだった。完璧にスネてたアイツが、友達を、それも異性の友達を作る事なんて出来るのか心の底から弾は心配だったのだ。

愛は憎しみと表裏一体。誰が言った言葉だっただろうか。

しかしＩＳ学園に来た一夏には、この言葉が重く、重く圧し掛かる。

彼は、無意識に他人の愛を呼び込んでいく。それは同時に、他人の憎しみをも呼びこんでいくのと同意義だ。

人は、四六時中憎しみを向けられて生きていけるほど強くは無い。

仮に生きていけたとしても、きっと人として大事なモノを捨てなければ正気を保っていられないだろう。だからだろうか、あの男が人の好意に異常なほど鈍感なのは。

憎しみに、愛に気が付かなければ、苦しむ事などないのだから。

今までは弾のような『男』の友人達が、『友情』によってそれを誤魔化し続けて来た。

しかし、『女』しか居ないＩＳ学園に、彼と『友情』を結ぼうとする人間が果たして現れるだろうか？

きっと、現れない。弾の中には確信に近い何かがあった。どこまで行っても男は男、女は女。同じ人でも、真に分かり合えない２つの道。今の社会がまさにソレを体現している。

憎んで憎んで憎まれ続ける。孤立、どこまでも孤独。そうして、また彼はゆっくりとその心を異常狂人に歪ませていく。

その果てに待ち受けているのか何であるか？　少なくとも、真っ当な幸福など欠片もありはしない。弾の少ない人生経験でも、それだけは薄々と感じ取れていた。

しかし、彼の前に裏切り者は現れる。

百合の花にしか興味を示さない、男に非常に近い裏切り者が。

「話を聞いた限りでは、アイツにとって非常にいい友人だそうだね。だから1つだけ聞きたい。じゃあ、何で、今日は『デート』にアイツを誘った？」

嘘は、絶対に許さない。そのような強い言葉と、言い知れぬ威圧、鋭い視線を歯牙にもかけず、少し鬱陶しそうに姫燐は言い切った。

「ただの気分転換だ。アイツ最近、色々と大変そうだったからな。言い方が違うだけで、その鈴とやらとしたのと同じ『お友達同士のお出かけ』と変わんねーよ」

ついでに、壮大にからかってやるつもりでな。そう言って笑いながら、非常にそっけなく答える彼女に、弾は確信する。

「……くくく、俺の負けだよ。やっぱり、今のアイツには君が必要だな」

本当に、アイツはいい友人を持った。

彼女になら、俺の唐変木で、どこか抜けてるイカれた悪友を任せる事ができる。

正直に言うと妬ましかった。ＩＳが使えない、それだけで俺とアイツの距離は物理的にも、いやそれ以外もずっと、ずっと遠くなってしまった。

なのに、俺が本来居たはずの席にのうのうと座る彼女が、妬ましい。

そして、ダチをその席で憎み追い詰め続けるというのなら、許せない。

だが、今日実際に会って見て分かった。彼女は、朴月姫燐は自分の大切なダチを任せるに足る女……いや人間であることに。

「なんだよ、いきなり訳が分からんぞ」
「いや、いいんだ。気にしないでくれ」
やはり少し妬ましい。けれど、今なら手を振って彼等を応援できる。
彼の中で、今まで溜まっていたモヤモヤが吹っ切れたような感じがした。
「さーてと、んじゃま、さっさとあのバカの服を選びますか！」
「そうだな、あのバカにピッタリな……エプロンドレスとかどうだ？」
「いや、確かに似合いそうだけど遠慮するよ……」

●○●

姫燐と弾は、ゆったりと広めにスペースが取られた店内で、時には離れ、時には比べ合いながら一夏の服を吟味していた。
店が流すポップなＢＧＭをバックにして、笑いながら、小突きながら、少し文句を垂れ合いながら、ゆっくりと穏やかな時間は流れて行く。
「うーん、やっぱり一夏にはエプロンが似合うと思うんだが……どう思うよ五反田？」
「いや、確かに朴月ちゃんの意見も一理あるが、それじゃあアイツ帰り半裸エプロンに、てか何で男物の服屋にエプロ……ん？」
その時、弾の視界に珍しいモノが飛び込んできた。

「ん、どうした？」
「いや、アレ見てみろよ」
ヒソヒソ声で、弾は突如現れた珍客に指をさす。
「あの姉ちゃん、何で道着なんだ？　しかもアレ……刀か？　どこのラストサムライだよ」
「……なんでここに居やがんだよチクショウめ……！」
へいおんと緩やかな日常終了のお知らせ。
それを見た瞬間、姫燐の血がサッ、とどころかドバッ、と引いて行く様な気がした。
「しかもおっかねー……何だよあの顔、仇でも探してんのか？」
「あ、あっははははは……」
あながち、間違いではない。
見慣れた黒髪ポニーに、怒りの極みに達し無表情の仮面と化した顔面。完全なる殺意はもはや感情ではなく、冷徹なる意志とはよく言ったモノだ。背後にダークサイドの禍々しいフォースが見える。そのナイス、ナイスなボディも前かがみになったゾンビの様に歩くから台無しだ。
狙いは間違いない、一夏だ。訓練をサボったアイツをここまで追って来たのだろう。
コー……ホー……、と息づかいが少し離れたここまで聞えて来る。
あ、目が合った客の1人が泡吹いて失神した。無理も無い。フォースパねぇ。
今のダース・ベ……もとい篠ノ之箒に睨まれたら、地獄の獄卒も土下座して命乞いするだろうさ……！

「すまん五反田、少し待っててくれ！」
「へ？　あ、ちょっと朴月ちゃん！？」

エマージェンシ、スーパーピンチだ。
今の篠ノ之に一夏と合わせる訳には絶対にいかない。アイツだけならまだしも、下手すりゃ同伴していた自分の首まで宙を跳ぶ。
迷っている暇など無い。急いで姫燐はそこら辺にあった男物の服を数点かっぱらうと、試着室へと突入した。

「ん？　キ、キリ！？」
「すまん、ちょっと借りるぞ……！」
「へ、なんでってうわ！　なななななにしてんだ！？」
「うっさい静かにしてろ……！　死にたいのか……！？」

どうやら一夏が入ってる試着室だったようだが、今の姫燐には関係ない。羞恥は一時の恥、躊躇はこの一生の終幕だ。
いきなり自分が入ってる試着室に押し入って来たかと思えば、突如ストリップショー始めた友人に、当然一夏はかつて無いほどにテンパる。

「キ、キキキキリさぁぁぁぁん！？　いったい何がどうなゴベキュ！？」

以外と趣味が可愛い水玉のブラとショーツと、これが若さかと言わんばかりに艶のいい肌色等々が見えて、色々粗ぶる一夏の腹に姫燐は満足パンチをかまして黙らせると、簡単なシャツにジャケットとジーンズと、いつもの彼女とさして変わらない服に素早く着替え、作画崩壊気味な一夏を放置して即座に試着室を跳び出す。

「あ、あれ朴月ちゃわぉ！？」

「すまん五反田、オレに合わせろ……！」

何故か服が男物になって戻って来たかと思えば、いきなり襟首を掴んで引っ張り、小声で訳のわからない指示を飛ばす姫燐に弾は困惑するが、それでも何とかついて行く。

そして彼女は、こともあろうにあの暴走モードの前に立ち塞がった。

「よう、篠ノ之。奇遇だな、こんな所でどうした？」

「……ォォォォォほおづきィィィィ……？」

やだ、何これ怖い。

子供が見たら泣くどころじゃないよこれ。恐れるなオレの心。悲しむなオレの闘志。

今はあくまでも自然に、オーガニック的に情報を集めろ……。

「オレか？　オレは昔の友人に会ったんでな、ちょっと話しこんでたんだ。なぁ、五反田？」

「へっ？　ああ、そうです、俺が朴月ちゃんの友人の五反田弾です！」

いきなり大嘘をパなす上に、いきなり暗黒卿との面会に強制参加させられパニックになりかけながらも、しっかりと合わせる弾。どこかの誰かと違って胆が据わっている。

知り合いに会った故か、少しだけ威圧感をマシにしながら、篠ノ之ベーダーは問う。

「丁度いい……朴月、一夏を見なかったか？」

「へっ、一夏？　一夏ならイッづ！」

「あー、見て無いわぁー！　今日は1回も見て無いわぁー！」

なに食わぬ顔をしながらブーツのヒールで弾の足を踏み、大声でしらばっくれる姫燐。

一か八かの賭けだったが、どうやら自分と出かけた事までは知らないようだ。

実はと言うと、女物の服で来た最後の理由がコレで、万が一誰かに見付かっても、最悪自分であることを即座に見切ることが出来なくするためだ。クラス１のイケメンとデートして他の奴に見付かり、色々といざこざが起こるだなんて完全に一昔前の少女漫画のテンプレだが、現実問題として起こる可能性が無いと言えないのが怖い。

流石にあそこまで普段と違えば、何も無しに初見で自分であるということを見切るなど、人類には不可能だろう。そうなれば、今の様にまだ誤魔化しが効く。

本当に最悪のケースを考えての一手だったが、どうしてここが…？

この事態だけは決して起きない様に、一夏には箒が寝静まったのを見計らって部屋の外で寝るように指示をしたはずなのに。

それに、足止め用の抱き枕（姫燐特製、一夏愛の囁き寝言レコーダー付き）をベットに身代わりに入れるようにも指示したから、出て行く所を見られた可能性も薄い。それに篠ノ之の性格から考えて、オレ達を見たならそこで即座に仕掛けてくるはずだ。

「そうか……オルコットの情報によれば、この付近に居ることは確かなのだが……」

アイツかい、情報元。電車から見なくなったと思ったら、何しくさってんだ。

そう、あのあと寮に帰ったセシリアはまだ諦めていなかった。

千冬に言われるがままＩＳ学園に帰宅した後、どうにか我が愛しの君と、それを狙う野獣を引き離そうと策略をめぐらしていた彼女

は一夏を探し学校をさ迷う箒を見つけ、そこで悪魔のウィズパーを彼女に授けたのだ。

「織斑一夏が、他の女とデートに出かけた」と。

当然、ここであえて姫燐の名前を伏せたのは、彼女に少しでも迷惑がかからないようにするための配慮だが、充分に迷惑千万である。

まぁ事実、今はそれに助けられているのが何とも言い難いことだが。

「オノレぇ……どこへ逃げた一夏めぇぇ……」

（な、なぁ、このシス、一夏の知り合いなのか……？）

（あー、知り合いというか、愛して止まないというか……）

それだけで弾は全てを悟った。

ああ、あのバカ、また厄介な女を引っかけたんだな……と。

とりあえず、このままではラチがあかない。この場所に一夏が居る以上、見付かるのはここにいる全員のデッドエンドだ。無論、その中には完全に無関係な弾や他の客も含まれている。

とにかく自分が箒をどこか別の所に誘導して、その隙に弾に一夏を何処かに逃がして貰わなければ、自分達に明日は無い。死と隣り合わせの任務だが、考えようによっては好都合だ。彼女には色々と２人っきりで腹を割って話したい事がある。

大丈夫だ、問題無い。箒は単純だからコロッと騙されてくれるだろう。なぁに、オレの話術は不可能を可能にできるのさ。

「あー、篠ノ之。一夏なんだがな、確か今日はちょっと開かれたオーラロードの先にだな……」

「……どこだ、そのオーラロードとは？」

うっし、喰いついた！　へへっ、やっぱりオレの話術は不可能を……可能に……

「痛つっ……いきなり何すんだよキ……あれ、箒じゃないか？　こんな所で何してんだ？」

……ああ、やっぱり今回もダメだったよ。

瞬間、空気、凍結。

試着室から一応人前なのでコーヒーで汚れたままのTシャツを着用して、腹を押さえながら出て来た青年に全員の視線が集まる。本人は呆ける。友人達は終わりを悟る。ハンターは獲物を自動マーキング。

きっと空耳なのは分かっている。だが極限状態まで追い詰められた姫燐の耳には幻聴だとしても、ハッキリと、その声が聞こえてしまった。

――――狩リノ　時間ダ――――

静寂の店内に、怒声が駆け抜けた。

「逃げろ一夏ァ！！！」

「へっ？」

いきなり自分に怒声を浴びせる姫燐と、そして全く同じタイミングでいつの間にか自分の真正面に出現して抜き身の刀を振りかぶる箒に、瞬時に対応できるほど一夏はスーパー地球人ではない。

駄目だ、完全に出遅れた。今からでは、例えＩＳを展開した姫燐でも間に合わない。

幼馴染のような何かが浮かべる狂乱の笑みと共に、白刃がゆっくりと脳天へと落ちて行く。あ、死にそうになると世界って本当にスローになるんだ。とか、明日役に立ちそうに、というか使えそうにないムダ知識に感嘆してしまう一夏。

そのまま哀れ一夏は、あ○ゅら男爵やキカ○ダーやＷの親戚になるか……と思いきや、救援は意外な所から現れた。

そいつはまだ状況が理解できていない一夏の押し倒す様な形で無理やり回避させ、間一髪で振り下ろされた箒の剣閃は背後にあった服を数点切り裂くだけで空振りし、即刻で体制を立て直す。

「ナイス五反田！」

「あとで何か奢れよ一夏ァァァ！！！」

「ああ、彗星はもっとバァーって輝くもんな……」

なぜいきなり幼馴染に真っ二つにされかけたのか、訳が分からない現実のせいで虚無空間へと旅立ってしまった一夏を連れながら、弾は出口に向け全力で走りだす。

「腑抜けが！　男に後退の二文字は無いぃぃぃィ！」

「なぁっ！？」

無論、それを許す狂戦士ではない。

ゼロシフトもビックリな速度で弾達の正面へと高速移動すると、すかさずステンレスの商品棚をいくつか両断しながら横薙ぎに一閃を放つ。完全にＯＦか何かなアクションに、完全に虚を突かれた。回避が、間にあわないッ……！

ガギィ！

「むぅ！？」

だが、一夏を護るのは1人だけでは無い。

カメラが入った箱を盾に姫燐は箒と弾達の間に入り、その一閃を受け止めた。剣戟を受け止めたショックと、完全にお陀仏になった新品のカメラに心理的ショックを受け、顔をしかめる姫燐。

「今の内に逃げろ！　五反田！」

「だ、だけど朴月ちゃん……！」

「バッカ野郎、迷うな！　オレなら心配ない！」

「くッ……死ぬなよ、朴月ちゃん！」

「暑苦しいな。ここ。出られないのかな。おーい、出してくださいよ。ねぇ」

正面を塞がれてしまったので、今度は裏口へ向け疾走を始める弾。まだ一夏はコックピットの中から帰って来ない。

「逃がさぬわぁぁぁぁ！」

箒が咆哮を上げて弾達の背中を追おうとするが、一歩を踏み出そうとした瞬間、何かが頬を掠めた。

「つれないねぇ、オレの事は無視かよ篠ノ之？」

「朴……月……？」

箒の頬から滴り落ちる赤い液体。それが、彼女の完全にオーバーヒートしていた頭を急速冷却させていく。

目の前に立ち塞がるは、目が据わり、両腕を下にぶらん、と掛かる重力に従わせ、セリフそのものは何時もの彼女なのに、声に起伏が全くない姫燐。

姫燐は一夏達を追う箒を足止めするために、ワザと箒の頬を掠める位の間合いで蹴りを放った。それだけだ。ただ、

（軌道が、一切見えなかっただと……！？）

いくら不意打ちだったとは言え、箒ですら視認する事の出来ない程のスピードで。

彼女の直感が告げる。恐らく、今の姫燐を無視して一夏を追う事など不可能である事を。

初対面の時からタダ者ではないとは思っていた。平時からヘラヘラしている様で隙のない立ち振る舞い。後頭部を強烈に討ちつけたのに、たった数分間で意識を取り戻す耐久力。時たま覗かせる、一切の希望的観測を排除した、ただ目の前の現実のみを冷徹に見据えた瞳。

そして決定的なのは、剣道で全国大会を優勝した箒でも見抜けなかった今の鋭い蹴りと、箒に向けられた非情なまでに冷たく、ねっとりと肌を舐めまわすように粘りつく確かな……殺気。ただ箒の暴走に怒っているだけでは、この様な物騒なモノは出ない。そう、殺気など放出するのは当然……殺す時だけである。

仮にも仲が良い同級生を流血させたのに眉を微動だに動かさない目の前の少女は、自分の知る朴月姫燐であって、自分の知る朴月姫燐ではない。もっと、非情で冷酷な何かだ。

感情の消え失せた顔、自分だけを見据えた冷徹な瞳、確かな殺気。

（コイツは一体……何者なのだ……！？）

そんな箒の迷いを余所に、変貌した姫燐は仮借無い連撃を加える。

（くっ、なんだ！　なんなのだ！？）

「……」

流れる様な動作で、それでいて鉛の様に重い手刀と脚技の嵐。
仮にも刃物を持った相手だというのに、その拳に躊躇いなどは一切なく、ただ目の前の敵を沈黙させる事のみを目的とした無慈悲な連撃を、箒は何とか捌いていく。
しかも先程から、防御されても刀の刃にだけは絶対に触れないように、腹や峰のみに打撃を加えている。こんなもの一朝一夕で出来る芸当ではない。それが姫燐の練度を物語っている。
だが、箒もやられっぱなしで終わる様なタマではない。

「そこだッ！」
「……ッ」

薙ぎ払らう様に襲いかかる手刀を箒は刀を捻ると、刃の部分で防御する姿勢を取った。
それに気が付いたのか、鉄が手の肉を抉る寸での所で姫燐の手刀が止まる。
アレに瞬時に対応できる反射神経は見事。だが、突破口は見えた。

「隙有りッ！！」
「ぐッ……！」

胴を失った姫燐を鍔で突き飛ばし、一定の距離を離す。
箒は自分の有利となった戦況にようやく一息を付く。それを理解しているのか、姫燐の視線が更に鋭いモノとなった。
戦いにおいてリーチとは、もっとも単純で、もっとも重要な勝敗を決する要素だ。
少し昔の戦場で刀が消え、銃が戦場の主役となっていったのが分かりやすい例だろう。敵の攻撃が届かず、こちらは一方的に攻撃が出来る状況。戦いにおいて最も理想的なパターンである。

今の姫燐と箒の状況は、正にそれだ。
刀と拳。圧倒的な射程の差。いくら速度があろうとも、届かない攻撃に意味は無い。姫燐が箒に一撃を加えるには、再びその拳が届く距離――――インファイトへと持ち込まなくてはならない。
しかし、それを簡単に許すほど箒は甘く無い。先程は不意打ちだったからこそ、容易に懐に潜り込めたのだ。一分の油断すら消し去った今の彼女に不用意に近付けば、即座に三枚下ろしにされるだろう。
そして何よりもこの距離は箒がもっとも得意とする、高速の一投から繰り出される面を叩きこめる間合いだった。
再び訪れる静寂、逸らさず真っ直ぐに火花を散らす2人の視線。
箒の絶対なる有利。だが、相手は敵の油断を最強の銃弾とする狡猾な策士。今この瞬間にも彼女の頭には、絶対不利な状況をひっくり返すための策が練られているに違いない。
ならば、取る行動は1つ。

（策を練る時間など、与えん！）

箒の足が、地面を蹴り飛ばした。

「めぇぇぇぇぇぇん！！！」

無論、少しずらして急所は外すつもりだが、それでも一切の手加減無しで刀を振りかぶり、姫燐へと肉迫する。そうしなければ、殺られるのは……自分だ。
姫燐の目が見開かれる。だが、もう遅い。この距離で討ち損じることは無い。

（もらった……！）

疾走と共に振りかぶり、確信と共に振り下ろされる白刃。

しかし、刃は姫燐の肉を斬ること無く、止まる。

「なっ、バカ……な……？」

刃は、姫燐が箒の頭上へと掲げた足に……正確には履いていたブーツのヒールに、喰い込む形で受け止められていた。

箒が信じられないのも無理は無い。全力で振り下ろした筈の一撃が、たかが靴の底で受け止められたのだ。

当然、箒の腕前なら靴のヒール如き、簡単に両断する事ができるだろう。しかし、これには『とあるトリック』が隠されてあった。

箒が操る剣道には、型というモノがある。一般的に剣道で打ち込んで判定があるのは頭頂部に叩きこむ『面』、前腕を打ち払う『籠手』、横腹に打ち込む『胴』、喉を突く『突き』の４種類。打ち込む際にその狙う部位を叫ばなければ判定にならないのも特徴だ。

そう、今から攻撃する部位を、『事前』に。

そして、いくら箒が速かろうと人が何の助けも無く、音の速さの壁を超えることなど不可能。つまり彼女は、朴月姫燐は、箒の掛け声から次の攻撃を予測し、その部分へと脚を掲げたのだ。

如何に鋭い剣閃でも、威力が乗らない頭上で受け止められては物体を絶ち切る事は不可能である。

無論こんな一歩間違えれば、いや、間違えなくても右足を犠牲にしかねない戦法など、常識の欠片も無い狂気の沙汰に等しいが、卑怯だ、反則だ、などと文句など言える筈が無い。

これは剣道のような格式ある競技ではなく、ただただ血泥に塗れた『殺し合い』。

どんな事があろうと、生き残る者こそが全てなのだから。

「ぐっ、抜けない……！」
「……篠ノ之、良い事を教えてやる」
姫燐は、器用に踵に深めに刺さった刀を箒の腕ごと捻って飛ばし、
「対象を仕留める際には、余計な事を喋らない事だ」
耳元で子守唄をささやくような声で、箒の横腹へと回し蹴りを放つ。
武器であり半身の刀を失った箒にそれを防ぐ手段など、ある筈が無かった。

○●○

強烈な一撃が直撃し、意識を失った箒が次に眼を覚ました時に飛び込んできたのは、天国でも地獄でもなく、自分の顔を心配そうに覗き込む姫燐の顔だった。どうやら自分は、箒に膝枕をされるような形でベンチか何かに寝転がっているようだ。
「う……ううん……」
「おっ、目が覚めたか。篠ノ之」
弾んだ声で、少し安心したような笑顔を姫燐は浮かべた。少し前までの眉1つ動かさない冷徹さは何処へやら、余りに何時もと変わらないその姿に、箒は『アレ』は本当に現実だったのだろうか疑念を覚えてしまう。
「ここは……？」

「さっきの店から結構離れた自然公園さ。隠れる場所も多いし、この時間なら人も少なくて丁度いい」

いやぁ、大変だったぜ。と語る姫燐。

壮大に暴れたせいであの店の中は、何があったのかと聞かれれば、『第3次大戦だ』としか答えられないような惨状になってしまったらしい。無論、被害は彼女の手持ちで弁償できるような金額では無いだろうから……ここから先は考えない方がいいだろう。

「ッッ……」

「すまん。割と容赦なく蹴っちまったからな、まだ痛むだろ？」

とりあえず身体を起こそうとして、鈍痛に横腹を押さえる箒。

その確かな痛みが、あの出来事が夢ではない現実だと告げる。

「悪いな、流石にオレも、あの時の篠ノ之は本気じゃないと止められる自信が無かったんだ」

そこで、ようやく彼女と大ゲンカした理由と目的を箒は思い出して……バッ、と跳び上がるように立ち上がり、ベンチに立て掛けてあった自分の刀を持って抜刀した。

「お、おいおい！　第2ラウンドに突入するには速過ぎやしないか!?」

「……」

慌てて立ち上がる姫燐を無視して、箒は無言で道着の上着を肌蹴けさせる（下はサラシなので大丈夫）と、夕暮れに照らされ赤くなった地面に正座をし……

「待てやコラ」
「ふもっ」

事態を察した姫燐の軽い踵落としによって、犬だかネズミだかよく分からないマスコットのような声を上げる箒。

「切腹するならオレのモノに……じゃなくて、余所でやれ。いや、何処でもやっちゃダメ絶対」
「うう……だが……」

目尻に涙を溜めながら俯く箒。

「嫌われた……一夏に……絶対……」
「あーもう。嫌われるって分かってんなら、何であんなマネするかねぇ」
「だって……他の女と一緒に……許せなくて……」
「だからって、ポン刀持って追いかけ回すのはやり過ぎだろ……」

このどうしようも無いほどに不器用な少女に、姫燐は呆れかえる事しかできない。

まぁ、これじゃあ無理だわな。アイツと相思相愛になるのは、不器用な箒にはいささかハードルが高過ぎる。だけどどれだけ届かなくとも、『諦める』というカードなど、始めから手札にありはしない。恋という奴は本当に厄介な病だ。

きっとこのままじゃ箒はずっと同じ様な堂々巡りを、アイツが別の女とくっ付くまでし続けるだろう。それでは、余りにも彼女が哀れで……

――――まぁ、これもある意味サポートの一環か。

どこまでやれるか分からないが、処方箋を出してみますかね。

「箒、ちょっと話したい事がある」
「話したい……こと？」
「そうだ、とりあえず正座は止めろ」

姫燐は刀を鞘に戻して再びベンチに立て掛け、箒の腕を引いて立ち上がらせて座らせると、自分もその横にもたれかかる。

「朴月、話とは……なんだ？」
「色々あるが、まず1つ目。今日一夏をデートに誘った女ってのは、このオレだ」

先程まで俯いて涙を流すだけだった箒の眼が、驚愕に見開かれる。

「おっと、勘違いすんなよ。オレは一夏にライクは懐いてても、ラヴはこれっぽっちも無い」
「で、ではなぜ……」
「お前のせいだよ、篠ノ之」

事情をイマイチ飲み込めないと言った表情を浮かべる箒。そんな箒に姫燐はゆっくりと諭すように事のあらましを説明していく。

「オレは確かに一夏のトレーニングをお前に頼んだ。だけどな、誰も虐待スレスレまで痛めつけろとは一言も言ってねえぞ。だから、お前から遠ざけるためにオレはアイツをデートに誘ったんだ」
「違う……私は……そんなつもりは……」

分かっている。コイツのトレーニングに悪意の『あ』の字すら無いのは、あの果たし状の事を聞いた電話の時、一夏との時間をとて

も幸せそうに語っていた彼女を姫燐は知っている。

「だけどな、恋愛ってのは1人でするもんじゃないんだぜ？」

悪意の無い悪ほど、罪深きモノは無い。

彼女の愛は、独りよがりの一方通行すぎるのだ。

「なぁ、篠ノ之。お前は、一夏の気持ちを考えた事があるか？　アイツがなぜ今日、サボったらお前が怒ることなんて判りきってる筈なのにデートに行った訳が分かるか？」

「一夏の……気持ち……ッ」

そこで、箒は己の過ちに気が付く。

言われてみれば、自分は一夏の気持など考えた事も無かった。なぜ自分の事を見てくれないのか、なぜ姫燐ばかり相手にするのか、なぜ昔のように自分に笑ってくれないのか……ただ自分の感情だけで精一杯で、今の彼の事など知ろうともしなかった。

自分もこの6年で変わった様に、彼も6年前のままでは無い。

結局、自分は一夏と再会などしていなかったのだ。自分は彼という肉体に再会しただけで、彼の心とは6年前に離れ離れになったままで、一度も触れあってなど……いない。

「アイツは疲れ切っていた。相手の気持ちを理解しようとしないで、自分の事だけを知ってもらおうなんて、おこがまし過ぎる。そう思わないか、篠ノ之？」

「……っ……っ……」

もはや言い返す言葉も無い。完敗だ。

自分は、最低だ。相手の気持ちを考えずに、ただただ自分の考えだけを押し通して、それが相手の為だと勝手に納得して……。本当

にっ、最低の人間だ……っ。
自分など、彼の傍に居ない方がきっと……。

「はいそこ。さっそく閉じこもらない」
「むにゃ！」

ずぷずぷと泥中に沈んでいた世界が、姫燐の脳天割によって覚醒する。

「篠ノ之、お前の生まれは知ってる。確かに、あんな姉ちゃん持ってちゃ苦労も多かっただろうさ。だけどな、恋愛もそうだが、人生って奴も1人でするモンじゃないんだぜ？」

箒の人生を歪めた、大いなる存在。
篠ノ之　束。この世界を歪めた超兵器『ＩＳ』を開発した天才科学者。
彼女がＩＳを発明したせいで箒は政府によって、重要人物保護の名目で各地を転々とし、その先々でずっと独りで立ち続けて行くこととなった。
どこへ行こうとも姉の影は消えず、男からはこの世界を狂わせた奴の妹として影で蔑すまれ、女からもまるで御神体の些細な飾りでも扱うかのような扱いを受ける最悪な日々。
人は無意識に、どのような場所でも己の心を最適な形に適応することができる。生き残るための本能といってもいいだろう。
そして悲しくも箒の本能は、その最悪に適応してしまった。
ただ、己の世界に閉じこもる。そうすれば、誰が何を言おうとも関係無い、この世界に居るのは自分だけだのだから。そうやって、彼女は今までを乗り越えて来た。
何も見ず、何も知らず、何も聞かず。ただ己の声を信じるのみ。
だが、それではいけないと、横に座る同級生は、優しくほほ笑ん

だ。

「吐きだしてみろよ、篠ノ之。お前は、本当はどうしたいんだ？」

「私は……私は……」

脳裏に浮かぶは、愛する彼。

昔、男女といじめられていた自分を庇ってくれた彼の背中。

６年ぶりに再会して、随分と大きくなった彼の姿。

ＩＳを纏い、凛々しく刀を構える彼の勇姿。

そして、明るく、地獄の底でもずっと忘れることがなかった彼の……明るい笑顔。

もっと見たい、もっと知りたい、もっと聞きたい。

彼の全てが欲しくて、そして自分の全ても知ってもらいたくて堪らない。

そう、自分は、篠ノ之箒は、

「私は……一夏を愛してる！　だから、もっと一夏の事が知りたいし、私のことも、もっともっと知って欲しい！　今の、この篠ノ之箒を……」

ふっ、と、ずっと心の中にあった霧が消えたような気がした。

見える。今なら、自分が何をしたかったのか、自分が本当の望みがハッキリと。

「不思議だ……声に出すだけで、こんなにもスッキリするだなんて……」

「だろ？　何があろうとも、自分の心にだけは嘘をついちゃいけない。嘘は、他人だけじゃなくて自分の心まで曇らせる。だけどな、

もし何かのはずみで霧が深くなったら、そんな時は誰かに話せばいいんだ。例えば……」

「青狸よりもとーっても頼りになる、素晴らしい友達とかにな」

そう言って、姫燐はニカッ、と笑う。

その笑顔はどこまでも眩しくて、真っ直ぐで、それでいて……どこかおバカで。

「……ぷっ、くくく……それはまさか、お前の事を言っているのか？」

「な、なんだよ、笑うな！　命が惜しければ笑うなー！」

顔を赤くして、腕をブンブン振り回す彼女。

本当に、よく分からない奴だ。月光の様に冷たいかと思えば、次の瞬間には太陽のように朗らかで、だけど……どんな時でも真っ直ぐで。

「ふふふ、すまない。私とて命は惜しい」

「ふ、ふん、分かればいいんだ。分かれば」

箒は、少しだけ考えて、言った。

自分の過ちに気が付かせてくれた、拗ねてそっぽを向いている、

「ありがとう、姫燐」

友達に送る、感謝の言葉を。

「……ふん、どういたしましてだ。箒」

姫燐も、友達に返しの言葉を送る。まだ、少しだけ拗ねながら。

その後、2人は話をした。他愛のない雑談や、好きなモノを語り合ったり、一夏のダメさ加減に一緒に呆れたりと、些細だけど、とても、とても充実した時間を過ごした。

そうこうしている内に、日は完全に沈み、公園に備え付けられた外灯に次々と火が灯る。

「さて、私は一夏の所に行くよ」

「……念のため聞いておく。何をしに、だ？」

「まずは……今日の事を謝ろうと思う。簡単に許してくれるとは思えんが……」

「くくく、大丈夫だって、あのトリ頭の事だ。どうせもう忘れてるに決まってる」

「ふふっ、だと良いがな」

「それに丁度いい機会だ。めんどくさいし、もうそのまま勢いで告っちゃえよ。もしくは押し倒すか」

「なっ！　なななななっ！！　ぷ、ぷじゃけるな！　そ、それじぇひゃな！！」

「ああ、じゃあな。また明日」

頬を紅色に染めながら、箒は全速力で走り去っていった。

あの様子なら、もう心配はいらないだろう。彼女は、きっと上手くやって行ける。

それに再び間違えたなら、また処方すればいいだけだ。

彼女の友人である、朴月姫燐が頑張って。

「……それにしても、今日は疲れた……」

ようやく1人になった彼女の双肩に、今までの疲れが一気にフィールドバックしてくる。
本当に今日は色々とあった。一夏をからかって、カメラを買って、色んな店によって、喫茶店でＵＭＡより珍しいモノを見て、一夏の旧友にも会って、服を選んで、箒とケンカして、アイツの友達になって……全く、ヘヴィだぜ。

「ったく、明日の学校が憂鬱だぜ。そうは思いませんか……織斑先生？」
「……いつから気が付いていた？」

瞬間、彼女が座っているベンチの後ろの茂みから、ガサゴソと音を立て、黒ずくめの女が飛び出て来た。
そう、この時間帯に見付かれば、一発で職質モノの最高に怪しい格好をした担任教師、織斑千冬である。

「最初っから。学園を出た辺りからですよ。喫茶店で一度はまきましたが、その後オレが弾と買い物をしてる辺りから、ずっと見てましたよね？」
「……末恐ろしい勘だな」

いや、アレほど怪しい奴に気が付くなって方が難しいような……そんな事を思いながらも、面白そうなので口には出さない姫燐。

「で、何の用ですか？　一夏の奴なら今頃は寮に帰ってると思いますけど？」
「いや、用があるのは貴様だ。朴月」

そう言うと千冬は、手に持っていた紙袋から服を取り出した。

「まずは、お前の服だ。あの店に忘れてきてただろう？」
「おっ、ありがとうござ」
「そしてコレが、今お前が着ている服と、篠ノ之と共に台無しにしてきた店の物品のレシートだ」
「いま……あ……あ……？」

次に取り出した生まれて初めて見る、人の身長ほどある長さのレシートに、お礼の言葉と服を受け取ろうとした手が止まり、代わりに油汗がとめどなく流れて行く。居た堪れなくなって視線を落とすと、まだ『値札が付いたまま』のジーンズが彼女の眼に入った。
万引き、器物損壊、その他諸々……なんだこの罪状は？
そして、目の前にティーチャー千冬！！　おいおい、これじゃあMEの詰みじゃないか！！

「私が弁償しておいたから良かったモノの、下手をすれば貴様は今頃ブタ箱の中だ。どうだ、今の気分は？」
「は……ははははは……」

恐怖が限界まで達すると、人は笑うか、逆ギレするしかなくなると言う。
千冬に至近距離からガンの集中砲火を受ける今の姫燐に、逆ギレなんて選択肢が残っているはずがなく、自然と選ぶのは前者に限られてしまう。仕方ないね。

「この金は、私のポケットマネーから落としておく。二度とこの様なマネはするな。分かったな？」
「はい、死ぬ準備はできて……はぃぃ？」
「聞えなかったのか？　私は、二度とこの様なマネはするなと言ったんだ」

どういうことだ。あの、人がちょっと先生の弟を盗撮しただけで石座布団を持ってくる雛見沢の緑その2も真っ青な拷問狂がなぜ自分を許す？　まさか、これも全てゴルゴムか乾巧って奴の仕業……

「そんなわけあるか、馬鹿者」

なぜ人の心が読めるのだろう。人類最強になるには読心術も使えなくてはならないのだろうか？　スネークは死ぬほど下手くそなくせに。

「先生、ダンボールなんてどうでしょうか？」

「いきなりダンボールをどうでしょうと聞くお前の頭がどうなんだ」

はぁ、と深いため息1つと共に、千冬はさっきまで箒が座っていた姫燐の隣へと座る。

「まぁ冗談はこれ位にして、何でお咎め無しなんすか先生？」

「……これから言う事は、『全て』独り言だ。私だって、独り言を呟く時もある。分かったな朴月？」

ずいぶんと念を押す独り言だことで。

「こほん。……実はな、私は『ある生徒』に、とても感謝している」

ふっ、と顔を綻ばせながら千冬は、『本人曰く』独り言を呟き始めた。

「私は正直に言えば不安だった。一夏の奴が、このＩＳ学園で上手くやっていけるかどうか」

「ま、普通の男なら無理っすよね」
「……」
「はいはい、独り言でしたよねー。黙ってますよ」

だからそんな、見るだけでＩＳすら撃墜できそうな視線をこっちに送らないでお願い。

「友人も居らず、女しかいない学校で、慣れぬ戦いの訓練。いくらアイツの為だとは言え、それが本当に一夏の幸せの為なのか？　随分と、悩まされた」

きっと彼をＩＳ学園に無理やり入学させた時も、その鉄面皮の裏で、謝罪し続けて来たのだろう。

自分の進む道を、自分の手で選ばせてやれなかった事を。

「事実、この学園に入ると決まってから、一夏は滅多に笑わなくなった。卒業するまでの３年間、一夏の顔に笑顔が戻らないのか思うと、負い目を感じずには居られなかった……だが、アイツには良い友人ができた」

そう言って千冬は、姫燐の顔を見遣る。

「そいつは少々……いや、大分問題が多い不良だが、その生徒と出会ってから、確かに一夏の顔に笑顔が戻ってきた。アイツの事をいつも気にかけてくれるし、友人の妹とも仲良くやってくれている。そして今日、一夏はこの学園生活の事を『悪くない』とまで言ってくれた。姉として、教師として、これほど嬉しいことは無い」

傍から見れば、唇が微妙に釣り上がっただけで、ほんの少しだけ

嬉しそうにしか見えない千冬の笑みだったが、いつも不機嫌そうな彼女の顔に見慣れている姫燐にとっては、それはとても極上の笑顔に思えた。

「だから……ここからは質問だ、朴月」

「質問？　いやー、光栄っすよ。まさかあの織斑千冬に興味を持って頂けるとは。これはフラグですか？」

「旗が何かは知らんが、これだけは、大切な弟と親しくなる奴として、どうしても知っておかなければならない」

千冬の表情が一転、元の鉄面皮に戻っ――いや、これは違う。平時の表情とは違う。いつも真剣な彼女だが、それでもこの真剣さは段違いだ。

姫燐の眼を一直線に見つめ、千冬は問う。

「朴月。お前は、いったい何者なのだ？」

浮ついていた姫燐の表情が、締まる。

その瞳から暖かさが消え、急速に冷たく、鋭く磨かれていく。

「……いやですね先生、オレ達の話を聞いてたんでしょう？　オレはただの一般家庭に生まれた――」

「一般家庭に生まれ、普通に過ごして来た奴が、そんな目をするか？」

彼女の言い分をピシャリと遮った千冬に注がれる視線が、また、一段と鋭利になる。

「その目だ。私は貴様のような目に、非常に見覚えがある」

そう、彼女は今まで非常に様々な地を転々としてきた。
呆れかえるほど平和な国もあれば、常に銃声が鳴り響く地獄様な国すらあった。
そして、彼女の、朴月姫燐が今、千冬に向ける瞳は、

「貴様の目は鉄が心にまで染みついた、殺し、殺されるのが当たり前の世界。そんな地獄の住人共の目だ」

ただただ、目の前に広がる現実に、冷徹に容赦無く鉛玉をぶち込んでいく、そうしなければ生き残れない。そんな世界に順応した、いや心の底まで染まりきった双眸。

「だが、貴様はそんなロクデナシ共とは何か違う。確かな暖かさを持っているのも確かだ」

一夏や箒に見せた、義理人情と呼べるモノ。
不確かで形の無いそれは、地獄の住人どもが忌み嫌い、無意味だと吐き捨てる綺麗事。
だが、この世のどんなモノよりも、人の心を暖める大切なモノ。
それを彼女は確かに持っている。

「だから、私は知らなければならない、いや知りたい……だから、もう一度聞く」

「朴月姫燐、本当のお前は、一体どちらなのだ？」

真摯な千冬の声が、夜の公園に響き渡って溶けていく。
いくら時間が経っただろうか。冷たい春風、電灯の光る音、ありとあらゆる環境音が、とても大きく聞え、そして、姫燐はその冷たい瞳を閉じて、

「Ｉａｍ……」
「……？」
「Ｉａｍ……ａｌｌ　ｏｆ　ｍｅ……」

ゆっくりと、ささやく声で姫燐は説明する。

「『オレが、オレの全て』って意味ですよ、先生。どれが、じゃない。いつものオレも、さっきのオレも、全部ここに居るオレって存在なんです」
「……それで、納得しろと？」
「ええ、でも信じてくれ、と言うしかありませんよ。オレが一夏に言った事に嘘偽りはありませんし、自分でも訳が分かりません。何で本気になると、こんな目をするのか」

姫燐の顔に浮かぶ表情は、不安。

「ハッキリ言って、自分でも怖いんです。箒を傷付けておきながら、あそこまで冷淡になれる自分が、怖い」

冷たさが消え、代わりに瞳に憂いが宿る。
本当に自分でもあの感情が何なのか、分かっていないのだろう。
それが突然牙を剥き、友人を襲う、それがどうしようもなく怖い。
そんな顔をしていると、千冬は思う。

「でも、それもオレって人間なんです。だから『オレが、オレの全

て』、そうとしか言いようがありません。ですから……」
「わかった」

千冬は、彼女の答えを聞かずに立ち上がった。

「もういい、それ以上喋るな」
「……分かりました」
「ああ、私とした事が、無駄な時間を過ごした」

千冬はコートのずれを直し、吐き捨てる。

「本当に、無駄だった。何を今更聞く必要があったのか、お前は元々」

「私の信じるべき、生徒の1人ではないか」

「……ありがとうございます、先生」

嬉しそうに笑う姫燐を無視して、彼女はこれ以上話す事は無いと言わんばかりに、スタスタと速足で去っていく。そのつれない仕草でも、今の姫燐にはとても暖かなモノに見えた。

「……あ、そうだ。先生！」
「なんだ、お前も遅くならない内に……っと？」

振り向くと共に、姫燐がこちらに何かを投げ寄こした。
千冬はキャッチすると、手のひらの上の姫燐が投げた何かを見る。

「これは、ネックレスか？」

黒いリングに、銀を台座に蒼と純白が混ざった水晶があしらわれた、翼のレリーフ。

あまり高い物ではないが、中々に趣味が良い男物のネックレス。

「それ、一夏の奴に渡しておいてください」

「……なぜ、コレを一夏に？」

千冬が理由を尋ねると、姫燐はエクステで伸びた後ろ髪を恥ずかしそうに掻いて、

「いや、この前のクラス代表決定戦でアイツ、それなりに頑張ってたのに叱ってばっかだったから、少しは労ってやろうかなーって、さっきの男物の服屋で……ほ、本当にそれだけですよ！？」

「なら、お前が渡せばいいだろう」

「いや、そりゃそうなんですけど……」

顔を真っ赤にしながら、少し俯いてそっぽを向き、

「こんな女々しいマネ、オレのガラじゃないですよ……」

本当にガラじゃないその一言に、心底意外そうな表情を浮かべる千冬だったが、次の瞬間には不出来な生徒を見るいつもの鉄面皮に戻って、

「分かった、これは私が、責任を持って一夏に渡しておこう」

「あ、あと！　オレからって事も伏せて下さいよ！　絶対にですよ！」

「まったく、意外と心配性だなお前は。ではな、明日遅刻するなよ」

それでは意味が無いのではないだろうか？　そんな事を思いながら、渡す時に絶対、赤くなりながら呟いた事も含めて在りのままを伝える事を決意した千冬の姿は、元々真っ暗だった事もあり、すぐに闇夜へと溶けていった。

「……ったく、散々だぜ。今日は」

千冬の気配が完全に消えた事を確認すると、姫燐はベンチに思いっきりもたれ掛り、右手を顔に当てながら恨み事を呟く。

カメラは買った瞬間等に壊わされるし、弱点を一夏に知られてしまうし、果てはあんな醜態を千冬の目の前で晒してしまった。

そして何よりも一番アウトなのは、ずばりと『自分の闇』を言い当てられてしまった事だ。

「くくっ……くはは……ははははははっ……」

ぐにゃり、と右手の下の顔が歪む。

自然と、笑いが込み上げてくるのを押さえられない。

「……『Ｉａｍ　ａｌｌ　ｏｆ　ｍｅ』……ええ、それだけですよ。織斑先生……」

さて、そろそろ自分も帰るとしよう。姫燐は立ち上がると、ゆっくりと誰も居なくなったベンチを後にする。明日からも、日々は続いて行くのだから。

そう、彼らとの別れの日までは、ずっと……。

○●○

服屋から逃げ出した弾は、何とか無事にコックピットから帰って来た一夏を適当な駅まで送り届け、すっかり夜も更けた頃にようやく自分の家に帰って来ることができた。

「つ、疲れた……」

自分はリフレッシュのために街に出た筈なのに、どうしてここまで疲弊して帰って来なくてはならないのだろうか？　本当なら今すぐベッドにダイブしたいのが本心だが、生憎と家業がそれを認めない。

『五反田食堂』、近所ではちょっとは名が売れた食堂で、基本的には両親が営んでいるのだが、休日のような人が多い日には自分も手伝いに駆り出される日が多々ある。

そして今日は街に出る軍資金の前借の条件として、帰ったら食堂を手伝う事を約束していたのだ。

「はぁ～……ついてねぇ」

これで、見た目麗しい女の子が「お仕事、頑張ってね♪」の一言でも言ってくれたら俄然やる気もその他色々も出ると言うモノだが、生憎と自分の周りには周辺の女運を全て吸っていく、ダイソンも真

っ青な奴がいるので期待は出来ない。
　因みに妹は居るが、そいつは自分にエールではなく暴力という名のランチャーを良く送って来る。

「ま、頑張るしかねぇか……」

　愚痴を言っても仕方が無い。調理に集中している父親に一声かけ、洗剤で手を洗うとエプロンを手に取り、ホールへと出る。
　古臭く、そこまで大きく無い木製のテーブルと安物のイスが多数置かれた、いかにも下町の食堂といった言葉が良く似合う幼い頃から見慣れたホール。
　しかし、今日は少し何時もとは様子が違った。

（なんだ？　今日は、えらく空いてるじゃねぇか）

　夜も更けて来たこの時間帯は、飲食店にとっては一番の書き入れ時であるというのに、ホールには閑古鳥が鳴いており、居るのは最近常連になったＯＬさんと、そして……

（誰だ、アレ？）

　自分と同年代だろうか？　見慣れない外国人の女の子２人だけだった。
　片方はハンチング帽を目が見えるか見えないか位に深めに被り、腰位までの流れる様な少しくすんだ青髪をお下げにして纏め、出る所は出ておきながらスラッとした体型が魅力的な、大人びた少女だ。
……しかし、なぜ着物を着ているのだろうか？　非常にミスマッチだ。チラチラ見える肌色が、非常にナイスだが。
　もう片方は、これまた背が低い、クラスメイトであった『凰鈴音』にそっくりな少女だ。もちろん、体型が。しかし顔色は何処か具合

が悪いのか、余り良いとは言えず、病的なまでに白い肌とサイドテールに纏められた消し炭のように灰色の髪と、パッチリと開かれているのにハイライトが虚ろな瞳が余計に病弱な印象を与える娘だ。
因みに、こっちもなぜが着物姿である。
２人共、どこか不機嫌そうに何かを話しているが、外国語なので何を言っているのかさっぱり分からない。少なくとも英語では無いようだ。
もの珍しいのは確かだが、お客はお客だ。
弾は父親に呼ばれ、出来た２人前の焼き肉定食を受け取ると、２人の席へと運んで行く。

「焼き肉定食を２人前、お待たせしました！」
「む、スマンな。恩に切るでござる」

……ござる？　日本語も喋れる事に驚きだが、弾は寧ろ受け取った青髪の方の少女の、妙に時代錯誤な物言の方が衝撃だった。

「では、さっそく頂くでござろうか」
「……異常。リューン、日本語がおかしい。見て、五反田さん明らかに引いてる」

リューンと呼ばれた青髪の少女は、顎に手を当てながら灰色の少女の言葉を思案する。

「しかしトーチちゃん。拙者が見た日本語の教科書では、この『ござる』こそが日本語の最大の特徴だと書いてあったでござるよ？」
「……質問。その教科書、なんてタイトル？」
「『これでニホンはマスター！　ニホンジダイゲキの全て』というタイトルでござる」
「……論外。何で普通の翻訳書を買わなかったの？」

「いや、店員に聞いたら『ニホンを知りたいならコレしかない！』と強く推されて……」
「……馬鹿。どう考えても本屋の在庫処分に協力させられただけ」
「で、では、日本人は皆、外着は着物だというのも嘘なのでござるか！？」
「……当然。というか、外を歩いてる人が1人でも着物着てた？　ワタシは服なんて別にどうでもいいけど」

少し特徴的だが、トーチと呼ばれた少女の方がまだ日本語ができるらしい。
しかし何と言うか、個性的というか……もしや彼女達もＩＳ学園の生徒だろうか？
あそこの外国人は、皆スラスラと日本語が使えると聞くし、何よりもこんな所に来る外国人などそれくらいしか思いつかない。
少し彼女達に興味をそそられた弾は、話を聞いてみる事にした。

「ねぇ、君達？」
「ござ？」
「……なに？」
「君達って、もしかしてＩＳ学園の生徒？」
「いや、残念ながら違うでござるよ」
「あ、そうなんだ……」

はて、コレが外れなら一体、彼女達はなぜここに？　五反田食堂も、とうとう外国人客が来る程に人気がでたのだろうか？
アテが外れて思考を展開する弾を余所に、キュ～ッと可愛らしい音がどこからか聞こえて来た。

「……空腹。先に食べていい？」
「うむ、トーチちゃん。日本では食べる前に、手を合わせて頂きま

すと……ってコラ！」
「……美味。このトマトはイケる」

日本のうんちくを語るリューンを無視して、焼き肉の皿に乗っていたプチトマトを素手で摘み、ひょいと口に放り込むトーチ。

「トーチちゃん、箸を使うでござるよ！」
「……ヤダ。コレ、無駄に使いにくい」
「何を！　箸を使わずに日本食を食べるなど、食に対する冒涜でござる！」
「あ、あの～、フォーク使いますか？」

弾は、すかさず厨房からフォークを持って来て、トーチの前に差しだす。
するとトーチは即座に引ったくり、余程お腹が空いていたのだろう再び食事に没頭していく。

「……感謝。五反田さん」
「いえいえ、どうもっす」
「そういえばお主、先ほどＩＳ学園がどうとか言っておったでござるな？」
「ええ、そうですけドゥエイ！？」
「む、どうしたでござる？」

リューンの方へ視線を向けた弾は、思わず奇声を上げてしまった。
別にしょうゆ瓶を手に持ったリューン自体は色々とおかしいがおかしい所は無い。問題は、そのしょうゆ瓶の口の先に広がる光景だった。
黒、黒、黒。焼き肉定食『だった』それは、ご飯やみそ汁にほうれん草のおひたし、そして当然焼き肉すらも真っ黒に染まっていた。

それでもまだ足りないのか、更にしょうゆが投下されていく。

「む、ショウユが切れたでござる。五反田殿、おかわりをお願いするでござる」

「は、はい……」

そして弾が厨房から持って来た新しいしょうゆも、ドバドバと遠慮なく料理へとかけていく。今すぐに「もうやめて！　とっくに料理の味はしょうゆよ！」と叫び引きとめたいが、別に犯罪をしている訳でもないお客に店員がそのような事を言うことは出来ない。

そうして、2本目が半分を切った所でようやく納得がいったのか、

「それでは、いただきます。でござる」

リューンは手を合わせ、箸を外国人とは思えないほどに器用に操ると、しょうゆでボドボドになったおひたしをパクっと一口で食べる。

「うむ、うまいでござる！」

舌死んでんのかコイツ。

もうここまで来たらコレはほうれん草のおひたしじゃない。ほうれん草の食感がするタダのしょうゆだ。さっきトーチに食の冒涜だとか何とか言っていたが、コイツの方がよっぽど食を冒涜している。

「いやー、やはり日本食と言ったらショウユ！　これに限るでござる。トーチちゃんは要らないでござるか？　ホレホレ」

「……不要。その黒いモノをこっちに向けるな馬鹿が」

あくまでも視線は定食から目を離さずに、はしゃぐリューンを軽

くあしらうトーチ。
何だろうか、どう見てもスタイルのいいリューンの方が年上なのに、先ほどから見は目は幼女なトーチの方が年上に見えて仕方が無い。

「あ、そうそう。五反田殿、ＩＳ学園のことだったでござるよね？」
「あ、はい、そうですけど」
「もしかして五反田殿、『織斑一夏』のお友達か何か？」
「えっ、一夏の奴をしってるんっすか？」
「ふっふっふ、そりゃ世界的な有名人でござるからな。同年代の男、そしてＩＳ学園が近い少年が男には無縁の学園の事を聞く理由なんて、それくらいでござろう？」

どうやらこの少女、言動は残念だが、それなりに頭は切れるらしい。

「それじゃあ、そんな五反田殿に拙者から助言でござる」

助言？　一体、何だろうか？
リューンは箸を手元に置くと、静かに告げた。

「今すぐ、伏せるでござるよ」

瞬間、蛍光灯が消え、店内が暗黒に包まれた。

「なっ！？　なんだぁ！？」
「……黙れ。そして伏せて」
「へっ？　うおっ！？」

暗闇で分からないが、恐らくトーチに引き倒され、弾は無理やり床に伏せさせられる。
次にバリン、と窓ガラスが割れる音。そして『何か』が投げ入れられて店の床に転がった。うっすら見える、濃い緑色をした手のひらサイズの、まるで『パイナップル』の様な形をした何かが……。

「ひッ！」

弾は、理解した。してしまった。
自分がやってるゲームにもよく出てくる代物だ。それはパイナップルの様な形をしており、栓を抜くと数秒で爆発し、破片を飛び散らせる……人を殺すための兵器。そして、投げ入れられたという事は、今殺されそうなのは、自分。
動けない。動かない。ここから逃げなければ自分は確実に死ぬというのに、首に当てられた死神の鎌に、完全に身体が竦んで動けない。

「あ……あぁ……！」

死ぬのか？　俺は、このまま本当に死ぬのか？
例え、脳内でなにを問答しようとも時間は無情に過ぎていく。
そして無情に、パイナップルは破裂し、爆音が店内に響いた。

「ッッ……！！」

恐らく直ぐに襲いかかるであろう破片の数々に、弾は咄嗟に目を閉じて頭を隠し、少しでも生存率を上げる虚しい努力をするが……。

「……？」

どれだけ時間が経っても、破片は自分に襲いかからない。
しゃっくりが止まった時の様な、嫌な感覚が弾の身体を支配する。
いったい、何があったのか？　恐る恐る瞳を開けると、

「無事でござるか、五反田殿？」

自分の目の前に、庇うように紫の鎧が立っていた。
いや違う、これは鎧などではない。
手榴弾どころか、バルカン砲でも傷１つ付かない装甲。世界を文字通り作り変えた超兵器……！

「インフィニット……ストラトスッ……！」
「イエス、その通りでござるよ、五反田殿」

声から察するに、リューンのＩＳなのだろう。
紫を基調にした、女性的でありながら全身を包む威圧的な鎧に、目元が隠れる位に深く被った、竜の頭のような形状をした兜。よく見れば、装甲もどこか鱗を思わせるような彫が入っている。背中から生えているコウモリのような翼も相まって、まさにその姿は人の形をしたドラゴンそのものである。

「怪我はないでござるか？」
「あ、ああ、何とか……ッ！」

足音が２つ、いや３つ。誰かが、この店に入ってきた。
恐らく、先ほど店内に手榴弾を投げ込んだ奴等だ。

「な、なんなんだよあいつ等も、アンタも！」
「ちょ、五反田殿、声が大き――――っ！」

チャ、と何かがこちらに向けられた音がする。
そして同時に、間髪無い発砲音。

ズドドドドドッ！

「う、うわぁぁぁぁぁ！」
「五反田殿！　動くなでござる！」

放たれた銃弾は、全てＩＳのシールドバリアに弾かれる。下手をすれば戦車砲にさえ耐えられる装甲だ。アサルトライフルごときで、貫ける代物ではない。
しかし、このままでは動けない。下手をすれば、弾に銃弾が当たってしまう。
さてどうしたものか、とリューンが高速で思考を巡らせていると、

「……発見。捕縛」
「ぐ、わぁぁぁぁぁぁ！！？」

トーチの声と共に、銃声は止み、代わりに響くは銃を撃っていた奴の悲鳴。
弾が姿勢をずらして覗き見ると、トーチは侵入者の首を掴み、軽々と持ち上げていた。
当然、彼女もＩＳを展開して。
まず一番に目立ったのは、その不自然に巨大なまでに両腕だ。トーチの首くらいまでのサイズがあるだろうか、燃え上がる様なレッドをメインカラーとし、背中に積まれたジェットパックらしき物と、胸元に鈍く輝くコアのような物が特徴的だ。

「は、離せ！　はなせぇぇぇぇぇ！」

弾には分からない外国語で、侵入者は叫ぶ。
仲間を捕まえたトーチのＩＳに、他の仲間が集中砲火を仕掛けるが、それでもＩＳの前には無力。たとえ3対2とお荷物付きであろうとも、ＩＳ相手にただの歩兵に勝ち目などある訳が無い。

「くそッ、なぜだ!?　貴様、まさか……！」
「……ハァ」

首元を持たれて宙づりになりながらも暴れながら、ごちゃごちゃと分からない事を叫ぶ侵入者にトーチは心底鬱陶しそうにため息をついて、

「うるさい。燃えちゃえ」

赤くコアが光り輝き、侵入者の身体はトーチの腕から噴き出た炎に、あっという間に飲み込まれた。

「ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁっぁぁぁっぁぁ！！！！！！」

暗かった店内が、命の炎で照らされる。他の2人の姿が丸見えになったが、2人共目の前の惨状に動けずにいた。
外国語でも分かった。彼の叫びは、命が燃える絶叫へと変わる。
昔、理科の実験でやった、タンパク質を燃やした時と全く同じ匂いが、店内に充満する。
その、人が生きたまま丸焼けになる余りにもショッキング光景に、弾はただ茫然とすることしかできない。

「タスケ！！　タス！！　アツいダレカタケシテスケテスケタス！！！」

「……だから、うるさい」

トーチの巨腕からゴキャ、という嫌な音が鳴る。
必死に足掻いていた火達磨は2度と叫ばず、動かなくなった。

「……照明。コレでいいよね？」
「うむ、充分でござる」

物言わぬ、タダの松明となった死体を持ったままトーチは尋ねる。
それを言い終わるか終わらない内に、弾の前に立っていたリューンが姿を消す。

「ひっ、バケモ」
「遅いでござるよ」

ヒュン、と風を斬る音がした。
いつの間にか手に槍を持っていたリューンが、茫然としていた2人目の真正面に立ち槍を振り抜いた音だ。そして次に、ドサァ、と重い物が地面に落ちる音と、プシャァ、と噴水が吹き出る様な音が弾の耳に届く。
そしてリューンが身体を退けた先には、上半身が無い2人目が、ただ棒立ちしていた。

「どうなってんだ……どうなってんだよ……」

呪われたように、弾は同じ言葉を呟く。
訳が分からない。いきなり訳の分からない奴等に襲われて、訳の分からない外国人に助けられて、そして訳が分からないまま、目の

前で人が2人も死んで。

「一体、何がどうなってんだよ！！！」

「まぁまぁ、落ち着くでござるよ。五反田殿」

「……錯乱。よくない」

返り血でＩＳを真っ赤に染めたリューンと、人間松明を持ったままのトーチが彼をなだめるが、効果なんてある筈が無い。むしろ完全に逆効果だ。

「黙れ！　なんで、なんでお前らは人を殺してそんなに落ち着いてるんだよ！！？」

「なんで、と言われましても、ねぇ？」

「……平常。おかしいのは五反田さん」

「おかしい……？　俺が、俺の方が狂ってるってのか！？　ふざけんじゃ……ッ」

そこまで言って、弾は気が付く。

彼女達の表情は、冷たく、どこまでも冷徹で、穏やかな湖水のように微塵も揺れ動いていない。本当に、これが同じ世界を生きる、同じ人間のできる表情なのだろうか？

「こらこらトーチちゃん。五反田殿は『向うの世界』の住人ですから、殺しが当然じゃないのは当たり前でござるよ？」

「……失念。ごめんなさい、五反田くん」

ようやく、弾は悟った。

コイツ等は、俺達と根本的に違う。人殺しに何も感じない、地獄を生きるロクデナシであることに。そしてここは、そんな地獄の１丁目。奴等のホームグラウンドで、アウェーな自分が何を言おうと

も、それはただの戯言でしかないことに。

「さて、それじゃあ最後の人に、話を聞くとしましょうかでござる」

「ヒッ！　た、助けて、助けてくれ！」

完全に戦意を喪失し、腰を抜かして壁にもたれ掛り命乞いをする最後の1人。

そんな彼にリューンはしゃがみ込む形で視線を合わせ、外国語で尋問を始めた。

『さて、吐いて貰おうか「チーム・オットー」。なぜ勝手に動いた？』

「チ、『チーム・セプリティス』……それは、奴の親友である五反田弾を人質にすれば、織斑一夏を簡単に」

『五反田弾には、指示があるまで手を出すな。というのが上からの命令だったはずだ』

「そ、それは……」

『貴様らが功に焦ったせいで、これから五反田弾の警備はより一層厳重になるだろうな』

そう言って、先ほどからずっとＩＳを腕部のみ展開させ、こちらを狙うＯＬ……恐らく日本が誇る裏仕事のプロフェッショナル……更識家の者だろう、を横目で見遣るリューン。

「ゆ、許してくれ！　この失敗は、必ず、必ず次に！」

『……もう、何も言うな』

呆れたようにリューンは、ポンと彼の頭にその手を置いて、

『言い訳の続きは、地獄でやってこい』

ぐしゃ、と生物が潰れる音が、した。

●○●

「……通達。後始末は別働隊に任せて、セーフティハウスに帰っていいらしい。ただし、報告書は後で送ることだって」

「はぁ、ついて無いでござるなぁ……」

冷たい風が吹きすさむ、ビルの屋上。下の街明りがイルミネーションの様に輝いていて、非常に美しい。まさに地上の星、と言えるだろう。

そこのフェンスに肘を乗せながら、リューンとトーチの2人は佇んでいた。無論、不法侵入で。

「……幸運。更識と一戦構えずにすんだだけ、マシ」

「あれは、拙者達が同士討ちをしてたから、見逃してもらえただけでござるよ。本当に憂鬱なのは、あの店にもう2度と行けない事でござる……」

最後の1人を処分したあと、2人は物言わなくなった3名を担ぎ、店の弁償代とご飯の代金と掃除屋の番号だけを渡して店を去った。特に最後のはキツすぎたのか、弾は最後まで放心状態だったが、まぁそこは運が悪かったと諦めてもらうしかないだろう。

「しっかし何で本部は、あんなアホ共をこんな重要な作戦に起用したのでござろうなぁ……」
「……不明。ただ単に節穴なんじゃない？」

彼女達に課せられた任務、それは『織斑一夏の誘拐』……その為に、『組織』から派遣されたリーダーを筆頭として、スリーマンセルの１０チーム――今は９チームが派遣された。その中でも『チーム・セプリティス』は専用機を持つ数少ないチームで、リーダーと選りすぐりのエースのみが就任することを許された主力部隊だ。だというのに……。

「なんで拙者達、隊長の命令とは言え、こんな『暴走しそうな小物共の見張り』だなんて下らない任務に付かなきゃならないんでござるか？」
「……遺憾。前の隊長ならこんな事はなかった。というか、隊長ならきっとオットー達が行動に移す前に処分してた」
「はぁ……ですよねぇ……でござる」

自分達は前のリーダーと共に配属されて以来、ずっとそのセプリティスの座を護り続けて来た。しかし……。

「特別任務、一体なんなのでござろうなぁ……」
「……不詳。とても大事な任務らしいけど」

隊長は３月頃にその高い能力を買われて、独りだけとても重要な特別任務へと引き抜かれてしまった。強く聡明で、非常に高いカリスマを持ち合わせていた隊長をとても慕っていた彼女達にとっては、とてもショックな出来事だったが、所詮は組織の末端でしかない自分達に何かが出来る訳ではない。

リューンは少し寂しそうに携帯端末を取り出し、隊長とトーチとで最後に撮った記念写真を眺めた。

「……またそれ？」

「いいじゃないですか、思い出に浸るくらい」

「……確かに、悪くない」

トーチも、その画面を共に覗きこむ。

そこには野戦服を着て明るくピースサインをして笑うリューートと、同じく野戦服を着た相変わらず不健康そうだが同様に薄らと笑うトーチ。そして、2人に挟まれた自分達と同年代の、野戦服にロングコートを羽織った直立不動で顔面神経痛をおこした様にしか見えない少女。

「……傑作。隊長は笑うのが下手糞だった」

「そうでござるなぁ。笑顔と言っても、隊長はコレが限界でござったからなぁ」

適当に切り揃えられた燃え上がるような赤髪、服の下からでも分かる発育のいい身体、首に掛ったヘッドフォン、そして、太陽レリーフが付いたのチョーカー型の専用機。

「キルスティン隊長……拙者達、また、どこかで会えるでござるか？」

そんなリューンの悲しい吐露が、風に乗って街の中へと消えてい

った。

久方ぶりのあとがき

はいどうも、久しぶりにこっちに呼ばれてないけどじゃじゃじゃ～ん。クラふぉうです。

クソ長いし、結構グロいし、ほとんどシリアスでしたね。今までと毛色が違いすぎて、皆に受け入れられるか心配で胃が天元突破です。

ですがこの小説は実はこんな感じです。ＩＡＭ…ＡＬＬ ＯＦ ＭＥ…本格始動、と言ったところでしょうか。

ストーリーが動き出し、一夏を狙う組織が出現し、キリの謎も深まってまいりました。

これから、ドンドンと話が動いてきます。

で・す・が、作者のリアルが最近ヤバい、二次書いてる時間がガチでない。

出版社に投稿するお話も書かなくてはいけないですし、宿題もパネェことになってます。

それに作者もシリアスばっか書いて疲れました。な・の・で。

突然ですが第１回！ ＩＡＭ…ＡＬＬ ＯＦ ＭＥ…番外編アンケートを始めたいと思います！ わー、どんちゃんパフパフ！ ……はい、春先ですが寒いのでさっさと行きましょう。

この企画は、番外編のシチュエーションを読者の皆さまに考えてもらうという、作者が楽できゲフンゲフン……もとい皆様への日頃の感謝を込めた企画です！

キリ×千冬といった本来ならあり得ない組み合わせや、キリと弾の新婚生活のような馬鹿げたシチュでもなんでもこいやー！ でも、

ＸＸＸに乗せるようなネタだけは簡便な！
もちろん、本編さっさと進めろやクズが！　という意見でも悔しい！　でも感じちゃ（ｒｙ
また、まだ未登場なキャラでも、ここならＯＫです。ただ、キャラの保証はしませんが。いろんな意味で。
期間とかは特に決めてませんが、書き始めるタイミングなどがあるのでお早めに、感想掲示板までお願いします。
皆様の紳士……じゃなかった真摯な欲望の数々、お待ちしております！

それでは今回はこの辺で、タラバガニ、バター王。

あとこれは完全に余談なんですが、姫燐の朴月の名字は実は、植物の鬼灯（ほおづき）から取りました。
そして、鬼灯の花言葉は「偽り」です。

# 番外編　「ｉｆストーリー　『五反田食堂へようこそ！』」（前書き）

「……前書き。今回のお話は第七話のｉｆストーリーです。リューンが五反田くんに『伏せるでござる』と言った所から派生した、百人目様のリクエスト、ワタシとリューンが罰として五反田食堂で働かされるお話です。いつも以上にキャラ崩壊が激しく、色々とメタ全開でカオスですが、ｉｆなのでここで起きた出来事は本編には一切影響を及ぼしません。なので深い事は何も考えず、激流に身を任せて楽しんで下さい。かっこ、きゃはおんぷ、かっこ閉じる。……これでいい、リューン？」

「ちょっとトーチちゃん！　なんでカンペ通りにしないんですか！？」

「……意味不明。ちゃんとリューンが書いた通りに喋った」

「わっかってませんねー、トーチちゃん！　そのカッコの中は『きゃは♪』と普段はテンション最低なトーチちゃんが萌え萌えキュンなポージングすることでギャップ萌えを演出し、読者の皆さんに露骨な萌えを見せつけそれに反応する豚共をブヒ（カチャ）ごめん火炎放射器こっち向けないで良い子だから」

「……分かればいい。それでは本編、始まり始まり」

## 番外編　「ｉｆストーリー　『五反田食堂へようこそ！』」

「今すぐ、伏せるでござるよ」

「なっ！？　なんだぁ！？」
「……黙れ。そして伏せて」
「へっ？　うおっ！？」

暗闇で分からないが、恐らくトーチに引き倒され、弾は無理やり床に伏せさせられる。
次にバリン、と窓ガラスが割れる音。そして『何か』が投げ入れられて店の床に転がった。うっすら見える、自分の前腕くらいのサイズの、まるで『パイナップル』の様な形をした何かが……。

「ひッ！　……いィ？」

弾は理解した。が、意味が分からなかった。
目の前に転がっているのは、パイナップル型をした『何か』ではない。丸みを帯びたシルエット、独特の形状をした瑞々しい濃い緑色のふさ、硬く黄色い甲羅のような皮。しかも身が下ぶくれしており、甘い香りがここまで漂ってくる。これは、ちょうど食べごろな状態であるというサインだ。そう、そんな完璧な、

「パイナップル……？」

またの名をアナナス。言わずと知れた一般的なフルーツで、爽やかな酸味と甘みが凝縮された身と果汁が特徴の果実で、肉類と摂す

ると酸素の働きにより、胃の中で消化しやすくなり、また生肉と一緒にしておくと肉を柔らかくする効果もあったりする。
どういうことなの？　どうしてウチの窓にパイナップルが投げ込まれるの？
仮に、これがパイナップル型の手榴弾だったら、まぁそれも喜ばしくは無いがまだ投げ込んだ相手が何をしたいかは分かる。しかし、爆発物でもなんでもない食べ頃のパイナップルを投げ込まれた場合は、どう反応すればいいのだ？　弾のまだ人生の半分も生きていない経験値では、まだこのナゾを解明することができない。
きっと、どれだけ歳を喰っても解明する事はできないだろうが。

「油断してはダメでござる。五反田殿……」
「えっ……」

薄暗くて顔はよく見えないが、聞えるリューンの声色は真剣一色だ。
まさか、アレは見た目はタダのパイナップルだが、実はとんでもない兵器なのでは……。

「あれほど美味しそうなパインを惜しみなく投げ込んでくるとは、もしや『奴等』は……」

どうやら、ただのパイナップルで間違いないらしい。
弾は一瞬でも本気で警戒した自分が、とてもアホくさくなってくる。

「や、奴等ってなんなんっすか？」
「……ええ、そうでござるな。巻き込まれてしまった以上、五反田殿も無関係ではござらんからな」

何か聞きたい様な聞きたくない様な……だが、何時如何なる時で

も真実を追い求めるのは、悲しきかな人の性である。

「『酢豚の中のパイナップル撲滅委員会』……五反田殿、この名を知ってるでござるか？」

「……はぁ？」

やっぱり聞くんじゃなかった。一言一句どこをどう吟味してもしょうもない予感しかしない。しかし後悔あとに絶たず。リューンは頼んでもいないのに、そのアホそうな組織の全容を説明し始めた。

「奴等は、『ツインテール・ベル』と呼ばれる謎の人物をリーダーに、全世界、いや全宇宙の酢豚の中のパイナップルをこの世から消し去ろうと日夜暗躍する非合法組織でござる。奴等に目を付けられ、酢豚のレシピからパイナップルを消されてしまった中華料理店は数知れず」

やはり、どうしようもないアホ集団だった。無駄にスケールデカいし。つーかウチは酢豚なんか取り扱ってないし、五反田食堂は中華料理店ですらないが、なぜか気にしたら負けな気がする。

くぅ……と忌々しそうに顔を歪めるリューンとは対象的に、弾は心底どうでもよさそうに立ちあがりズボンに付いた埃を払いながら、ポケットから取り出した携帯を『１１０』とプッシュして、

「もしもし、警察ですか？　はい、不審者が店の中で暴れているんです。はい、場所は五だ……」

「スナッチ・アンド・クラッシュ！」

警察に通報しようとした弾から携帯電話を素早く奪い取ると、リューンはそのまま携帯を３６０度折りたためる様に膝で粉砕……もとい改造した。

「ああっーーーーーー！！！　何すんだテメェ！？」
「ダメでござる！　奴等は警察にも太いパイプを持ってるでござるよ。きっと、通報なんかしてももみ消されるのがオチでござる……！」

弾は悟る。ああ、世の中って俺が思っているよりもずっと平和なのかもしれない。
あと弾が言った不審者の中には当然、今しがた携帯をぶっ壊しやがったコイツ等も含まれている。

「つーか、お前らは一体何なんだよ！？　その無駄に規模のデカい訳分からん組織と、どんな関係なんだ！？」
「それは……ん？」

一応客だというのに敬語を完全に忘れた弾の叫びに呼応したのか、ぱぁ、と店内に、消えていた筈の文明の明りが蘇る。
そして入口から、さっきからずっとフェードアウトしていた、もう片方の少女が一仕事終えたような顔をしながら手をパンパン、と払いながら入ってきた。

「……処分。終わった」
「おお、トーチちゃん！　さっきから空気だと思ってたらいつの間に！」
「……さっき。リューン達がお喋りしてる間に、侵入した奴等は全員ボコってゴミ捨て場に捨てて来た。配電盤もズタボロだったけど応急処置はしたから、しばらくは大丈夫なはず」

どうやら、人の店にパイナップルを投げ込んだ不届き者はいつの間にか、この不健康そうな少女によって成敗されたようだ。そう言

えばさっきから、客が居ないのにやけに店内が騒がしかった気がするが、どうやらそれはこの娘が暴れていた音らしい。こいつら見た目とは違って、かなり強いのかもしれない。

「うんうん、さっすがトーチちゃん。完璧な仕事でござるな！　うりうり～」

「……邪魔。暑いから離して」

トーチの小さな身体に、後ろから抱きつきながら頭を撫でまわすリューン。口では嫌がっているが、無理やり振り解こうとしないのと、よく見れば薄らと笑っている所から、本人も満更ではないのだろうか。

「……で、お前らは、結局何なんだ？」

そろそろ本格的に呆れが怒りに変わってきた弾が、ドスの利いた声で尋ねた。

「おお、そう言えば自己紹介がまだだったでござるな」

「……説明しよう。じつは私達、世界を股にかけるトップエージェント」

「なんなんだよ、アンタら……」

エージェントが自分から名乗っていいのか？　と、そんな弾の素朴な疑問は置いてけぼりに自己紹介は続く。

「ふっふっふ、なんだかんだと聞かれたら！」

「……貴様に名乗る名前はない」

「無駄に勿体ぶって無いのかよ！」

今日だけでもう何回叫んだだろうか？
そろそろ本格的に水か、のど飴か、ハリセンが欲しくなってきた弾であった。

「こ、こらこら。それじゃあ自己紹介にならないでござるよ、トーチちゃん！」
「でも、コレを名乗るだけで誰かは一発で分かるって前の隊長が」
「それで誰だか理解してもらえるのは、天空宙心拳をマスターした人だけでござるよ！　ほら、打ち合わせ通りに……」
「……了解。リューンに合わせる」

どこか残念そうに頷くトーチ。実はあのセリフを結構気にいってたのだろうか？
ていうかもう既に自分達の名前言ってないかこいつら？

「分かればよろしい。では五反田殿、もう一度お願いするでござる」

口からヘドロが出そうな程めんどくさい……心の底からそう思う弾。
しかし、これ以上長引いたらのど的にも精神的にも良くないので、ここは力を込めた迫真の演技でとっとと終わらせるとしよう。そしてこれ以上長引きそうならすぐに店から叩きだそう。そう決意を固め、弾は叫んだ。

「だっ、だれだお前らは！！？」
「……五反田殿、もしかしてそれはワザとやってるでござるか？」

言われた通りにやったのに、何で睨まれなければならないのだろうか？　弾は首を傾げる。

「……貴様に名乗る名前はない」

そしてトーチはトーチで、心なしか嬉しそうだが結局名乗らないし、訳がわからない。

「ってか、もう名前覚えちまったよ俺……デカいのがリューンで、小さいのがトーチだろ？」

「む、やるでござるな。この短時間に女の子の名前を覚えるとは、いいフラグ男になれるでござるよ五反田殿は」

残念ながら、そういうのは全部悪友に持って行かれて在庫不足を起こしている。

「で、さっき自分達の事をトップエージェントだとか言ってたけど、何のエージェントなんだよお前ら？　『酢豚の中のパイナップル推奨委員会』とかそんなんだったら、今すぐ布団で簀巻きにして海に沈（チン）するぞ」

「……え、そ、それ、マジでござる？」

「……こ、後生。せめて指詰めで許してほしい」

声が震え、本気で青ざめる『酢豚の中のパイナップル推奨委員会』のトップバカエージェント2人に弾は怒る気力も出ず、脱力しながら頭を抱えることしかできなかった。

「はぁ……別にいいけどな。お前らが例え何してようと、それは個人の勝手だし」

「ほっ、よかったでござる。それじゃあ、拙者達はこの辺で」

「……サラダバー」

「おい待て、どこへ行くつもりだお前ら？」

回れ右して出口へとスタコラと歩いて行く2人の肩を掴んで、弾は彼女達を引きとめる。

「えっ、五反田殿？　そんな、大胆でござるよ……」
「……注意。男は狼なの～よ、気を付けなさ～い」
「黙れ、そして聞け。お前らの身体なんぞこれっぽっちも興味はないわ」
「それはそれで傷つくでござるな……」
「……希少価値。貧乳はステータス……」

まぁ、弾も年相応には性欲を持てあましてはいるが、それでもこのド変人共に欲情するほど餓えてはいない。……確かに、2人とも弾の目から見ても魅力的な美少女なのは否定できないのだが。

「残念ながら貧乳は知り合いで間にあってる。それより質問に答えろ、どこに行くつもりだ？」
「どこへ行くって、セーフティハウスに帰るんでござるけど。拙者達はエージェントでござるからなぁ、上が命令するままに夜を往くだけでござる」
「……離別。ワタシ達は2度と会う事は無い。触れあう事もない。それでいい」
「俺は……それでよくない。今お前達と、離れ離れになる訳にはいかない」

弾は真摯な顔で、ハッキリと言い切った。嘘も偽りもない、己が紛れもない本当の気持ちを。そしてそれは、男性経験など皆無なエージェント2人の頭脳をオーバーヒートさせるには充分過ぎる破壊力を秘めていた。

「ごっ、ごごごご五反田殿ぉ！？　れれれ冷静になるでござる！

拙者達、そんなにフラグ立ってたでござるかぁ！？」
「……冷静。冷静冷静ワタシハ冷静ミンナモ冷静スベテガ冷静アレ冷静ッテナンダッゲシュタルト」
慌てふためく2人を余所に、弾はあくまでも冷徹に、ある場所を2つ指さして言った。
「お前らが居なくなったら、アレとアレの修理代、誰が払ってくれるんだ？」
1つ目はパイナップルが投げ込まれ、粉々に砕け散った窓ガラス。そしてもう1つは、無残に足などが飛び散った椅子やテーブルなどの調度品の数々。恐らく、トーチが大暴れした際に粉砕されたのだろう。本人も明後日の方向を向いているし。
「それに俺のぶ～らぶら状態になった携帯と配電盤もプラスして、さて、どうやって弁償してくれるんですか？　お客様？」
最高の営業スマイルを浮かべる弾に、さっきまで真っ赤になっていた彼女達の顔色が再びデスラー総統のように真っ青になったのは、言うまでもないだろう。
☆★☆

そして数日後の土曜日。五反田食堂のキッチン。
着物ではなく、簡素なズボンにTシャツ、それに三角巾にエプロンを装備したリューンは、隣で黙々と作業をする、自分と同じような服装をしたトーチに話しかけた。

「……トーチちゃん、トーチちゃん」
「……専念。今、話しかけないで」
「いやだって、拙者達、何でこんなことしてるでござるか？」

カチャカチャと泡だらけの流し台に立って手を入れ、皿を手にとってはスポンジで磨き、水ですすいで積み重ねる。それが終わるとまた次の皿を手にとって同じことの繰り返し。エンドレスウォッシュ。

……まぁ簡単に言えば、リューンとトーチの2人は五反田食堂で皿洗いをさせられていた。しかも、泊り込みでこの数日間ずっと。

「……必然。上から弁償代が下りなかった以上、店の修理費はワタシ達の身体で返さないと」
「その言い方は五反田食堂が、お水のお店みたいに聞こえるからやめるでござるトーチちゃん。あと今回、拙者あまり関係無いでござるよね？　窓と配電盤壊したの奴等だし、店壊したのトーチちゃんだし」
「……連帯責任。チーム1人の失敗はみんなの失敗、これ軍隊じゃ常識。あと携帯壊したのはリューン」
「拙者は過去を振り返らない女なのでござる。それに軍隊って、確か拙者達はエージェントでござるよね？」
「……無問題。番外編で細かい事を気にしたらダメ」

そんな下らないメメタァな雑談をして手が止まっている2人の背中に、配ぜんを終えてキッチンに戻ってきた、雇い主である弾の怒

声が突き抜ける。

「くぉらぁ！　無駄口叩く暇があったらさっさと手を動かせアルバイト共！！　手を動かすだけの奴はアルバイトだ！　手をもっと速く動かす奴はよく訓練されたアルバイトだ！！」

「い、イエッサー！　でござる、弾殿！」

「……ホント。お昼の食堂は地獄だぜフゥフハハハー……」

それだけ言い残して弾は父親が作ったシャケ定食を2人前持つとまた、オーバーブーストを吹かしたネクストのようにホールへと吹っ飛んで行く。

お昼時、それは五反田食堂がもっとも繁盛する時間帯だ。

お腹を空かせた昼休みの会社員や学生達が一挙に押し寄せ、安く、そして早い飯を所望してくる五反田食堂のメインターゲット層。

お客の昼休みには刻限があるので、ハイペースで店を回す事が求められる。キッチン、オーダー、レジ、ウェイター、そして当然タダの皿洗いでさえも一丸となって運営は成り立つのだ。一時も気を緩める事など許されるはずがない。

次の皿、それが終わればまた次の皿へと淡々と作業をこなしていく2人。しかし、汚れた皿の量は全然減る気配がしない。だんだんと終わりが無いのが終わりなのを悟りはじめている2人は、すでに考える事を半ば放棄しながらまた次の皿へと手を伸ばす。

「この皿洗い、いつまで続くでござる……？」

「……むせる。皿洗いには飽きたのさ」

そんな事をぼやいてもまた空になった皿は増えていくし、作業は全然楽にならない。今まで仕事一筋で生きて来た2人にとって家事など、取説無しで戦略シミュレーションをするくらいに至難の技であった。

そう、実際に……。

パリン！　パリン！

「あ……また割れたでござる」

「……おお皿よ。落とした程度で割れてしまうとは情けない」

2人が手を滑らせたり、力を入れ過ぎたりで皿を割る度に、

「まーた割りやがったな！！　この愚か者どもめが！！」

「お、お許しくださいメガとろばぁ！」

「……痛い。幼女虐待で訴える。そして勝つ」

どこに居ようともいつの間にか、彼女達の背後に戻ってきている弾の容赦ない拳骨が2人の脳天に炸裂するのだ。

「お前らまるで成長しねぇな！？　これで初日から何枚割りやがった！？」

「ふっふっふ、弾殿は今まで」

「『喰ったパンの数を覚えているのか？』とかほざきやがったら、七面鳥の丸焼きみたいにパンを体内に詰め込むぞ」

「……聞きたい？　昨日までの時点で９８枚、そして今日2枚割ったから」

「記念すべき１００枚目だな！　オメデトウございますドアホがッ！！！」

再び弾の拳骨が振り下ろされ、頭にたんこぶを作りながら正座させられて、お説教を喰らうリューンとトーチ。

ここまでテンプレ。これが、ここ数日の五反田食堂の日常と化していた。

丁度タイミングが良いのか悪いのか、客足もようやくマシになっ

てくる時間帯に差しかかった事もあって、このまま弾のパーフェクト説教教室が始まるのかと、彼女達は腹を括ったが、

「おーい、弾！　いるかー？」
「よーぅ五反田！　飯食いに来たぜー！」

突然の来店した、ひと組の『夫婦』によって、彼女達へのお説教はお流れになった。

★☆★

「おう、いらっしゃい。一夏、朴月ちゃん」
「よう、弾。今日は寮に食材がなかったから来てやったぞ」

弾はバカ2人に破片の掃除だけ命令して、店にやってきた中学からの悪友こと織斑一夏と、その彼の腕に抱きついて離れない彼の『伴侶』を出迎えた。

「おいおい、間違えんなよ五反田。オレはもう『朴月』じゃないんだぜ？」
「ああ、そうだったね。えーと織斑ちゃん？　……だと、このバカと被るな」
「いや、まだ挙式は挙げて無い！　挙げて無いからな!?」
「いいじゃん別に。オレはもう『朴月』じゃなくて、『織斑』なんだよ。今決めた」

もう殆ど夫婦のようなもんじゃん。と弾は思う。

真っ赤になって否定する一夏に、えへへー、とどこか照れているが幸せそうにほほ笑む『朴月姫燐』改め、『織斑姫燐』。

そう、2人は相思相愛。もう既に協力関係では無く、新たな恋愛関係へと進んだイチャイチャラブラブのバカップルなのだ。

「いやー、俺は今、歴史的瞬間に立ち会えてるんだな……」

割とマジに目がしらに感動の涙を浮かべながら、弾は肘で一夏を小突く。

「あの一夏が、鈍感を極めし者だった織斑一夏が、こんな良い娘を嫁にするだなんて……羨ましいぞチクショウめ！　爆発して粉微塵になれリア充！」

「そこまで言うか……いやそれ以前に、俺達は嫁とかそんなんじゃ……」

「……違うのか、一夏？」

姫燐はその言葉に不安そうな声で、傷ついたような悲しんだような目をして、一夏を見上げる。そんな乙女のリーサルウェポンが直撃して、折れる事ができない男など、この世には存在しないだろう。

「う……まぁ……違わなくないけど……」

「だろぉ？　そんな一夏がオレは大好きだぜぇ～。ぐりぐり～」

「お、おいキリ！？」

瞬間、先ほどの表情が嘘のようにパァ、と姫燐の表情が明るくなり、姫燐はさらにきつく身体を密着させて擦り寄せてくる。というか先程の憂いの表情は、嘘のようにと言うか完全にタダの嘘なのだが、そんな所もまた彼女の魅力の1つだと理解している一夏は、別

段なにも言わずに彼女のスキンシップに身をゆだねる。
　が、腕越しに伝わるその発育したボディの柔らかさや、女の子独特のいい匂いは、確実に一夏の理性をガリガリと削って行くので、余り為すがままにさせる訳にはいかない。
　一夏は慌てて彼女を引き離すと、肩を掴みながら何とか説得を開始する。

「やめてキリ、それ以上いけない！」
「なんだよ、いいじゃねぇか。寮じゃこんくらい日常茶飯事なんだし」
「いや、確かに寮じゃそうだけどな？　でも、ここ一応人前だしそれにお前、手を出したら怒るだろ？」
「……ちっ、この前はマジになりそうだった癖に」

　実は一夏が姫燐と五反田食堂に訪れたのは初めてでは無く、このやり取りも初では無いのだが、そのときは一夏も完全に惚気きっており、弾の全力のツッコミが無ければここから先は完全にR指定になっていただろう。
　彼等の関係は恋人同士になってもさして変わらず、姫燐が全力でからかい、一夏はそんな彼女に振り回される。それが、少しだけ情熱的になっただけであった。

「そう何度も引っかかってたまるか。アレも冗談だった癖に」
「ま、そうなんだがな。もしお前がマジになったら、殴ってでもブレーキを掛けるつもりだったし。だけど……」

　姫燐は悪そうな笑みを浮かべると、ふっ、と背伸びして、一夏の耳元へ顔を近付け、決して他の奴には聞こえない位の小さな声でささやいた。

――部屋に帰ったら、そん時はオレもノンストップでイカせてもらうぜ？

「ッツッッ～～～～～！！？！？？？！？」

「なーんてな、けっけっけ」

その一言に耳までゆでダコ状態になった一夏を見て満足そうに頷くと、姫燐は彼の手を引っ張って席に座らせ、自分も心の底から楽しそうに笑いながらその反対側の席に座った。

「……」

2人の固有結界に完全に置いてけぼりにされた弾は、無言で彼等にメニューだけ渡すと、他の客から次に来るであろうオーダーに供え、キッチンへと戻る。

「「「「「すみません、この五反田食堂特製『お口の甘さ全滅激苦青汁』っての下さい」」」」」

彼等が来店すると、他の客が必ず僅かな殺意を込めて異口同音に注文する青汁を、自分も一気飲みした後、弾は皆に配って行った。

☆★☆

「……甘ったるいでござるな～、トーチちゃん」
「……嘔吐。口から砂糖が出そう」

皿洗いをサボり、置いてあった青汁を勝手に飲みながらホールを覗き見て、お互いの感想を述べるリューンとトーチ。

「つか、あのキリって人、気のせいか前の隊長にメチャクチャ似てるでござるが……」
「……大丈夫。このお話は１ミリも関係ない。因みに何で２人が夫婦かと言うと、一夏とキリのラブラブ状態が見たいってリクエストが多かったのでやった。五反田蘭を含め他の一夏に気がある娘達はラブの邪魔なので、悪いけどこのお話では消えてもらった。反省してるけど後悔はしていない」
「たまにトーチちゃんって、本気で意味の分からない事を言うでござるよね」
「……不明。何でこんなこと言うのか、自分でもびっくり」

不思議そうに首を捻るトーチ。合言葉は『番外編なのでしかたない』。
空っぽになったコップを流し台に置くと、もう一杯別のコップに青汁を注いで一気飲みしながら、リューンはキッチンの奥を見遣る。

「しかし、あっちもあっちで重傷でござるなぁ」

「なんで一夏ばっかりチクショウ一夏ばっかりいいなチクショウおれもいちゃいちゃしたいチクショウつっこみ役はもう疲れたチクショウ俺原作どころか本編でもじゃこんなキャラじゃないのにチクシ

ョウモブなのが悪いのかチクショウこれといった特徴が無いのが悪いのかコンチクショウ」

そこには、店の奥で壁によく分からない独り言を呪詛のように呟きながら、白い粉をキメた奴のような目をしてデコを一心不乱に壁に打ち付ける弾の姿があった。

「……痛い。色んな意味で見てて痛い」
「気持ちは分からんでもないでござるが……ん！」

その時、リューンの頭に電球が浮かび、ピロリンと音が鳴った。
……気がした。

「トーチちゃんトーチちゃん！　拙者にいい考えがあるでござる！」
「……却下。ダメ論外ゼッタイ異議あり汝罪あり死ぬがよい」
「そこまで！？　まだ拙者なにも言ってないでござるよ！」

その言葉の後に提案された作戦は、人事以外ではほぼ１００％成功しない事を知っているので、トーチは即座に彼女の言葉をぶった切る。

「いーやーでーごーざーる！　拙者の作戦を聞いて欲しいでござる！　聞いてくれないなら、これから毎晩トーチちゃんの枕に乾燥したイクラを詰め続けてやるでござーるー！！」
「……ちっ。屑が……」
「ござー……え、今何か言ったでござるか？」
「……別に。何も」

ゴロゴロと一昔前の駄々っ子のように寝転がりながら海産物に謝れと言いたくなる事をほざくリューン。このままでは鬱陶しいだけ

なのでトーチは渋々話を聞くことにした。舌打ちの1つくらいは許されていいだろう。

しゅば、と立ち上がるとリューンは悪事を思いついた三流悪役の様に表情を歪ませながら、作戦を説明し始めた。

「ふふふ、腰を抜かすなでござるよ……拙者が皿洗いをしている間に考えた作戦名！　名付けてッ！！」

「……作戦名？　名付けて？」

既に嫌な予感しかしない。そんな彼女の懸念を無視して、リューンは姫燐に負けず劣らずのバストを堂々と張って言った。

「『反旗の夜明けはここから！　五反田食堂乗っ取り大作戦ッ！！』でござる！」

「……はぁ？」

乗っ取る？　この五反田食堂を？

皿を洗い過ぎて、とうとう頭にまで洗剤が染みついてしまったのだろうか？　無表情ながら内心で本気でそんな心配をしながら、トーチはすかさず目の前の石鹸脳みそに質問する。

「……何で？　コツコツ働いて返すんじゃなかったの？」

「甘い、サッカリンより甘いでござるよトーチちゃん。明日に、未来に向けて足掻かない人間に、輝かしい夜明けは来ないのでござるよ……！」

「……愚考。下手に動いて泥沼に足を突っ込むよりマシ。それに、勝算はあるの？」

「当然でござるよ、まず最大の障害である弾殿はあの様子……」

とうとう壁に赤い染みができても、まだ水飲み鳥のように頭を打

ち付けるだけ簡単な作業を続けている弾。確かに、行動を開始するなら今が最適だろう。

「……でも。まだ弾くんのお父さんが」

「あ、それはさっき縛って袋に詰めて裏のゴミ捨て場にポイして来たから大丈夫でござる」

「……なん……だと……？」

もう既に決行してやがったコイツ。ナイフ以上にバカに与えてはいけない行動力というモノに、恐ろしいまでに恵まれている。どちらにせよ、トーチに選択権は無かったのだ。賽は投げられた、後は一天地六の賽の目次第。そこに『後退』という二文字の選択肢は、無い。

しかしここで、新たな疑問がトーチの頭に浮かびあがる。

「……質問。乗っ取った後はどうするの？」

「あと、でござるか？　そりゃあ無理やり借金を帳消しにして、オサラバするだけでござるけど？」

「……回りくどい。そんなことしなくても、さっさと借金なんか踏み倒して、今すぐここから逃げればいいだけ」

「……」

「……」

いつも通り不健康そうな顔のトーチと、目をパチクリさせたまま微動だにしないリューン。

無言、沈黙、静寂。２人の間に、そんな時間がどれだけか流れて、

「ああ！　その手があったでござるか！」

ぽん、と手のひらの上に握り拳を置いて驚くおバカに、トーチは

本気で帰ったら相棒を変えてと直談判しようか頭を悩ませる。
まぁ、何はともあれ方針は決まった。あとは行動に移すだけだ。

「そうと決まれば！」
「……直行。言われなくても、スタコラサッサだぜぃ」
「……おいィ？　お前ら、どこへ行こうというのかね？」

エプロンを投げ捨て、裏口へと輝かしい未来に向けて撤退を始めようと回れ右した2人の肩に、いつの間にか精神世界から帰って来ていた弾の手が乗っかっていた。
血が抜けて冷たいのに、それでいて力強く肩を掴む彼の手に、よくB級ホラーなどに出てくるゾンビってこんな感じなのかな？　とリューン達は現実逃避する。が、五反田弾からは逃げられないので戦わないと、現実と。

「あ、あー、弾殿？　これはその……別に逃げるとか、エスケープするとか、未来へ全力前進だとか、そんな気はハナから無いでござるよー？　拙者達ウソつかなーい」
「……心配無用。ワタシは嘘が大嫌いだから大丈夫、だけどリューンは息をするように嘘をつくから注意」
「なっ、トーチちゃん!?　仲間を売るでござるか!?」
「……真実。弾くーん、この人さっきこの店を乗っ」
「ぎゃーーーー！　ストップ、シャラップ!!　それ以上いけない!!」

逃げようとしていた時点で2人とも同罪だというのに、不毛な擦り付けあいを繰り広げるリューンとトーチ。そんなコントを繰り広げる2人を余所に、弾は無表情で新鮮なカツオと包丁を持って来て、まな板の上に置き、

「いいから、働け」

ズガン、ともの凄い音を立ててカツオの首を叩き落とした。

ありえない事だが、胴体から旅立ってまな板に転がるカツオヘッドの死んだ瞳が、リューン達に告げている様な気がした。

こうなりたくなかったら、余計な考えを捨てて大人しく言う事聞いた方が良いんじゃないかな？　と……。

「おーい、弾―。注文いいかー？」

「ん、ああー！　ちょっと待ってろー！」

弾はカツオを急いで片付けると、一夏達のオーダーを取りにホールへと戻っていく。

「お前達が働く意思を見せなければ、俺は貴様らをこのカツオ君のようにするだけだぁ……」

抱き合いながら歯を鳴らす、恐怖に喰われたバカ共にしっかりと釘を刺しながら。

★☆★

「五反田、このシャケ定食と……どうしたんだ、その頭？」

「ん、ああ。なんでもないよ、ちょっとケチャップが付いただけさ」

弾の頭に巻いたタオルから滲んでる赤い何かを不思議に思いながら、姫燐は注文を続ける。

「あとは、このうなぎ定食を1つ頼む」

「キリ、お前そんなに食べるのか？」

先ほどシャケ定食を頼んだばかりだというのに、事もなさげに追加でうなぎ定食も頼む姫燐。いつの間に彼女はフードファイトに目覚めたのだろうか？　これほどの量、男で食べ盛りの一夏でも流石に厳しいのに。

「あ、なに言ってんだよ。これはお前の分だぞ、一夏」

「はぁ！？　ちょ、待ってくれキリ！？」

勝手に自分のメニューまで決めている彼女に、慌てて一夏は静止を呼び掛ける。

高校生のお財布事情は、この店で一番高い定食を頼めるほど潤っていないのだ。

「安心しろ一夏。今日はオレのおごりだ、何も気にすんな」

「……なんか、お前の事だから裏が有りそうで素直に喜べないな」

「おお、よく分かったじゃねぇか」

一夏のげんなりとした視線などどこ吹く風か。澄まし顔でメニューを畳んで弾に返すと姫燐はちょいちょい、と人差し指をカムバックさせた。

顔を近付けろ、という事だろうか？

一夏が机に乗り出すように姫燐に顔を近付けると、彼女も同じように身体を乗り出して彼の耳元に、

――それなりの金は払ったんだ。帰ったら満足させてくれなきゃ、嫌だぜ？

消えそうで、甘く、とろけるような声色が、一夏の鼓膜を震わせた。うずまき管が脳に情報を送り、そして脳がやってきた情報を処理するために回転を始め、今までの経験や彼の中に詰まった情報を照らし合わせ送られて来た言葉の意味と意図を理ｋ……リカ……りり……、

ボンッ！！！

一夏のＯＳに、深刻なエラーが発生してしまった。

先ほどの言葉はどうやら、思春期絶賛営業中の彼にとっては、即死レベルのブラクラだったようだ。

「ったく、この程度でフリーズかよ。だらしねぇな」

そんな通常の3倍で真っ赤になっている一夏を見て、ニヤニヤが止まらない姫燐。

本当にいい性格をしている娘である。

そんな性格のせいで彼との本来在るべきだった関係はここまで歪んでしまったというのに、本人は一向に退かないし媚びないし顧みない。それどころか、どこか開き直って更に過激なスキンシップをするように悪化してしまった。

まぁ恋人関係になっても変わらず、姫燐は女の子にしょっちゅう浮気してナンパをするわ、以前にも増して平気で盗撮をするわ。そ

れに彼女の中には、今まで軽い気持ちで一夏の心というかボーイの本能を弄びすぎた責任を取っている部分も有るには有るのだが、

――――そんな所も、大好きだぜ。一夏。

その胸に秘めた本心は一夏にぞっこんなので、きっと問題無いないのだろう。

うっすらと顔を赤らめながら、必死にシステムを再起動している一番大好きな思い人を眺め、姫燐は幸せそうに微笑んだ。

☆★☆

「さて、状況を説明するでござる。トーチ軍曹」

「……最悪。どうしようもないでありますリューン3等兵」

「ちょっ！　いくらなんでもそれは低過ぎでござらんか拙者の階級!?」

相変わらず下らないコントをキッチンで繰り広げる、もういっそ芸人に転職したほうが良いんじゃないかと思えてくる2人。しかし、状況が最悪なのはシャレでもなんでもない。

シャケ定食と、うなぎ定食。弾が持って帰って来たオーダーは2つ。

しかし本来、そのオーダーを叶えるべき五反田食堂を支える大黒柱は、先走ったリューンのせいでゴミ捨て場に送られ不在。

適当に言い訳して、弾に作ってもらうという案も思いついたのだが、

「弾殿は戻ってくるなり、また頭を打ち付ける作業に戻ったでござるし……」

キッチンの奥で、またガガンガガンとさっきよりハイペースで痛い音が聞こえてくる。そろそろ救急車を呼ぶ準備をしといた方がいいだろうか？　白いのも黄色いのも両方。

かといってオーダーを無視したり逃げ出そうとすれば、直ぐに弾は自分達の背後に人間ワープをしてくるのだろう。まだ自分達はあのカツオの様にマミりたくないので、『投げ出す』という選択は最初からボツだ。

「……やっぱり。今からでも回収して謝るべき」

「そうでござるよなぁ……それしか無いでござるよなぁ……」

自分達の扱いは息子である弾に一任しているため彼の父親から説教を喰らった事は無いが、流石に今回は避けて通れないだろう。あの恐怖の説教魔の父……考えただけでも、耳がキンキンと耳鳴りしてしまう。

「はぁ……じゃあ、行って来るでござる」

「……達者で。いってらっしゃい」

背中を丸めてリューンはトボトボと裏口へと向かい、ドアノブを捻った所で、

「そういえば、トーチちゃん」

「……なに？」

「た・し・か・拙者の記憶が正しければチーム『1人』の失敗は、チーム『全員』の失敗でござったよねぇ？」

「……ッッ！？」

にへら、と思わずマザー・テレサでもドロップキックを叩きこみたくなるような笑みを張りつけながら、トーチの方へと振り向いた。

「……少し前。自分は過去を振り返らない女だって言ってたよね」
「人は、過去から学ぶ生き物なのでござるよ。トーチちゃん」
「……レッツゴー。脳外科か精神科」
「プクク……トーチちゃん、唇がピクついてるでござるよ。ド畜生でもいたでござるか？」

今すぐ、自分の足元の棚に収納されている文化包丁を取り出して、口元を押さえて笑う目の前のド畜生以下に跳びかかろうか迷うトーチ。

「へっへっへ、こうなりゃ死なば諸共でござる！　拙者は独りだと死んでしまう生き物なので一緒に仲良く説教地獄へ落ちましょうやー！！　ヘイヘイヘーイ！！！」
「……分かった。もっとお友達が多い所に送ってあげる」

迷いなんて、あるわけない。
トーチは即座に棚に手をかけると鈍く煌めく文化包丁を取り出して、半ばヤケクソ気味手を叩いて粗ぶる彼女の脳天目掛け、スローイングナイフと同じ要領で、

ゴガガガガガゴゴッゴ……ベキグチュバキベキボチュベキボキ……

音が聞こえた。無論、包丁が眉間に刺さった音では無い。と言うかまだ投げて無い。

どこか遠くで『大きな機械』が動き、そして何か硬い物と柔らかい物が……そう、例えば大きな『骨』と『肉』のような物が同時に潰されたような音が聞こえてきて……。

「……リューン。今日は、何ゴミの日、だっけ？」

「……確か……『生ゴミ』……でござ……る……」

弾の父親は、ゴミ捨て場に捨てられた。

口も身体も縛って気絶させて、外から見えないように黒いビニール袋に入れて、生ゴミを回収する日のゴミ捨て場に。

驚いた。まだ状況に悪化の余地があったとは。。

表情から血の気が引いて、一点に定まらないトーチの視線が、冷蔵庫に貼られたゴミ捨て場のスケジュール表に行く。そこには丁度今日、この時間にゴミ収集車がやって来る事が明確に記されており……。

「……ふむ、今回は拙者が６０％、トーチちゃんが４０」

「黙れ！　今回は１００％リューンが悪い！　ワタシは悪くないッ！！」

「ひっ！」

初めて見る冷静さの欠片も無く半狂乱で声を荒げて怒鳴る相棒に、リューンは軽い悲鳴を上げてしまう。血走った目と今にも飛んで来そうな包丁との追加効果も相まって、完全にキャラ崩壊を起こしている。

「お、落ち着くでござるよトーチちゃん！　拙者を仕留めても何も変わらないでござるよ！？　第２第３の拙者がいつか……」

「……そうでもない。少なくともワタシの気分は天晴れ」

「何してんだお前ら……？」

その騒がしさに、店の奥から弾が戻ってきた。……ただ、ノーメイクなのにそこら辺のB級パニックホラー映画に出て来そうな人相になっているが。

「おお、メシアよ！」
「……何でもない。すぐに終わる」
「そうも言ってられるかよ」

弾はトーチの手から包丁を奪うと、彼女の脳天に手慣れたように拳骨を叩き落とした。

「殺るのは構わんが、外で殺れ。んでウチの包丁を使うな」
「え、ちょ弾殿、アンタなに言って」
「……了解。次からはそうする」
「あと、仕事中に何して……ん？」

足元の違和感に、弾は視線を下におろすと、

「なんだ、スニーカーの靴紐が切れてやがる」
「え、あ、弾殿？」
「そういえば昔のマンガにあったよなー。仲間の1人の靴紐が切れたら、何か絶対に仲間が死ぬって奴」
「……だ、弾くん？」

2人の脳裏にそのマンガの、額に『米』と書かれたキャラが浮かぶ。

そう言えば彼も、主人公の親友ポジションだったような……。

「ま、現実にはそんなことある訳無いんだけどな」

「そ、そうでござるよなぁ！　あっはっはっは……」
「……あっはっはっは」
「ところで2人共、親父はどこ行ったんだ？　さっきから見ないんだが」
「そ、そういえば見ないでござるなぁー！　きっと、トイレにでも行ってるのではござらんか？」
「……ワタシにそう言ってたから、間違いない」

本当はもっと別の所に片道特急しているのだが、当然そんなことが言えるわけがない。

「ふーん。んじゃ、ちょっと靴代えてくる。あと、逃げるなんて思うなよ？」

最後に念を押すようにドスの利いた声を残し、弾は店の奥へと帰っていった。
冷汗が止まらない。今でさえこれなのに、あの事がバレた暁にはフェイタリティ程度で済むかどうかすら分からない。
弾の足音が完全に消えたのを確認した2人は、肩を組み、緊急会議の体制に入った。

（どうする！？　マジどうするでござるかトーチちゃん！？）
（……とりあえず、今は何とかして誤魔化すしかない）
（誤魔化す……って、何か手段があるでござるか？）
（……勝算はある。ようは、弾くんの親父さんが居るって思わせればいい）

緊急会議終了。
トーチは肩を解くと、再び別の包丁を棚から取り出した。

「ひっ！　結局ソレでござるかぁ！？」

ファイティングポーズを取るリューンを無視して、トーチはキッチンへと立つ。

流石にリューンも、彼女の目的が自分の刺殺ではなく、もっと別の所にあると悟った。

「……リューン。注文は何だっけ？」

「え、確かシャケ定食とうなぎ定食でござるけど……本当にやるつもりでござるか？　料理」

そう、トーチの勝算とは料理人である弾の父親の料理を自分達が作って、ちゃんと生きていることを一時的にでも錯覚させることだった。時間稼ぎにしかならないだろうが、それでもやらないよりはマシである。

「でも、拙者達。料理なんてレトルトとか、そんなんしかやったこと無いでござるよな？」

皿洗いも満足にできない自分達に、定食なんぞ作れるのだろうか？　トーチの方も料理が得意だなどと聞いた事がない。今溜まっている注文は、あのバカップルのだけなのは幸いだが、それでも2人前だ。

しかしそれでもトーチはすまし顔で、

「……何時から？」

「なに……」

「何時から、ワタシは料理ができないと錯覚していた？」

「……な、なん……だと……？」

初耳であった。コンビを組んでからもう結構が立つが、彼女にこんな特技が隠されていたとは。

「……後片付けが苦手なだけ。料理の腕にはちょっと自信がある」
「マジですか！　じゃあちゃちゃっとお願いするでござる、トーチ様！」

リューンのおだてに無言で頷くと、トーチは手慣れた手つきで食材を手にコンロに火を付けた。

★☆★

「……お待たせしました」
「お、ようやく来たか」

先にできたシャケ定食の乗ったお盆を手に、トーチは姫燐達のテーブルにお盆を置いた。

「あれ、君。新入り？」
「……はい。アルバイトです」

五反田一家を除けば、誰よりも五反田食堂に詳しい一夏でも初めて見るトーチの顔に、興味を持った一夏は彼女に声をかけた。

「ふぅん、弾の奴も隅に置けないな。こんな可愛い子をアルバイトに雇うだなんて」

「……か、かわいい？」

彼女連れだと言うのにタラシパワー全開である。

本当に無意識だというのだからタチが悪いが、一緒にデートしている女性からしてみれば失礼以外の何物でもない。一夏の足を踏むなり嫌味でも言って不機嫌になるのが定石なのだが……

「まったく、一夏の言うとおりだぜ。ところで、この後予定とか空いてるかな？　できれば一緒に買い物とかでも」

男とのデート中だというのに、一緒になって女の子を口説きだす姫燐も大概であった。

確かに一夏の事は大好きだが、美少女も大好きなのも一切変わらず。あわよくばそのあとお持ち帰りまでと、その腐った脳内で考えているのだから本物である。

だが、そんな最低な彼女だからこそ、この最低天然フラグ男と上手くいってるのだろう。

「……あ、ぅ……し、仕事が、ありますから……」

突然やってきた人生初のナンパに冷静な対処ができず、赤くなった顔を見られない様に俯きながら、トーチはそそくさとキッチンへと戻って行った。

「うーん、初心な娘ってのも悪くねぇなぁ」

「相変わらずだな。キリは」

彼女がデート中なのにナンパをおっ始めるのも、今となっては見慣れた光景なので一夏は笑って気にも留めない。本当に変なバカップルである。

「だってなぁ、あんな感じに真っ赤になって恥じらう娘って激萌えだろうが？」
「まぁ、確かに。でも、寮でのキリも丁度あんなか」
「わぁーーーーーーーーーー！！！！！　な、ななな、大衆でなに言い晒してんだこの大バカ野郎ふぁ！！？」

突如として戯けた事をカミングアウトしだした、ド大天然の口を大慌てで塞ぐ姫燐。

「む、むぐぐ、なに怒ってるんだよ、もちろんキリの方がもっとかわいぐぇぇぇぇ！」
「そこじゃねぇぇぇぇーーーー！！！　そういうこと言われると我慢できなくなるってんだこのアホがぁぁーーーーーーー！！！」

まだ毒電波を吐こうとする一夏の首根っこを持って、全力で頭をシェイキングして無理やり黙らせる姫燐。自分も相当に色々とカミングアウトしてるのだが、気にしたら負けと言うか爆発しそうなのでスルー。

「ぐふっ」
「ったく、バカ野郎が、バカバカバカ……」

一夏が三途の川へと短期旅行に出かけた事を確認して手を離すと、姫燐は怒りと羞恥と興奮で桃色吐息になった頭を冷やすように水を一気飲みし、テーブルに置かれた箸箱から割り箸をとりだした。

「ふん、さて……と……？」

気を取り直して割り箸を割り、シャケ定食へ舌鼓を打とうとした

手が、止まる。

「なんだ、これ……？」

今までナンパと一夏の口封じに躍起だったため、よく確認してなかったが、改めてじっくりと見て、いや、よく見なくてもこのシャケ定食、おかしい。

「いや、確かにシャケ定食だがな……？」

お盆の上に置かれていたのはご飯とお茶とシャケだけだった。味噌汁とか副菜が一切ないが、まぁ一応シャケ定食と名乗って許されるだろう。それ『だけ』なら。

そんな事が霞むくらいに、大問題なのは、

「なんで紅鮭が『丸ごと』のってんだよ！？」

お皿からはみ出るくらいに、ドドンと存在感抜群に乗せられた大きな紅鮭。申し訳程度に焼かれているが、だから何だと言うのか？

ただ焼かれただけの紅鮭をポンと出されて、「これがシャケ定食です」と言われて、それで納得できる人間がこの世界のどこに居るというのか？

シャケ定食を頼んだ覚えはあるが、タダの紅鮭を頼んだ覚えは無い姫燐は、立ちあがり厨房へ文句を言いに行こうと、

「……お待たせしました。うなぎ定食です」

「あぁ？」

したところで、先ほどの店員が、今度はうなぎ定食を持って来た。

「丁度いい、なんだこの紅鮭は」
「……すみません。クレームは後で」
「あ、こらテメッ！」

置く物だけ置くと、こちらのクレームを一切無視して、ダッシュで厨房へと逃げ込んで行ってしまった。

「なんなんだ……一体？」

姫燐は一夏ほど五反田食堂に詳しい訳ではないが、決してシャケを丸ごと出すような店では無い事だけは間違いなく言える。
その疑念を確信に変えるため、置いて行ったうなぎ定食を見遣った。

「見た目は……まだ許せるな」

うな重が1つだけ、ポツンと。
相変わらず副菜などは一切無いし、少し作り雑なような気がしたが、まだ許せるレベルだ。少なくとも定食では無いが。
ほかほかの白ご飯の上に乗せられた、ボリューム感たっぷりのうなぎのかば焼きに、上からいささか過剰なような気はするが、べったりと塗られた黒いタレが食欲をそそる。

「う、うーん……」
「ん、帰って来たか一夏」

姫燐が黄泉道から帰って来た一夏を一瞥しながら、うな重に怪しい所が無いかどうか慎重に目を凝らしていると、

「お、もう俺の奴来てたのか」

「あ、おい！　待てっ！」
「んじゃ、ゴチになるぜ姫燐。いただきます」
止めようとする姫燐の声を無視して、一夏は割り箸を割ってパクっと一口、うな重を食べてしまった。
もぐもぐと無言で口を動かす一夏。それを少しハラハラしながら見遣る姫燐。流石に毒物などは入って居ないだろうが、それでも前例が前例なだけに、懸念がどうにも収まらない。
「むぐむぐ……」
「……？」
しかし、笑顔で口を動かしている彼の姿を見ると、それも杞憂だったのだろうか。
口内のうな重を飲み込むと、一夏は水を手に取りそれを浴びるように一気飲みして、
ズガァン！
コップをテーブルに叩きつけた。
まるで撃鉄が雷管を叩きつけた様な、凄まじい音が店内に響く。
コップは粉々に砕け散り、持っていた一夏の手の平にも無数の破片が刺さって、痛々しい鮮血が流れているが……
「い、一夏……？」
「ん、どうしたんだよキリ？　俺の顔に何か付いてるか？」
その当の本人は、不気味なまでに涼しげな笑顔を浮かべていた。
本人のイケメン具合も相まって、まるで雑誌のトップを飾る二枚目アイドルような風貌をかもし出しているが、姫燐にはそれが感情

を完全に押し殺しきった、般若面のように見えてしかたがない。

「だ、大丈夫か……？　その、手とか、他にも色々」

「ん、ああ、ゴメン。水、かからなかったかキリ？」

そこじゃない、そこじゃないんだ一夏さん。

「なぁキリ。悪いガ、先に寮ニ帰っててクれるカ？」

「お、おい一夏？　お前なに言って」

「本当にスマン。だケど俺はチょっと、弾とオ話するコトが出来ちマった。食材ヲ侮辱シた罪ヲ贖罪サセナクくハ」

どこか危うい発音と共に採光が消えた瞳で立ち上がり、キッチンへと向かう一夏。

怒ってる。それも、今まで見たことが無い程に怒ってらっしゃる。

普段キレない奴がキレると、無茶苦茶怖いというのはどうやら真実であったらしい。

姫燐は思い出す。普段はどこか抜けているし、ヘタレで天然ジゴロな一夏だが、その姓は織斑。そう、彼はあの人類最強のブリュンヒルデと同じ血を分けた姉弟。

そして今、彼の中で眠っていた織斑の、阿修羅すら凌駕する戦闘民族の血が覚醒を迎えているのだ。

クリ○ンが死んだわけでも無いのにいったい、何が彼の織斑の血を……いや、原因は分かってる。

（あのうな重、何が入ってたんだよ……！？）

一夏は料理が上手い。

姫燐もご馳走になったことがあるが、その手腕は下手な食堂とかで食べるよりもよっぽど美味であった。ＩＳ操縦者になるよりも、

コックとか家政婦のほうが絶対にコイツに向いていると断言できる程に。

そして彼は、絶対に食材を無駄にするようなことはしない。この前も、普段は捨てる様な余った部位を、一級品の料理に生まれ変わらせた時は惚れ惚れしたものだ。

本人に理由を尋ねたところ、「ただの貧乏性だ」と笑っていたが、貧乏だった過去のことも関係しているのだろう。一夏が食材に、人一倍の敬意と感謝を持って接していることがよく分かる一時だった。

だからと言って、ここまで怒り狂うとは完全に予想外だったが。

「待て待て！　落ち着け、れれれ冷静になれ！」

「贖罪か断罪か贖罪か断罪か食材か洗剤か贖罪か断罪か贖罪か断罪か贖罪か断罪か」

完全にぶっ壊れた一夏の服を掴んで静止させようと努力するが、ヤミノナカオリムラノイチニメザメルイチカのパワーの前には敵わず、ずるずると引きずられてしまう。

彼女の努力も虚しく、一夏はキッチンへと続くのれんをくぐり、

「あのうな重を作ったのは誰だあっ！？」

どっかの雄山のような雄たけびを上げた。

キッチンを潜った先に居たのは、本来居るはずの弾でもその父親でもなく、

「あ・れ・ほ・ど・余計な事はするなと言った！」

激怒に目を血走らせ、歯を剥き出しにして包丁を手に暴れ回る先ほどのロリウェイターと、

「ギャーー―!!!　お、お許しを!　次こそは必ず!　必ずや!」

真剣白刃取りでその包丁を受けとめながら、毎週正義の味方にやられては許しを請う悪役の様にあやまる、見知らぬ女性の姿だった。

「黙れ、少しでも反省する気があるならここで死ね!　死んでワタシに害を及ぼさない生物に生まれ変われ!」

「そんなつもりは無いでござる!　せ、拙者はただ、トーチちゃんが運びに行ったから代わりに仕上げを……」

「だ・か・ら、醤油をぶちまけたのか!?」

「醤油ではないでござる。無かったから、偶々あったそこの黒いのを代用に……」

そう言って、首を調理台の上に置かれたビンへと首を向けるリューン。

そこのラベルに書かれたのは、

「黒酢じゃねぇか、アレ……」

確かに黒いのは黒いが、後の共通点は液体であること位である。

黒酢をかけたうな重が美味な訳が無い。一夏がキレた理由もよく分かる。

「大体トーチちゃんもトーチちゃんでござる!　なんでござるか、自信満々に料理が出来ないといつから錯覚していた（キリッ）とか言っときながら、やったのは紅鮭を焼いて乗せただけではござらんか!　うな重も冷凍の切り身乗せただけでござるし!」

「大丈夫。大抵のモノは焼いたら食べれるから問題ない」

果たして、それを調理と言っていいのだろうか?

頭が悪すぎる見慣れぬ少女たちのコントに、姫燐がどうしたものかと頭を悩ませていると、

「おい、お前ら」

「あ、なんでござ……る……？」

一夏の底冷えする様な一声に、ようやく彼等の存在に気が付いたのか、トーチとリューンは彼等の方を向くと、一瞬の硬直の後、お互いに顔を合わせアイコンタクトで同時に頷く。

そしてトーチはリューンの背後に回ると首筋に手を回し、包丁を動脈に突き付ける。

そう、あのよく銀行強盗とか、追い詰められた殺人犯がよくするあのポーズである。

「あーれー！　お助けでござるー！」

「……動くなー。人質がどうなってもいいのかー？」

心の底からどうでもいい。

姫燐はズッコケるのを我慢しながら、偏頭痛がし始めた頭を手の平で押さえるのが精一杯だった。

身長に差があるせいで背伸びをしないと届かないのか、犯人役は生まれたての小鹿の様にプルプルしてるとか、人質役マジで誰だよとか、つかさっきお前ら仲良くケンカしてたよなとか、突っ込み所が多すぎる。

流石の一夏も、これにはポカンとするしかないようだった。

「……ふははー。道を開けろー、早くしないとこの娘が傷モノになるぞー」

「いやー、お助けー、ってトーチちゃん？　あの、マジでちょっと刺さってるんでござるけど……？」

本当にどうしようか？

余りにシュールな光景に、姫燐と一夏は顔を見合わせて首を傾げ合うしかなかった。

そしてチャンス到来とばかりに彼女達は裏口までチョコチョコと後ろ歩きし、外へ出ようと後ろ手でドアを開け自由への逃走を始めようとした。

「……待て、どこへ行く？」

だが、彼女達は失念していた。

「誰が、何時、どこで何時何分何秒何周期」

敗因はシンプル。自分達に立ち塞がる障害は、１つでは無かった事を忘れていたこと。

「仕事を、終えていい。と言ったんだ？　この虚弱貧弱無知無能アルバイト共が」

「ご、五反田……」

「……だ、弾くん」

自分達が繋がれた鎖を握る飼い主を、五反田弾の存在を……すっぱりと忘れていたことだった。

「さて、どんなお仕置きがいいんだ？　貼り付け？　石座布団？　逆さ釣り？　何でもいいぜ？」

「あわ、あわわわ……」

「……オ、オワタ」

営業スマイルを浮かべながら、手をバキボキと鳴らしてゆっくりと怯える彼女達に近付いて行く。今頃、弾の脳内では2人共、見るもおぞましい拷問にかけられているのだろうか。

「お仕置き……美少女2人を……マジで……？」
「き、キリ……？」

そんな光景を見て、あふれ出る鼻血を押さえながらハァハァする姫燐。今頃、彼女の脳内では2人共、弾の手によって見るもR―18な拷問にかけられているのだろうか。自重しろ。

「弾！　今すぐオレと交代しろ！　そのヘブンにオレを導いてくれ！！！」
「姫燐ちゃん、なに言ってんの……？」
「大丈夫だ！　ちゃんと首輪は専門の所に行って買ってくるから！　アンタのペットの首筋がかぶれる心配はない！」
「キリさーーーーん！？　お願いだから帰って来て！」

本当に何言ってんだろうか、この本編主人公は。
全開で全壊な姫燐に、ドン引きする男子組。その弾達にとっては致命的な隙を、自分達にとっては千載一遇のチャンスを見逃す2人ではなかった。

「ふっふっふ、残念でござったな。弾殿」
「なっ、お前ら何して……ッ！？」

弾の首筋に、冷たい感触が走る。
いつの間にか包丁はリューンの手に渡っており、そして先ほど自分がされていたのと全く同じポーズを弾相手にしかけていた。

「なっ、弾!?」
「……動くな。動くと弾くんの命は保証できなくなる」
「くっ、テメェら……！」

トーチの一言に、飛びかかろうとしていた一夏と姫燐の足が止まる。
姫燐は心の中で己の失態を嘆く。いくらアホそうでも、コイツ等は不審者。このご時世に店に不審者が乗り込んできたなら、やる事なんぞ容易に想像が付くというのに完全に後手に回ってしまった。

「……これは何のマネだ？　アルバイト共？」
「弾殿、確か最初に言ったでござるよな？　拙者達はエージェントだと」
「だから、何だってんだ？」
「……明確。エージェントは、状況の打開に一番確実な手を選ぶ」
「残念ながら、そこに人道とかそういう甘いのは、お払い箱なんでござるよ」

耳元で、聞いた事が無い冷酷な声色でささやく。
弾は思い知る。今まで自分が全て知っていた気になっていたのは、彼女達の上っ面だけだという事に。その真実の裏側に、自分は一度も踏み込んだ事がなかったことに。

「さーてと、それじゃあ未来への撤退の続きと参るでござるか」
「……了解」

ずるずると弾を引きずりながら、裏口へと向かう2人を、一夏達はもどかしさを感じながらも見送る事しかできない。鎮圧そのものならＩＳを使えばあっという間だろう。しかし今下手に動いてしまえば、弾の身が危ない。

「クソッ、あいつ等！」
「焦るな一夏、まだチャンスはある。だからまだ……！」
口では彼女も平静を装いつつも、額から焦りの汗がにじんでいる。
「それでは、もう会う事も無いでしょうでござる」
「……アデュー」
別れの言葉を呟きながらトーチは裏口のドアノブを捻り、ドアを押してとうとう自由な外の世界へと……
――タンタタン♪　タタタタンタタン♪　タタタ、タタタンタタタンタタタンタタタンタ、タ、タ、タタン♪
旅立とうとした途端、謎の軽快なＢＧＭが店内に響き渡った。何だか、おい肉焼いてんだから蹴るなよとか、何で３ｒｄでは生肉が売って無いんだとか、そんな感情が湧きおこるテーマだ。
余りに唐突で前フリが無い不意の一撃に、ピタッと全員の時が止まる。
「……何だ、今の？」
「誰かの着メロか……？」
――……ウルトラ上手に、焼けピッ、
「……もしもし」

少し鬱陶しげにポケットから、携帯電話を取りしたトーチ。
どうやら、彼女の着メロだったようだ。

「あ、はい……何でしょうか、ボス」
（ボス……ってことは奴等の元締めか？　組織的なグループってことか）

姫燐の手のひらが嫌でも汗でにじむ。
態度こそふざけてはいるモノのこのロリっ娘、電話しているというのに一分の隙も見せない。そんな奴等の元締め……中々に出来る奴のようだ。

（何でこんな奴等が五反田食堂に？　いったい、どこの組織なんだ……？）

これで彼女達が『酢豚の中のパイナップル推奨委員会』のエージェントだと知ってしまったら、姫燐の精神衛生上とてもよくない事が起こってしまうだろう。Ｌ５的な感じに。

「はい……はい、申し訳ありません。今すぐそちらに戻りま……え？」

淡々と応答をしていたトーチの表情が固まった。
何と言うか、全クリしたと思ったら「ご苦労だった……と言いたいところだが、君達には消えてもらう」と言われた時のような驚愕と茫然が支配している時の顔である。

「え、トーチちゃん？　ボスは何て言ってるでござるか？」
「……ボスが話したいこと……あるって……」

トーチはギギギ、と油の切れた機械のような動きで携帯をリューンの耳に当てる。
そのボスとやらの声が、弾の耳にも微かだが聞こえてくる。

「あ、もしもしボス？　今から帰るんでお土産は」
『もしもしリューンちゃーん？　君達クビだから♪』
「……はぁ！？」

般若のようなＣＶで、彼女達のボスはいきなり死刑宣告を言い渡した。

『簡単に言うと、もういらないからそこら辺で野垂れ死んでねってことなのだよ～』
「ちょ、ちょ待って下さいでござる！　拙者達のどこに落ち度が！？」
『今まで落ち度が無いと思ってた方が、天才の私でもビックリ』

その点については、たった数日間だけ上司になった弾でも、嫌というほど同意できる。

『最近不況の波がウチにまで来ててね～、それでいらない産廃を切ろうかな～って♪』
「産廃扱い！？　つーかあんたこの前、ＩＳに全自動たまご割り機つけるオプションパーツで思いっきり儲けてたでしょ！」
「誰が買うんだよ、んなもん……」
「……ごめん、弾」
「一夏！！？」

居た堪れない表情で俯く、とても身近な所にいた購入者。
彼女である姫燐も知らなかったのか、狼狽を隠せてない。

『とにかくもう君たちはクビだから、これからの就活がんばってね～♪』

「おんどりゃ！　待てこのクソ般に……ゃ……ぁ……」

ツーツーツー、と無機質な音しか鳴らなくなった携帯をトーチが仕舞うと同時に、リューンは弾を解放した。

「弾！　大丈夫か！？」

「ああ、俺は大丈夫だ……」

が、明らかに大丈夫な様子では無い元エージェント、現無職が2人。

「は、ハはっ……無職……ニート……ハロワ生活……」

「ワタシ達帰れる所ない……こんなに悲しい事はない……」

茫然自失で棒立ちして、うわ言を呟く2人に、呆れるしかなかった姫燐も、怒っていた一夏もなんだか同情的な気分になってくる。

しかし、そんな事もお構いなしな被害者が一人居た。

「おい、アホ共」

「……へ、うごッ」

「……痛ッッ」

弾は、2人の首元を掴んで締め上げる。その双眸は、確かな怒りで揺れていた。

「だ、弾、女の子相手にやりすぎじゃあ……」

「そうだぜ五反田。気持ちは分かるが、互いに落ち着いてからでも」

「バカップルは黙ってろ。これは五反田食堂の問題だ」

2人の意見にも馬念通風で、更に首元を締め上げる弾。

「さて、お前ら。覚悟はいいだろうな？」

「「……」」

2人共目を閉じ、やって来るであろう運命をただ受け入れる姿勢に入る。

処遇はよくボコボコの後にブタ箱、悪くてデッドエンドであろう。

しかし、それも案外悪くないかもしれない。行き場所も帰る場所も失った以上、自分達は言わば迷い子なのだから。彼が行き道なり、逝き道なり示してくれるなら、寧ろ感謝して然るべきだ。

腹を括った2人を交互に見遣りため息を1つつくと、弾は、叫んだ。

「こんのバッカ共がッ！！！　アルバイトは延長だ、今日から一生ウチでタダ働きでこき使ってやる！！！　わかったな！！？」

「……え、弾殿？」

「……それって、わっ」

言うだけ言うと2人を離し、流し台から石鹸とスポンジを持って来て、

「ほれ、今までサボってた分さっさと働け！」

それぞれ、リューンとトーチに投げ寄こした。

「え、え、え？」
「……理解不能。なんで？」

戸惑う2人を余所に、弾はテキパキと溜まっていた仕事を片付けながら口を開く。

「最初はしばいて海にコンクリ詰めにしようかと思ったが、それよりもウチで無給でタダ働きさせたほうが効率的で生産的だって気付いただけだ。拒否権なんざ、当然ないぞ」
「で、でも拙者達……弾殿のお父上を……その……」
「……まさかとは思うが、アレもお前達がやったのか？」

そう言うと、弾は親指をキッチンの一角へと向けた。
そこには、

「！？？！？！？？」
「……お、オバケ、幽霊怨霊自縛霊ッ！！？」

元気に調理に勤しむ、弾の父親の姿が！

「お、おじさんいつのま間に……！？」
「ご、五反田の親父さん、さっきまで居なかったよな！？」
「な、なんで！？　どうして生きてるんござるか！？」

死んだはずの存在が目の前に現れるだなんて、チープだが実際に起きてしまえば、心臓が弱い人なら即停止しかねないイベントに驚きを隠せない。

「さっき、ゴミ捨て場から変な音がしたから行ってみれば、黒いビニール袋が回収不可のシールを張られて捨ててあったんだ。デカイ

し重いし、何を詰め込んだのかと確認してみれば、親父が入ってた……何を言ってるか分かんねーかも知れんが、俺も意味が分からなかった」

最近は、市が指定したビニール袋しか回収してもらえない事が、ここに来て思わぬ幸運を呼び込んでいた。

「じ、じゃあ、拙者達」
「……ここに、居ていいの？」
「何度も言わせるな、無駄口叩く暇があるならとっとと仕事しろ」
「っッ……弾殿ぉぉ！」
「……一生ついてく」
「う、うっとおしい！　離れろお前ら！」

後ろから2人に抱きつかれて、思いっきり慌てふためく思春期。見ていて微笑ましくなってくる。

「これにて一件落着、でいいのかな、キリ？」
「ん～、いいんじゃねぇの？」

涙を浮かべながら弾に激しく抱きつくリューンと、安らかな笑顔を浮かべて静かに抱きつくトーチ。口ではウザがりながらも、赤くなりながら満更でもなさそうな顔をしている弾。

「本人達が幸せならそれで、さ」
「ああ、そうだな」
「ところで一夏、」
「どうした、キリ？」
「んっ」

ぎゅ、とキリも情熱的に一夏に抱きつくと、そしてその唇に、ふっ、と軽いキスをした。

「なっ、なななな！　キ、キリ！？　なんで、ここじゃあいくら何でも」

「いやな、アイツ等見てたらな、オレもそろそろ我慢が限界になって来てな、ははははのはー」

口では笑っているが、目は一切笑っておらず、一言で言うなら彼女の瞳は今、獲物を狙う狩人のソレそのものであった。

「な、ええやろ？　ほんまええやろ？」

「キ、キリちょま、シャレになってな」

「大丈夫大丈夫、死角になる場所なら知ってるから、な？」

「いや『な？』じゃなくてあ、待って、だれか、弾助けアッーーー！」

……その後、キッチンの隅で掃除をしていたトーチが『白くべたつくなにか』を見つけ、弾にそれの正体を訪ね、また一悶着起こってしまうのは、ここではちょっと語れない余談である。

☆
★
☆

五反田食堂には、２人の住み込みのタダ働きがいる。

「トーチちゃーん、椅子は全部下ろしたでござるかー？」

「……完璧。開店準備に抜かりは無い」

そしてそれを監督する、五反田家の長男。五反田弾。

「ふん、ようやく仕事を覚えて来たじゃないか」

「ふふん、拙者達は一分一秒、そしてこの瞬間にも成長してるでござるよ」

「……だからこそ言える。今のワタシ達は、昨日のワタシ達より、もっともっと優秀」

「へぇへぇ、御託はいいから……開けるぞ、準備はいいな？」

「無問題、でござる！」

「……バッチ来い」

そうして、ドアのカギを開くと、さっそくやってきたお客を、弾達は笑顔で迎えた。

『いらっしゃい！　五反田食堂へようこそ！』

## 番外編　「ｉｆストーリー　『五反田食堂へようこそ！』」（後書き）

ーーー後書きという名の言い訳。
これが作者の全力全壊！　……はい、どうもクラふぉうです。
いきなり本編とは一切関係ない事なんですが、最近、遊戯王を久しぶりに始めたんですよ。
そこで友人にスリーブを買った方がいいと言われたので、せっかくだからＩＳの奴を買おうとショップへ行ったら、どいつもこいつも下手なレアカードよりも遥かに高く（シャルにいたっては５０００円。アホか）、他にめぼしい物が無かったため、適当に店にあったキャラスリーブ福引をやったんですよ。そしたら、何と、

酢豚ちゃんが当たりました。

次回は数少ない自分のメイン回だから、自分をもっと活躍させろ。という遠まわしの交渉なのでしょうかコレは。そしてこのスリーブを使い始めた途端、歴戦のガチ勢である友人にマッチ戦で勝ったのは偶然なのでしょうか？
そして何よりも、

次の日、祖母が八宝菜に、「八宝菜の元」と「酢豚の元」を入れ間違えたのも、本当にタダの偶然なのでしょうか？

うすら寒いものを本気で感じました。
今日も作者のカラクリデッキは、鈴の何か含みがあるようにしか見えなくなってしまったスマイルに守られてます。

余談終了。
さて、今回のお話はアルカディアの百人目様のアイデア。「リュー

ンとトーチが五反田食堂で働かされることになったら？」というアイデアから来ました。
採用されなかった方々には非常に申し訳ありませんが、それでも作者は全てに目を通して、そして全てを頭の中で転がしてニヤニヤしてたので許し……はい、キモイだけですね。ごめんなさい。
しばらくは本編を続けますが、もし次回があったらその時はまた是非ともお願いします。

ちなみに本編ではどう見てもありがとうございましたですが、作者の頭の中では、今回登場したｉｆ姫燐とｉｆ一夏は「まだ」です。
理由は、お互いにその気はあるのに２人とも、攻撃性能が異常に高いのに、受けが致命的に弱過ぎてヘタレるズガイトスみたいな子たちだから、その気になって攻めても、「え、あ、ふふぉあ！？」と顔を真っ赤にして逃げ出してしまうという状態だからです。
え、じゃあ最後の「白くべたつくなにか」は何なんだ？　って？
嫌ですねぇ、「白くべたつくなにか」って言ったら、おまっ、武器に魔法効果を付属する消耗品のアレに決まってるじゃないですかー。
それ以上でもそれ以下でも無いですよアンバサー。……真相は、お任せします。

さて、どうでもいいことをつらつらと書いてきましたが、本題はここから。
今回、楽しみにしていた皆様を一カ月近くもお待たせする結果となってしまい、非常に土下座ものです。
そこでまたアンケートを取りたいのですが、皆様は今までのままでロングで一気にがいいか、小出しで短くてもいいからとにかく読みたいか、どちらの方が好みでしょうか？
それによって、今後の方針を変えていきたいと思っています。
お手数をおかけしますが、何とぞよろしくお願いします。

あと、近日中に投稿用のオリジナル小説を試しに上げたいと思ってますので、お暇であればどうぞ。

それではまた次回、今度は本編でお会いしましょう。アンバサ。

## 第８－１話　「箒の顛末と、一夏の末路」

夜、ＩＳ学園寮の一室に無機質なタイピング音が響く。
明りが消えた部屋で、怪しく光を放つディスプレイ。時折聞こえる、マウスをクリックする時のカチカチ、といった独特のプッシュ音。カリカリ、と高速で雪崩れ込む情報を素早く処理していくハードディスク。
そのパソコンの持ち主、朴月姫燐は一心不乱に机へと向かっていた。
少し疲労が浮かんでいる双眸は右から左への往復のみを繰り返し、眠気対策のために入れておいたホットコーヒーはすっかり冷めてしまっている。

――――今日までに、仕上げなきゃな。

授業が終わり、友人たちに別れを告げた後、姫燐は夕食すらとらずにずっとパソコンの前にかじり付いていた。理由は簡単、必ず出さなければならない『報告書』の期日が目前まで迫っていたからだ。
面倒とはいえ、ミッションを円滑に進める為の必須作業だ。
怠っていざという時に「情報不足でした。お許しください」。では、済まされない。
それほどまでに、このミッションの重要性は大きいのだ。

「……次」

１つの作業が終わり、また別の、今度は第三アリーナのデータを打ち込んでいく。
広さ、詳細構造、監視カメラ、出入り口の数、緊急時のセキュリティ、脱出ルートｅｔｃ……

セシリアとの戦いや、一夏との訓練ついでに集めたデータを頭の中でまとめ、無表情でキーボードを弾いていく。

「ふぅ……」

そしてそれが一段落ついたところで、ようやく姫燐は背もたれに背中を預けると、完全に冷めきったコーヒーを飲んで、気分転換の一息をついた。

我ながら、あくどい事をしている。

クックック……と笑いをかみ殺し、彼女はディスプレイに映る、完成した第三アリーナの詳細なデータを改めて見直す。

これなら、滞り無くミッションは成功するだろう。

自惚れではない。何度頭の中でシュミレートしても結果は常に同じ。不測の事態も考えられない訳ではないが、それでも彼女達ならきっと上手くやってくれるはずだ。

「パーフェクト……完璧、だな」

あとは、コイツを本部へと送信するだけなのだが、別にこのコーヒーを飲み終わる位のロスがあっても誰も文句は、

――――コンコン

「姫燐……居るか？」

「ッ！！？」

背後から響いた第三者の声とノック。一夏では無い、女性の声だ。

そして、自分のことを『姫燐』と呼ぶ人間は、この学園に1人しかいない。

「んー箒かー？　すまーん、ちょっと待ってくれー」

「あ、ああ……」

焦りを殺し、平常通りの声を出したつもりだったが、問題無かっただろうか。

激しく警鐘を鳴らす心臓を無理やり黙らせ、驚いた衝撃で少しこぼしてしまったコーヒーを忌々しげに机の上に戻し、マウスをいじってデータを保存。そして、ウィンドウを閉じる。これで、問題無い。大丈夫だ。

姫燐は立ち上がるとドアのカギを開け、突如やって来た来客を出迎えた。

「どうしたんだ、こんな時間に珍しい」

「少し……話したい事があってな……」

「話したいこと？」

こんな時間になんだ、と一瞬思案するが、彼女が自分に相談しそうな事と、赤くなった――おそらく、先ほどまで泣いていたのであろう眼が、姫燐に大体の察しをつかせた。

「まーた一夏と何かあったのか」

「っ！？　な、な、な！？」

「わっかりやすい奴だなぁホント。とりあえず入れよ、誰かに聞かれちゃ嫌だろ？」

エスパーでも見る様な視線で自分を見る彼女に、姫燐は呆れのため息を付きながら箒を部屋に上げた。

箒にはベッドに座るように言い、向い合う形で姫燐は先ほどまで座っていた机の椅子に座る。

「で、今度は何があったんだ？」

一昨日、あのショッピングモールで起こした事件のあと、トレーニングも姫燐が監修を入れることで、以前より遥かに現実的なモノに改善されたし、襲撃のことも後で箒から聞いたのだが、何も言わずにサボった自分にも非があったため、一夏はあっさりと彼女を許したそうなのだ。

これにて一件落着……な筈なのに、昨日の今日でなんでまたこじれるのだろうか？

ギャルゲーでもこんなに短期間にトラブルは続かねぇよ、と心の中で呆れながらを付きながら、姫燐は箒の話を聞く。

「実は……だな、その……むぅ……」

あまり他人に、自分の心情を語ることに慣れていないのだろう。顔を赤くして、自分の気持ちをどう言葉にすればいいのか考えあぐねて、じっくり1分ちょい。

まだ時間がかかりそうだな。と、姫燐は残ったコーヒーを一気に口に含み、

「今日……だな、一夏に告白したのだが……」

「ブフゥッ！」

全部、壮大に噴射した。

「ま、まーた、ずいぶんと思いきったな……」

「やっ、やれと言ったのは姫燐の方ではないか！？」

「……あ」

そういえば、そんな事をノリと勢いで口走った記憶が薄らと。

しかし、どうやら彼女の一生一代の大勝負は、パッピーエンドに

は終わらなかったらしい。
もしここで箒の告白が成功しているなら、彼女の眼が赤く腫れることは無いし、実は成功した嬉し涙でした。というオチがありえないのも、その沈み切った表情から推して知るべしだろう。

「まぁ……オレはそんな経験が無いからなんて言えば良いか分かんねーけど……いい男ってのも一夏だけじゃないんだ。そう落ち込みなさんなって。それに少し視野を広げれば同せ……」
「い、いや、決してふられた訳じゃないんだ。ふられた訳じゃ……」
「……ふられたんじゃない？」

はて、どうにも腑に落ちない。
姫燐が知っている告白というイベントには、結ばれるか、ふられるかの2種類しか結末が無い。
――まさか、逃げられた？
いや、箒のベン・ジョンソンな脚力なら、いざとなれば無理やりにでも一夏を取り押さえることができるはずだ。それに姫燐の記憶では、アイツはそこまで救いようが無いヘタレではなかった様に思える。

「じゃあ、どうしたってんだよ？」
「……なぁ、姫燐」
「ん？」

箒は俯きながら胸に手を置くと、一度息を大きく吸って、吐いて。
そうして顔を上げ、熱っぽく、それでいて憂いを秘めた表情で口を開き、言葉を紡いだ。

「……篠ノ之箒は……あなたのことが、大好きです」

その呪詛は姫燐の耳から侵入し、彼女の脳へと到達すると、一瞬にして身体を制御する全神経を犯した。
理解不能、解読不能、規律不能。
五体に一切の力が入らず、椅子から転げ落ち、思いっきりフローリングの床に顔面を打ちつける。興奮と強打でボタボタと紅い雫が鼻から滴るが、それを意にも関せず姫燐は何とか立ち上がろうと四つん這いになり、ふと途中で先ほどの言葉をリフレインさせて、
「我が一生に一片の悔いなしッ……！」
そのまま紅いアーチを作って、仰向けに倒れた。
「き、姫燐!?　どうした、姫燐!?」
「へ、へへっ、わ、悪いな箒。どうやら、オレはここまでらしい……」
「な、何が!?　何がここまでなのだ姫燐!?」
「この姫燐、天に帰るのに人の手は借りぬ……」
「姫燐、まて逝くな！　きりぃぃぃぃん!!!」
そうして意識を手放した姫燐の寝顔は、大業をやり遂げた漢の顔だったと、後の世は語ったという。……訳もなく１０分後。
「と、いう夢を見たんだ」
「いや、夢ではないぞ……」
ベッドに寝かされた姫燐が意識を取り戻した直後、今までのことを全て夢で片付けようとした彼女に、即座に箒のツッコミが入る。

「ふぅ……悪いな箒、いやマイワイフ」
「……本当に大丈夫か、色々と」

若干、本気で引かれているのにも気付かずに、まだ頭の悪さが止まらない姫燐。

「いやいやだってねようやく緻密に練って来たけど半分以上諦めかけてたフラグを回収できたんだよ？　この喜びを何に例えようか例えば3本買って来たアイスが全部当たりだった時と例えようかアレしょぼくね？　と君は思うかもしれないが以外とこういう小さな喜びから人類は宇宙にエントロピーを」
「さっきの言葉を！！　今日、私は一夏に言ったんだ！！！」
「……へ？」

いい加減に苛立ちが募った結果、思わず大声で姫燐の電波を無理やり遮ってしまう箒。

「……ああ、そうだよな……そんなこったろうとは思ってたんだけどな……」

言葉の冷水をぶっかけられ、ベッドに俯けに沈む姫燐。
ブツブツと枕に小言をぶつける彼女に、箒は傷付けてしまったのだろうかと、人付き合いに慣れない自分を恨むが、完全に杞憂である。その証拠に、次の瞬間にはもうケロッとした様子で、

「で、さっきの言葉を言ったんだよな。一夏の奴に」
「そ、そうだ……確かに言ったんだ。だが……」
「まさか、あのバカ。『ああ、俺も好きだぜ箒。俺達、最高の幼馴染だよな！』とか、ほざいたんじゃ……ああ」

なんで知っているのだ。と口よりも雄弁に語る箒の表情に、全ての合点がいった。

些細な違いはあれど、どうせ似たような事を言ったのだろうあの大馬鹿は。

この前のデートで少しはマシになったと思っていたが、箒へのこの仕打ちを見るとなぜか以前よりも酷くなったようにすら思えてくる。

あれだけのど真ん中直球ストレートで決めても討ち取れないとくれば、実はあの男は自分と同類で、同性にしか興味が無いのかとすら錯覚してしまう。

「なぁ、姫燐、教えてくれ。私は、これ以上どうすればいいのだ……？」

涙を浮かべて、姫燐に答えを問う箒。

ハッキリ言って姫燐の方がその答えを聞きたい位だが、まだ具体案が思いつかない以上、下手な助言はできない。しかし、今すぐにやらなくてはいけないことだけはハッキリしている。

姫燐はゆっくりと立ち上がると、

「なぁ箒、オレはハッキリ言って男との恋愛経験は無いから、ここまでどうしようも無い奴の振り向かせ方は分からない。けど、また考えておくから今日はここに泊っていきな。アイツと顔合わせ辛いだろ？」

おもむろにタンスの中を漁り、麻袋と丈夫な縄と金属バットを取り出した。

「その提案は有難いが、その、それは一体、なんだ？　何をするつもりなんだ」

「ん、ああ。オレは今から、ちょっと」

にぃ、と凍える様な笑顔を姫燐は浮かべて、

「人狩り、行って来るわ」

バタン、とドアを閉めた。

翌朝、女子寮にある噂が立ちのぼる。

深夜、肉が潰れる音と一緒に、必死に抵抗するような物音と、痛みに呻く、くぐもった苦悶の声が、どこからか聞こえてくるという……。

## 第８－１話　「箒の顛末と、一夏の末路」（後書き）

遅い！　絶対に遅い！
どうも、最近黄金バットにハマっているクラふぉうです。
自分の学校では夏休みも始まり、暇を持て余す……訳が無く、それでもやっとこさ完成した８－１話、いかがでしたでしょうか？
なんかマリオの面みたいな話数になってしまいましたが、これはこの前のアンケートで決定した、小出しでいく方針を取った結果です。
こんな感じに小出しして、完成したら一纏めにしようと思ってます。
夏休みの宿題があるので、春休みほどハイペースとはいかないでしょうが、ペースは多分アップすると思います。
それでは次回にお送りする、８－２話にご期待ください！

# 第８－２話　「白式、起動」

クラス代表戦が数週間後に控えたある日の放課後。
姫燐達は、数日前にようやくやって来た一夏の専用機、「白式」のテストを兼ね、もうすっかりおなじみの第三アリーナに集まっていた。ちなみに今回はちゃんと正式な手続きを踏んで使っているため、余計な事を心配する必要も無い。
代わりに、個人ではなく「１年１組」として登録せねばならなかったので、余計な人員はいくらか居るが……その様な事を一々気にしていては、年が明けても訓練なんぞできないだろう。実際に彼女達が確認した、アリーナ使用のスケジュール帳もそう語っていた。
クラスメイト達が放つ好奇目線の集中砲火に居心地の悪さを感じながらも、姫燐と一夏は予定していた訓練を開始した。

「うっし、一夏。起動してみろ」
「ああ、こい……白式！」

姫燐の声に、アリーナの真ん中で特注の男用ＩＳスーツに身を包んだ一夏は眼を閉じ、掛け声と共に右腕を突き出すポーズを取る。
ＩＳという兵器を扱うにあたって最も重要な要素は、イメージである。言いかえれば想像力とも言えるだろうか。
兵器としてそれはどうなのか、と聞かれれば、こちらも小首を傾げるしかないが、実際問題そうなのだから仕方ない。
装着する際、このＩＳという兵器はどういう仕組みか所有者の意思意図を読み取って、瞬時にその装甲を展開、装着することができる。その時、所有者の頭には『その装甲を呼びだして装着する』という意思が発生し、その工程をイメージしなくてはならない。
当然、イメージが速く、精確であればあるほど装着に時間を浪費することはなく、時を無駄に削らないという事は、古今東西いかな

る状況においてでも非常に喜ばしい事である。
その点では彼、織斑一夏は中々に優れた才覚を持っているようだった。
右腕に装着していたガントレットから出た、光の膜が彼の全身を包む。
光は徐々に激しさを増し、腕、脚、胸、肩、頭。五体の全てに白の、汚れ無き雲を思わせるほどに真っ白な装甲が展開されていく。
そして光が収まった先に立っていたのは、世界最強の装甲を身に纏う事を許された、世界唯一の男の姿。不覚にも、姫燐はその姿に一瞬見惚れてしまった。それ程にこの機体は、雄大で、力強く、美しかった。

「これが……俺のＩＳ」

その名に相応しい白となった両腕を、まじまじと見つめる一夏。
自分が憧れる強さ、その結晶とも呼べる最強の現代兵器。
彼の、織斑一夏のためだけに創造された、インフィニット・ストラトス。

「白式……か」

いやがおうにも、やかましい心臓の動悸が止まらない。
この時、周りにいた女子達のまるで街かどでアイドルにでもであったかのような喚きも、一切一夏の耳には届いていない。
今、この世界に居るのは自分と、白式だけ。
そんな錯覚すら覚えるほどに、一夏は興奮を覚えていた。

「うっし、上出来だ一夏。んじゃまずは、武装の確認から……おい、聞いてんのか？」
「え……あ、ああ。悪りぃキリ」

姫燐の声によって、ようやく現実へと戻って来た一夏は、言われた通り白式に積まれた武装を確認しようとして、

「……なぁ、キリ」

「やらせたい事をイメージしろ。大体のことは、それだけで出来るようになってる」

彼の質問を予想していたのだろう。要件を聞く前に答えを言う彼女に、敵わないなぁ、と少しバツを悪くしながら、一夏は頭から機体へ、伝令を走らせる。

（この機体の武器は……何だ？）

白式は主に対する返事の代わりに、一夏の目の前に薄く青いディスプレイを展開させる。

（おお……）

数週間前までは、普通にボタンを押したりしなくては言う事を聞かない機械しか扱った経験が無い一夏にとって、このＩＳという機械は、非常に感動的な代物であった。……掃除機と、現代最強の兵器を比べるのも、色々とアレなモノだが。

そんな庶民的な感動もそこそこに、一夏はディスプレイの内容に目を走らせる。

まず、最初に目に飛び込んできたのは、独特の形状をもった日本の魂。

「ほぉ、刀か」

「これ……千冬姉の……」

一夏は、この刀に見覚えがあった。
自分の姉、織斑千冬が優勝を果たし、その名を全世界に知らしめたＩＳの世界大会。第１回モンド・グロッソで操っていたＩＳ『暮桜』が扱っていた刀。
ディスプレイに、その名が浮かぶ。

「雪片弐型……千冬姉の武器……」
「へぇ、出してみろよ一夏」
「あ、ああ」

姫燐に言われるがまま、一夏はその手を伸ばして、

「キ」
「イメージだ」

もう少し人の話を聞いてくれてもいいのではないか。と、少し拗ね、同時に自分が聞きたかった答えであることに妙な悔しさも覚えつつ、それらを邪魔だとふり払い、一夏はまた想像する。
己の手に意識を、切り裂く刃を、姉と同じ力を……！
瞬間、装着したときと同じような光が手から棒状に伸びていき、鍔の無い刀の形を形成すると同時に、弾ける。
光が弾けた場所には、先程までは姿形すらなかった一本の刀……『雪片弐型』がしっかりと握られていた。
この機体を作ったのは誰だか知らないが、味な事をしてくれる。
自分が憧れた力、自分を守り続けてくれた力、自分の大切な家族を守り続けてきてくれた力。それと全く同じ物を、自分に授けてくれるだなんて。
一夏の口元が緩んでしまうのも、無理らしからぬことであった。

「……弐型ってことは、スキルもアレってことか……？　だが、あんなもんトーシロには……」

対象的に姫燐は雪片を見て、難しい顔でなにやら独りブツクサと呟いているが。

「ま、いいか。んじゃ次だ、他の武装は何がある？」

「おう、ちょっと待ってくれ」

流石に何度も言われて学ばないほど、彼も馬鹿ではない。
ＩＳに、他の武装は無いのかと、脳内で命令を飛ばす。
のだが、

（……あれ？）

何度イメージしても、ディスプレイには雪片弐型しか映らず、一向に他の武装が移らない。弾の家でよくやるゲームで見たライフルとか、ミサイルとか、レールガンとか、とっつきとかを予想していただけに、肩すかしを喰らったような気分になる一夏。

（壊れてんのかな？）

流石に、今日起動したばかりの機械が壊れるなどとは考えにくいが。とは思いながら、何となくディスプレイをコンコン、と叩く一夏。社会をひっくり返したスーパーウェポンであろうとも、やはり彼の中ではテレビか何かとそう変わらないようである。

「どうした、一夏。やり方なら」

「いや、そうじゃないんだ。さっきから命令してんだけど……」

ふーん！　と、気合を入れて唸った所でやはりディスプレイはうんともすんとも言わずに雪片弐型を映し続けるのみ。どうやらこれは本格的に、

「なぁキリ。ＩＳも保証期間内なら修理できるよな？　あーでも、そもそも契約した覚えないし、保障ってあるのかな？」

「……一夏、お姉さん怒らないからいっぺんだけ聞かせろ。お前は、ＩＳを、一体何だと思ってんだ？　もしかして、電気屋とかに並んでる掃除機とかテレビとかと同類に思ってないだろうな？」

「んなわけないだろう、いくらなんでも値段が違いすぎる」

「……」

「「「……」」」

「……？」

姫燐どころか、先程まであれほど騒いでいた周りのギャラリー達も沈黙するこの状況に、自分は何かとてつもなくマズい事を言ったのかと思案を巡らせ、

「ああ、そうか」

ようやく合点がいったのか、手の平に拳をポンと乗せると、

「そうだよな、ＩＳは電気屋には置いて無いもんな」

「「「そこじゃねぇぇぇーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」」」

一夏はやはり、姫燐を含む、この場に居る女子達全員の異議に、首を傾げるしかなかった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8614r/

ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　―I AM…ALL OF ME…―

2011年7月22日03時09分発行